
軽音部活動日誌！

風の旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽音部活動日誌！

【Nコード】

N3036I

【作者名】

風の旅人

【あらすじ】

これは、ひよんなことから軽音部に入部することになった主人公と軽音部のメンバーとの、他愛ないけれどもかけがえのない物語。他作品からも色々なキャラクターが登場します。

第一奏（前書き）

オリキャラが出ているので注意してください。

第一奏

もうすぐで秋も終わり、雪が降るのも時間の問題となっているある日のこと

「はあ……」

俺は机に座って、深いため息をついていた。

俺の名前は水月^{みなづき}蓮^{れん}。ごく普通の中学3年生である。

するとそこに、

「どうしたの蓮君？ため息ついていると幸せが逃げちゃうよ。」

そんな呑気なセリフを言いながら近づいてくる茶髪でぼわぼわした女性がいた。彼女の名前は平沢唯。性格は一言で言うなら天然ボケで、俺のクラスメイトである。

「うるさいわい。俺だって好きでため息をついているわけじゃない。」

「

「じゃあ何で？」

「それはだな…」

そう、あれは数分前のこと…

（職員室にて）

「は？今なんて…」

「だから、お前は私立桜ヶ丘高校に入学することになったから。」

私立桜ヶ丘高校。そこは女子校なのだが、再来年度から共学になる
とのこと。

そこで何人かの男子を試験的に入学させることになったようだ。全
く、ふざけたシステムである。

そして、俺にその白羽の矢が立ったのだそうだ。何故かは教えてく
れなかった。

「あとこれはもう決定して変えられないから。」

マジかよ。俺には反論の余地も無いわけだ。

「はぁ…分かりました。」

そう言っつて俺はトボトボと職員室を後にした。

そして現在に至るわけだ。

「へえ〜そうなんだ〜」

なんとも言えない間の抜けた返事をする唯。

「でも、桜ヶ丘高校だったら私も目指してるし大丈夫だよ」

なにがどう大丈夫なのか、誰か分かる人がいたら説明してほしい。

「ま、桜ヶ丘なら私も受けるし知り合いには困らないでしょ?」

いきなり後ろから声が聞こえたので驚いて振り返ってみると、見慣れた姿があつた。

真鍋和。眼鏡が似合う女子で、俺や唯と同じクラスだ。

とつかいきなり後ろから話しかけるのはやめてほしい。正直かなりびっくりする。

「とつかいつからいた?」

「あんたがため息をつく理由のところから」

つまり最初からってことだ。

「ま、前向きに頑張りなさい。」

それだけいうとさっさと自分の席に戻っていった。

一体何をしたかったのだろう。

俺は本日何度目になるか分からない深いため息をついた。

第二奏（前書き）

基本アニメの流れでいこうと思います。

第二奏

朝

それは地球が回り続けるかぎり必ず来るものであり、多くの人が目を覚ます時間帯だ。

俺もその例外でなく、目を覚ました。

ベッドから出て携帯で時間を確認してみると、

7:03

と表示されていた。入学式は9時からなのでまだ十分に時間がある。そう思い俺はのんびりと準備をした。

結局俺も和も唯も落ちることなく無事に桜ヶ丘高校に合格した。そして今日は俺達の入学式の日である。

そんなことを思いながら時計を見ると、8時前になっていた。

「そろそろ行くか」

と言って誰もいない家を出た。

通学路をゆつくり歩いてみると、見慣れた姿を遠くに見つけた。

「あれ唯じゃねえか。しかもパン食いながら走るとかえらい古典的だな。」

きつと時間を見間違えたりしたのだろう。そう思いながら俺は学校へ向かった。

無事に入學式も終わり、1週間程過ぎた日の昼休み、俺は先日貰った入部届とにらめっこしていた。運動部はバイトがあるのでパス。となると

「文化部しかないよなあ。でもどこにしようか…」

そう悩んでいると、

「水月蓮君だよね？」

そう呼ばれたので顔を上げると、同じクラスの田井中、秋山、琴吹の3人が立っていた。

ま、秋山はすごく申し訳なさそうな顔をしていたが…

「率直に言う、軽音部に入れ、蓮!！」

「それじゃ率直過ぎるだろ!!!」

いきなり田井中がそんなことを言い、秋山がそれに突っ込んだ。

「だつてえ〜」

田井中がなにかぐずっているようだが、まあそれは置いて、

「ああ、いいよ。」

俺がそう言つと、「」「え…」「」と言つて3人が固まっていた。そしてすぐに

「やったー、部員確保!！」

「じゃ、律!

でも本当にいいのか?」

「そうですね。無理やり入部させるわけには…」

三者三様の返答をされたが、俺は

「構わないよ。他に入りたい部活もないし、軽音部も面白そうだし。これからよろしくな、皆。」
と言った。

「ああ、よろしくな、蓮。せっかくだし名前で呼ばうぜ。」いきなり律がそんなことを言い出した。

「私のことはムギで構いませんわ、蓮さん。」

琴吹も続き、

「ほら、漣も」

「う、うん…よろしくな、れ…蓮……」

田井中のおかげで秋山もなんとか続いたみたいだ。

「ああ、よろしくな、律、漣、ムギ」

そうして俺の新しい生活が始まった。そうして俺の新しい生活が始まった。

それから数時間後…

放課後になったので俺たちは音楽室にいた。

「で律、あと一人はどうするんだ？」

「来るまで待つ！」

俺の質問に対し、堂々と答える律。

俺は人知れずため息をついた。

そう、我らが軽音部は4月中に5人部員がいなければ強制廃部なのだ。

そして現在の部員は4人。

そう、このままいけば間違いなく廃部である。

そういう訳にもいかないので俺たちは結局近くのファーストフード店で、律が命名した「新入部員獲得大作戦」なるものを行うことになった。

果たしてうまくいくのだろうか…。

第三奏（前書き）

この次でアニメの1話を終わらせる予定です。

第三奏

翌日

俺達は1人1枚ずつ紙を持って音楽室にいた。

結局昨日決まったことは翌日までに1人1枚部員勧誘のポスターを描いてくることだった。

「せーの」

律のかけ声で俺たちは一斉に絵を見せた。

数日後

4月もあと一週間

未だ部員獲得ならず。このままでは廃部一直線。

「やっぱり俺みたいにポスターにもっとインパクトを持たせた方がいいんじゃないかったのか？」

「いや、あれは絶対にダメだ。」

漣と律に即座に否定され、ムギには苦笑いをされた。

「確かにあの中では一番下手だったが、何もそこまで……」

「いや……だってあれは……なあ……」

「ああ、すごいひどかった。楽器としての原型を留めて無かったもん。」

遂にダメ出しまでくらってしまった。

え？どんな絵を描いたって？
それはご想像にお任せする。

そんな事を話していると、音楽の担任の山中先生が入ってきた。

「皆、入部希望者がいたわよ。それと水月君、真鍋さんが生徒会室に来てほしいって。」

「和が？分かりました。」

入部希望者が気になるが、呼ばれているなら待たせるわけにはいかない。

そうして俺は生徒会室へ向かった。

「疲れた……」

「ふふ、お疲れ。」

和の手伝いは休み時間だけでは終わらず、放課後までかかってしまった。

「んじゃ、もう行くわ。新入部員を歓迎しなきゃいけないから。」

そうして生徒会室を出ようとした時

「ねえ、蓮つてもしかして軽音部？」

いきなりそんな質問をされ、驚いた。

そういえば何も言っていなかったなあ…

「ああ、そうだけど。言っていなくて悪かった。」

「いや、それはいいのよ。それよりも……。やっぱり何でもないわ。」

あの和がこんな事を言うとは…

逆に気になるが、敢えて聞かないでおこう。

その代わりに

「何を思い悩んでいるかは知らんが、一人だけで背負い込むなよ。相談くらいならいつでも乗ってやるからよ。」

と言って頭をポンと叩いた。

「ふふふ、ありがとう。そうさせてもらおうわ。」

「おう！じゃあな。」

そう言って今度はその部屋に向かった。

何だ、この状況は…

それは部屋に着いて真っ先に出てきた疑問だ。

固められた机の上にはケーキや紅茶が並び、誰かが椅子から立って泣いていたのだ。

って、よく見たら、

「お前、唯じゃねえか。」

「あ、蓮君だ〜」

いつの間にか唯は泣き止んでいる。

「ったく、一体何があったんだ？」

そう言いながらもう一度机のケーキと唯を見つめる。

成る程、そういうことか。

「簡単に言えば、ケーキで唯を釣ろうとしてたと……」

「ええ、後半からそうなっちゃって……」

ムギがそう言った時、俺はため息をついて三人を諭すように言った。

「俺達は軽音部だ。ケーキよりも、もっといいものがあるじゃないか。」

「もっといいもの……そうか、演奏だ、演奏があつた。」

透が一番はじめに気づき、続いて他の二人も気づく。

「唯、俺達の演奏を聞いてくれるか？」

「うん！」

こうして、観客は1人、舞台は音楽室という、小さな演奏会が始まるうとしていた。

第四奏（前書き）

これでアニメの1話が終了です。

第四奏

ケーキのほのかな甘い匂いが漂い、窓からは飴色の光が差し込んで
いる…

そんなどこか神秘的な感じがする我らが部屋では、俺たちが楽器を
チューニングする音だけが鳴っていた。

そうは言っても俺は今日楽器を持ってきてないので端っこで見学だ
けど…

すると突然音が止んだ。どうやら皆チューニングが終わったらしい。

「ワン、ツー、スリー」

そんな律の合図で「翼をください」の演奏が始まった。

技術面ではきつとまだまだなのだろう。けれどもちゃんと安心して聞くことが出来る、小さな感動がそこにはある

そんな演奏だった。

演奏が終わったその時、唯も感動したのだろう、立って拍手をしていた。

「えへへ、どうだった？」

「なんて言うか、すごく言葉にしにくいんですけど…」

何かいやな予感がする。

「あんまりうまくないですねー！」

随分とまあバツサリ言っちゃったなあ、おい。

「でも、すごく感動しました。私、この部に入部します！」

俺を含めて皆が夢だと思っているのか、律と漣、俺とムギがそれぞれ互いの頬を引っ張り、数秒後

「やったー！」

律が歓喜の声を上げた。

「んじゃ早速……」

「あ、それ私の……」

カメラを取り出したと思ったら漣のかよ！？

というか漣は毎日このフィルムカメラを学校に持ってきているのだらうか？

「いっくよーん」

そう言ってシャッターをおしたが、おそらく律はでこしか写ってないだろう。

「でも私楽器全然出来ないし…あ、マネージャーとしてどうか？」

いやいや、運動部じゃないんだから…

「そうだ、これを機にギターを始めてみたら？」

ムギがそう言うと、

「でも、ギターって何だか難しそうだし…」

「大丈夫、分かんないところは俺が教えてやるよ。」

!!!!!!!!!!!!

急に約二名の視線を感じる。

「蓮さん、ギター弾けるんですか？」

「そんな事全く聞いてないぞ!!」

「おい、律！二人に言っておいたんじゃないのか？」

律は数秒考え込んだあと、

「ゴメン、すっかり忘れてた。」

なんてこつたい。

そう思いため息をついた後、何故か俺まで濇に説教された。

ま、何はともあれこれから頑張っていけますか。

「おい、蓮！ちゃんと聞いているのか？」

「おう、ちゃんと聞いてるぜ。」

「まったく…」

遷の説教はまだまだ続きそつだ…

第五奏（前書き）

今回は早くもあの人の登場です。

あと何か見たことのある展開かもしれませんが気にしないでください。

第五奏

「あゝ、今日は疲れた…」

結局、漣の説教から解放されたのは太陽が沈みきる少し前だった。唯とムギは説教のはじめの方に帰らせ、律と漣は俺が家まで送って今はその帰りである。

道が暗い…

これが俗に言う黄昏ってやつか。

そういえば黄昏って昔の言葉の「誰そ彼れ」から来てるんだっただけ？

そんな豆知識を考えていたら、いつも使っている近道に着いた。

ここを使えば通学時間が10分ほど短くなるのだが、路地裏で人通りがほとんどないのでたまに不良の溜まり場になってたりする。そこを女性1人で歩こうものなら、不良に絡まれること間違いなしであろう。

「やめてください!！」

「いいじゃんかよ嬢ちゃん」

「嫌です、離してください!！」

そうそう、こんな風に……

ってオイ!!

本当に絡まれてるし……

見過ごす気はさらさらないので学ラン姿の4人の不良の内、女子中学生であるツインテールがよく似合う小柄な女の子の腕を掴んでいる1人の手首を握るべく早歩きで駆け寄った。

はずだったが…

カーーーン

「あ……………」

やっちまった…

早歩きをするあまり足元に注意を払わず、近くにあった空き缶を思いつきり音を立てて蹴飛ばしてしまった。

「ああん、何だデメエ？」

ま、見つかるわな。

「その子の手を放してやりな。」

そう言って今度こそ不良の手を握る。ちなみに俺の握力は70？才バーだ。

「あいだだだだ」

なんとも痛そうだなあ…

ようやく不良が女の子を離したので俺も不良の手首を握るのをやめる。

「くそっ、誰だてめえ！」

そう聞かれたのでお決まり(?)のセリフを言った。

「誰って…ただの学生だよ。」
そう言うとしばし呆然とした後、お互いの顔を見合わせた。

何なんだこいつら？
すると、

突然腹を抱えて笑い出した。

なんかすごくムカつくなあ…

「何を言い出すかと思ったら、ただの学生だってよ。笑わせるぜ！」

「そーそー、ただの学生ならとっとと家に帰って寝てな！」

そう言って不良の1人が俺を掴もつと右手を伸ばす。

「そういう雑魚っぽいセリフは…」

俺は左によけてその袖を引っ張り足を引っ掛けて

「死亡フラグだぜ」

半回転させて仰向けに投げ飛ばした。

「くっ、なんだこいつ!」

「くそっ、うおおおおっ」

もう1人が走ってこっちに向かってきた。その手にはナイフが握られている。

「ひっ!」

ナイフを見て女の子の表情が恐怖に染まった。

「大丈夫、すぐに終わる。」

俺は出来るだけ優しくそう言い、ナイフを避けた。

「うおおおおっ!」

さっきと変わらないセリフを言いながらまた向かってくる。

「これで終わりだ」

そう言って右手を前方に伸ばし、さっき投げ飛ばした不良の学ランからかすめ取ったボタンを親指で弾き飛ばした。

「ぐあっ…」

そのボタンは向かってきた不良の額に命中し、不良は後ろに吹っ飛ばされてそのまま気絶した。

え？これじゃ超電 砲（レー ガン）を撃てるどっかの電 使い（エレク ロマスター）じゃないかって？

心配しなくても俺はあんな電気を出せねえよ。

「おい」

俺は残った2人の不良に睨みをきかせた目で言った。

「さっさとこいつら連れて帰りな。」

「くっそー」

「覚えてろよ！」

そんなベタな捨てゼリフを残し、のびた2人を背負って逃げた。

「さてと、大丈夫か？」

未だぼうっとしている女の子に、落ちていたカバンを渡す。

「は…はい、大丈夫です！」

顔を真っ赤にしながらそう答えた。

「あの、何かお礼をさせてください！」

「いや、別に俺は…いいよ、お礼なんて」

「それじゃ全然ダメです!!」

どうやら彼女は納得出来ないらしい。

「じゃあ今度会ったときに名前を覚えてくれないか？」

「むう…分かりました…。また会えますよね？」

「ああ、きつと会えるさ。」

俺はそう言っ
て彼女を安全な場所まで送り、
今度こそ家に帰るべく
歩き出した。

はっきり言っ
て俺はこの時はもう彼女に会っ
たことは無いだろうと思
っていた。

あんな事が起きるまでは……

第六奏（前書き）

小説って難しい…

第六奏

ある日の放課後

俺たち5人はいつも通り部活デイトタイムを楽しんでいると、

「何で蓮君はギターをやろうと思ったの？」

突然唯がそんな事を聞き出した。

「ん、俺か？俺はなあ…昔友達に勧められたんだ。」

「ほえ？友達？」

「ああ、いつもしつこいくらい誘われてな…昔は一緒によく弾いたもんだ……」

そう、昔はな…

あれ？何か微妙な空気だ…

「ところで唯、ギターは買ったのか？」

空気を変えるために俺はそう言った。

「そうだった、平沢さん。ギターは？」

「唯でいいよ。」

「え？」

「だって私、澪ちゃんのことすでに澪ちゃんって呼んでるし。」

「それじゃあ…」

澪は顔を真っ赤にして、

「ゆ…唯……………」

恥ずかしながらそう呟いた。

なんかすごく可愛いな…

こついつのを癒し系と言っのだろうか？

「か…可愛い……………」

唯も同感だったようだ。

とうにか何を話してんだっけ？

「あ、そうだ唯！ギターだよギター！もう買ったのか？」

唯の顔が呆けること数秒…

「あ、そうだ。私ギターをやるんだった。」

「軽音部は喫茶店じゃないぞ。」

漣…ここはもうほとんど喫茶店になっている気が……

「でもギターっていくらぐらいするの？」

「安いのは1万円代からだけど、あんまり安すぎるのも良くないからなあ…5万円ぐらいのがちょうどいいかも。」

「私のお小遣い10ヶ月分…」

ひと月5000円ってけっこう貰ってやがる…

「まあ高いのは10万円いくやつもあるぞ。」

何となく俺は追い討ちをかけてみた。
すると唯は何か考え込む仕草をして、

「部費で落ちませんか？」

「落ちません」

ま、予想通りだ。

「唯、諦めろ。自腹で買え。」

「……………そうだ！皆で週末にギターを見に行こうぜ！」

突然律がそんな事を言いだした。そして週末

俺、律、漣、ムギは揃っているが、肝心の唯がまだ来ない。

「うーん、遅い。」

俺はあくびをかみ殺しながら言う。

「まあ、そのうち来るだろ。」

そう澪が言っていると、

「ゴメーン、遅くなって。」

数メートル先に唯の姿が見えた。

のだが…

人にぶつかったり、犬と戯れたりしており、なかなかたどり着けな
いでいた。

数時間後

何だこの状況は…

「あー楽しかった。」

「えへへ、買った買った」

唯と律がそうつぶやく。

「次どこ行こっか?」

完全に遊び気分でいやがる。

なので俺は唯の頬をつまみながら、

「唯、ギターはどうした?」

と言った。

「ふあ、ふおうはっは(あ、そうだった)。」

どうやらやっと思い出したようだ。

俺達はあれからアクセサリー店に行ったり、ゲーセンに行ったりと遊んでばかりでギターのギの字も出なかったのだ。

他の皆も忘れていたようで、驚いた顔をしている。

そうしてようやく楽器屋に行ったのだが、行って早々唯は湊の説明も聞かずに、あるギターだけを見ていた。

ふむ、ギブソンのレスポールか。

けどこれネックも太いし、何より重そうだ。

けど唯はそんな事など全く気にしてないご様子。

だけど、

「唯、値段が…」

「あ……………」

唯の所持金

5万円

ギターの値段

15万円

買えないという悲しさを

プライスレス

じゃなくて、

買えないという現実には、唯ががっかりした顔をする。

すると律が、

「そっだ、皆でバイトしようぜ！」

と言った。

「皆でバイトしてギターを買おうってことか？」

「そっいつこと。」

こうして皆でバイトすることになった。

ちなみに、

律の値切りの武勇伝に、ムギが憧れを抱いたのはまた別の話。

第七奏（前書き）

新オリキャラが登場です。

第七奏

唯のギターを買うためにはあと10万円必要だ。
けれども他にバイト出来そうな所もない。

となれば最終手段を発動させるしかない!!

「で、あたしの所に来たと…そういうわけね？」

「ええ、その通りです。店長。」

俺は目の前にあるコーヒーを飲みながら言った。

ここは喫茶店『ル・ジエ』

俺がバイトしている場所である。
そして今俺と話しているのがこの店の店長だ。

「で、その最終手段って何？給料の増額以外なら相談に乗るけど？」

ぐ…読まれていたか……………。

そんな俺の様子を見て店長は、

「あのねえ…あんだこの店を潰す気？ただでさえ客が少ないっていうのに……………」

そう、店長の言うとおりこの店にはあまり客が来ない。どのくらい来ないかというと、営業中にこつしてのんびりお茶していられる程なのだ。

そんな中、

「給料の増額は無理だけど、新しいバイトの紹介なら出来るわよ。」

紅茶を飲んで店長がそう言った。
俺にとってはまさに渡りに船だ。

「その仕事の内容はなんですか？」

「ん？中学3年生の家庭教師。日曜日の週一回、今週からよ。」

「ちなみに教科は？」

「数学。あなたなら大丈夫でしょ？」

ま、それだつたらいいか。

美術関連なら即断っているが…

「というか、その仕事って誰かから頼まれたんですか？」

「ええ、昔の知り合いにね。娘をよろしくって言ってたわ。」

ということとは女子かよ…

そう思ったけれど今断るわけにもいかないの、「分かりました、引き受けます。それでその子の名前はなんていうんですか？」

「え〜っと…確か「きゃあああ！！！！」」

店長の話を遮る悲鳴が聞こえ、同時にバサバサバサツという無数の紙が落ちる音が聞こえた。

「もしかして、またあいつですか？」

「ええ、そのようね。。。」

実際こんなトーンが高い悲鳴を聞くのは初めてではない。

俺はため息をつきながら店長と店の奥へ向かった。そこには、書類を挟んである多くのファイルが散乱しており、その近くには倒れた脚立が1つ、そして目を回して床に大の字になっている少女が1人という、予想通りの光景が広がっていた。

「おい小春、大丈夫か？」

「はい、らいじょうふれす〜」

少女はショートヘアな頭をさすりながらそう言った。

大丈夫なら、せめて目じゃなくてろれつの方を回して欲しい。

彼女の名前は佐山小春^{さやまこはる}。ご察しの通り、かなりのドジっ娘であり、俺と一緒にこの店でバイトしている。

え？ドジっ娘に仕事が出来るかって？
ところがどっこい、ちゃんと仕事出来てるんだ。
理由は追々話すでしょう。

「で、今度は何をしていたんだ？」

「ちよつと書類を整理しようと思って…。」

「脚立を使って棚の書類を出そうとしたらその脚立ごと倒れた。大
体こんな所だろ？」

「な…何で分かつちゃうんですか？まさか蓮さんはエスパーなので
は…？」

「経験に基づいたただの推測だ。」

「ほえ？蓮さんいつもドジなんて踏んでましたっけ？」

「いや、お前がドジを踏む姿を見るという経験だ。」

何というか、ぼわぼわした声といいドジさや天然さといい、唯にそ

つくりだ。

とその時、

カランカラン

来客を告げる店のベルが鳴った。

「蓮、接客お願い。」

「はあ、了解しました。」

店長の投げやりなお願いに対し、こっちも投げやりな返事を返して
店内に向かった。

「いらっしやいます……せ……」。

「あ……あなたは……」

俺は客の顔を見てそのまま固まってしまった。

店のドアには、腰まで届きそうな黒髪のツインテールをした少女が立っていたのだった。

おい、マイゴッドよ、これはどういふことなんだ？

第八奏（前書き）

次からはもうちょっと話をコンパクトにまとめた方がいいかもしれない…

第八奏

「お久しぶりです。中野梓…です…、あの時はありがとうございました…。」

「ああ、どういたしまして。俺は水月蓮。よろしくな。」

「はい、よろしくお願ひします！」

あのあと俺は中野さんを店内の席に案内して、あの日の約束を果たすために名前を聞こうとした。すると、「あ…あなたの名前も教えてくださいませんか…？」と言われ、俺も名前を教えることになったのだ。

「あの…あなたのことを蓮さんって呼んでもいいですか？それと私のことも…名字じゃなくて…名前で…お願いします…。」

う…これは男として断るわけにはいかない。もし断る野郎がいるなら俺はそいつが泣くまで殴るのをやめないだろう。

「ああ、分かったよ、梓。」

「あ…ありがとうございます、蓮さん！」

「ふうん、なかなかいい雰囲気じゃない」

「いいなあ、うらやましいです…」

突然背後から声がしたので振り返ってみると、予想通り店長と小春がいた。

「蓮、一体どういふことか説明してもらおうよ。」

「蓮さん！私も是非聞きたいです！」

と言って店長は怪しい笑みを浮かべ、小春は目をキラキラさせてやる。

こんな状況じゃ説明しないわけにはいかないの、俺は渋々あの日のことを話した。「なるほどね…。なかなかやるじゃない、蓮。」

そう言って店長は楽しそうに俺に肘を小突いてくるし、

「ああ…蓮さんが白馬の王子様かあ…そういうの私も憧れます……。」

「

小春に至ってはもはやキラキラを通り越してうっとりしてやがる。

「あのなあ小春、俺は貴族っぽい衣装も馬も持ってないぞ…。」

すると小春は、

「む、蓮さんは夢がなさ過ぎです!」

頬を膨らませながら批判してきた。

お前のは夢じゃなくて妄想だっつーの。

「まあそれは置いていて、あなたが中野梓さんね?」

「あ、はい。」

すると店長は俺を見て

「この子があなたの生徒よ。」
いきなり店長がそう言った。

え？ちよつと待てよ…今の店長の発言によると……

「あの、もしかして私の家庭教師をして下さる先生って……」

「ええ、蓮のことよ。」

すると梓は目を輝かせて、

「蓮さん、これからご指導よろしくお願いします……！」

どうやら神様は妥協というものを知らないらしい。

ヒマワリのように明るく純粋な笑顔を向けられた俺は、他の部員のみんなはどんなバイトをするんだろつということを考えていた。数日後

俺たちは再びあの楽器屋に来ていた。

「へえ、お前らは交通量調査やったのか。」

「ああ、皆でやっててなかなか楽しい時間だったぜ。」

楽しい交通量調査って想像できないんだが…

「お前はもっと真面目にやれ！」

溼のツッコミが入る中、唯はというと、

「……………」

やはり前と同じギターを見ていた。

よっぽど欲しいんだろうな…

「ようし、もう一度皆でバイトするか！」

「今度は無理してでも俺も加わるぜ。」

時間なんてなんのそのだと思っていたら、

「あの、ちょっと待っててね。」

ムギが会計の方へ走っていった。

数分後

「このギター5万円で売ってくれらって」

満面の笑顔を見せるムギがそこにいた。

「何？何やったの？」

「このお店、実はうちの系列で…」

マジかよ…

理由には納得したが、やはり驚きは隠せなかった。

明くる日の放課後

俺たちの前で唯は買ったばかりのギターを肩に掛けていた。

「おお、カッコいいじゃん。何か引いてみせてくれないか？」

そうした俺のリクエストで演奏された曲が、

「
」

え〜っと…

チャル ラ？

「まだ全然練習してないのか？」

「いや〜、ギターってキラキラピカピカしてるからなんか触りにくくて…」

「「弾けよ…」」

俺と律のツッコミが重なる。

まあこの後も律が唯のギターのフィルムを剥がしたり、唯がアンプのポリウーームを下げずにシールドを抜いて部屋に爆音を響かせたりと波乱万丈な我らが軽音部。

でも、着実に前に進んでいる。

これからどうなるか分からないけど、何とか頑張っていこう！

俺は爆音から逃れるために耳をふさぎながらそっ心に誓った。

第九奏（前書き）

ああ、メルブラのアクトレスアゲインをやりたいなあ…

第九奏

「ギターの弦って怖いよねー。細くて硬いから指を切っちゃいそう。」

唯がそんな事を呟いた。

今俺たちは珍しくちゃんと練習をしている。

願わくばもう少し練習の頻度が増えてほしいところだ。

そう思いながらふと律の顔に目をやると、ニヤリした表情を浮かべていた。

「そうだぜ、気をつけないと指がスパーっと切れて血がドバーっと」

「キヤーーーー！！！！！！！！」

律の冗談に澪がいきなり悲鳴を上げた。

「澪ちゃんが悲鳴を……」

「い……痛い話はダメなんだ」

そう言って耳をふさぎしゃがみ込んでしまった。

俺はと言つと、いきなり近くで叫ばれたことによる動悸と耳鳴りに襲われていた。

「大丈夫だよ。ほら、本当に血が出てるわけじゃないし。」

唯に指を見た漣は急に表情が明るくなり、

「……おほん、まあ練習しているうちに指の先が硬くなるから、血が出たりすることはないよ。ほら」

そうして今度は自分の指を見せた。

「あゝ、ホントだゝプニプニ」

いや、唯、プニプニってまるで漣と話がかみ合っただけぞ……

「プニプニ」

「あの、もういいかな？」

「あ…あともうちよっただけ！」

おいおい、練習はどうした…

「でも、ギターの練習って何からすればいいか分からないや。」

そつえば唯にまだ何も言っでなかつたなあ…

「まずはギターのコードを覚えるといいよ。」

そう言いながら遷がカバンから『サルでも分かるコード』と書かれた本を取り出して、唯に渡した。

「ま…まずは楽譜の読み方から教えて下さい。」

「そこから!？」

「だろうな…」

「そう思い、俺はため息をついた。」

「え…っと、これがこで…」

「今は部活後の帰り道。」

「唯はコードの勉強をしていた。」

「唯、蓮!」

後ろから突然和の声が聞こえた。

「あ、和ちゃん！」

唯は手を挙げたが、指の形がコードのまま固まっている。

「何それ、新しい挨拶？」

「ま、気にすんな。」

そうして三人で並んで道を歩く。

「そういえば和、今日は帰るの遅いけど、何か用事でもあったのか？」

「ちょっと中間テストの勉強してたから……」

「ふん……」

「え？中間テスト！？」

「またコードかよ…」

「というか、テストの日程ぐらい確認しとけよ…」

「どうすんだ、唯？」

「というか唯、あんたテスト勉強なんてしたことないんじゃない？」

「そっか、なら大丈夫だね」

「何が？」

俺と和の声が重なる。

あえて言おう、大丈夫じゃないと！

放課後

「あーやっとテストから解放されたぜ〜」

「疲れた…」

「高校になって急に難しくなって大変だったわ。」

「そうだな、そして…もっと大変そうな奴がここに…」

俺たちの視線の先には目だけは笑ってない唯がいた。

「そんなに悪かったのか？」

「ふっふっふっ…クラスでただ1人…追試だそうです……」

唯の手には12点の数学のテストが握られていた。

「こ…今回はたまたま勉強の仕方が悪かっただけよ。」

「そうだって、勉強すれば追試なんて余裕余裕！」

ムギと律がフォローを入れるが、

「まあ勉強は全然しなかったんだけど」

「励ましの言葉を返せ！コノヤロー！！」

唯の一言はそれらを全て一蹴してしまった。

「何で勉強しなかったんだ？」

「いや〜だって、テスト週間って勉強以外のことに集中出来たりしない?」

「あゝ、部屋の掃除がはかどったりな。」

律あたりはホントにそうになっていた気がする…

「それで勉強の合間にギターを弾いてたら抜け出せなくなっちゃって…」

唯のことだ、教科書を放り出して楽しそうにギターを弾いていたんだろ?。

「でもおかげでいっぱいコード弾けるようになったよ。」

その集中力を少しでも勉強に回せば結果は違っただろうに…

「そつえばりっちゃんはどうだったの?」

「ん?あたしはほら、この通り!」

律の点数はと…

89点…

正直意外だった。

「こんなの、りっちゃんのキャラじゃない…」

「私くらいの人間になれば何でもそつなくこなすのよ。オーツホツホツホツ」

「テストの前日に私に泣きついてきたのはどこの誰だったっけ？」

「あ、漣！バラすなよ！」

ふと唯の方を向くと、

「それでこそ、りっちゃんだよ！」

「赤点とった奴に言われたくねえ！」

唯が清々しい顔で言ったことに律が反論するが、正直五十歩百歩な

んじゃ…

「澪ちゃんとムギちゃんと蓮君はどうだった？」

そう言われて俺たちもテスト用紙を出す。

「すごい、さすがだね。」

「ま、まあ私はちょっとポカミスしちゃったからな。」

律の奴、必死に取り繕っているようだな…

「……………」

「頼むから何か言ってくれ……………」

何故か哀れみすら感じてしまうのだった。その翌日

「追試の人は、合格するまで部活動禁止だつて。」

……はい？

「おい、唯！ということはここに来るのもまずいんじゃないのか？」

「大丈夫だよ、お菓子食べに来てるだけだし。」

「あゝそれなら大丈夫……って何でやねん！」

律が唯にチョコレートスリパーをかける。

ちなみに今日のお菓子は羊羹である。

「じゃあもし唯が追試に合格しなかったら部員が足りなくて廃部になるんじゃない？」

「え？マジか？」

律が驚きの声をあげる。

「追試まであと何日なんだ？」

澪が質問する。

「一週間後」

「一週間後か…」

俺と澪はその微妙な猶予でどうにかなるかを考えてみる。

「それだけあれば毎日ここに来て大丈夫だよね」

はいドッカーン

「それだけしかないの！」

皆を代表して溲がつっこむ。

「唯！受からなかったら廃部だぞ、廃部！」

「そつだよね、私、頑張る！」

唯は音楽室を飛び出した。

果たして本当に頑張れるのか？

限りなく不安だ：数日後

「と言っわけで溲ちゃん助けて〜」

唯が漣に泣きついていた。

ある意味予想通りの光景だ。

「勉強したんじゃないの？」

「出来なかった…」

だろうな

「このままじゃ廃部になるな…」

「そ…それだけは絶対ヤダ！」

なら勉強すればいいのに…

漣は少し考え込んだ後、

「よし、今夜は特訓だ！」

という提案をした。

「おお、それはいいな、澪は教えるのうまいんだぜ。」

そう言われて澪はどつやら照れているようだ。

「一夜漬けのやり方」

「うお、い、普通に教えるよ！」

そうして今夜は皆で唯の家にお邪魔することになった。

第十奏（前書き）

寒さで危うく風邪をひくところでした。

第十奏

「今日はお父さんは出張でお母さんも付き添いでいないから、気兼ねしないでいいよ」

「あれ、確か妹がいるって言ってなかった？」

「それってお邪魔なんじゃ…」

「大丈夫だよ」

漣、律、ムギは何かを考え込んでいる。

きつと唯とそっくりな妹を想像しているのだろうか…

俺は何回か面識があるが、会うまでは3人と同じ様な想像をしていた。

く平沢家く

「ただいま」

「「「「お邪魔します。「「「「

「お姉ちゃんおかえりー。あ、お友達ですか？初めまして、平沢憂です、いつも姉がお世話になってます。」

「よ、久しぶりだな憂。」

「はい、お久しぶりですね。蓮さん！」

そう言うやいなや、今度は人数分のスリッパを出した。

何というか、相変わらず出来た子である。

他の3人は予想通りしばらく呆然としていた。

〈唯の部屋〉

「しかし、よく出来た妹だな。」

「憂ちゃんにいいところ全部吸い取られたんじゃないのか？」

「ト、トドコロ！」

すまんが唯、俺も律と同意見だ。

ガチャッ

「皆さん、買い置きで申し訳ないですけど、お茶とお菓子をどうぞ。」

「

何というか、本当に出来た子である。

唯はともかく、出来れば小春にも少しは見習ってほしいところだ。

そんなこんなで、唯の勉強会が始まった。

ちなみに役割は漣と俺が主体となって教え、たまにムギがサポートをするといった感じだ。

そうになると必然的に暇な奴が1人いることになる。

そう、律だ。

案の定1人暇そうにしており、マンガを 読んで笑ったり、唯にちよっかいを出していたので、遷にげんこつを喰らい、外に追い出されてしまった。

「ふえ、もうダメ。集中力が持たない…」

「始まってからまだ30分もたつてないぞ。」

「唯、もう少し頑張れ！」

「そうよ唯ちゃん、お菓子を持ってきたから後でみんなで食べましょっつ。」

それをきいた瞬間、唯の手がもの凄く早く動き、次々と問題を解いてゆく。

とそこに、

ピンポーン

チャイムの音が鳴った。

「唯、勉強はかどってる？」

「あ、和ちゃん！」

部屋に入ってきた和は、手にバスケットを持っていた。

「ねえ唯、そちらが軽音部の皆さん？」

「うん、左から秋山澪ちゃん、田井中律ちゃん、琴吹紬ちゃん。」

「」「初めまして」「」

「初めまして、真鍋和です。唯とは幼稚園からの幼なじみで、蓮とは中学生からの付き合いです。」

そうして一通りの自己紹介が済んだところで、ムギが持ってきたケーキと和の手作りであるサンドイッチを皆で一緒に食べた。

その後も中学時代の話題で盛り上がりたりして、勉強会が終わる頃

には夜の10時半を回っていた。

え？勉強している間律は何をしていたかって？

俺たちもそれが気になって下に行くと、

「えい、やあ！クツソ〜、また負けた…」

そこには憂とゲームをしている律がいた。

しかもまたって…いつからしていたんだ？

追試当日

追試は試験を受けてその場で返却されるので、今日結果が分かるわけだ。

それもあってか、漣は同じ所をグルグル歩き回り、ムギに至ってはポーンとしていて紅茶をカップに延々と注いでおり、机には紅茶の海が広がっていた。
ちなみに律は俺と同じく結構落ち着いているようだ。

「唯、ちゃんと受かってるかな…？」

「あれだけ解けたんだし大丈夫だって、漣。」

俺がそう励ましていると、

ガチャッ

真っ白になった唯が入ってきた。

「唯、どうだった?」

「どうしよっ? 澪ちゃん…」

「まさか、またダメだったんじゃ…」

「100点取っちゃった!」

「極端な子！」

その後、澁のカメラで満点のテスト用紙を持った唯を撮った。

「よし、これで部活復帰だ！」

「試験期間中にコード弾けるようになったんだよな？」

「うん、XでもYでも何でもござれ〜」

自信満々にギターを弾いた唯だが…

あんなコードあつたっけ？

澁に視線を送っても、知らないという素振りをしていた。

「唯、お前もしかして…」

「コード全部忘れちゃったみたい。」

マジかよ…

本当にこれからどうしたらいいんだ？

そう思い自然とため息が出た。

第十一奏（前書き）

少々時間が出来たので連続で投稿させて頂きました。どうもスイマ
セン

m () m
ちなみに今回は軽音部員は出てきません。

第十一奏

ピピッ、ピピッ

ただいま平日の昼下がり。

部屋に無機質な電子音が鳴り響く。

「38.4度か…」

ご察しの通り俺は風邪をひいている。

原因は自分でもよく分かっている。

昨日はバイトの帰りに急な土砂降りに遭い、家に帰って風呂に入ろうとしたら風呂が壊れていて入れず、そのまま力尽きて床で寝てしまったのだ。

それが原因で間違いないだろう。

風呂の方はさつき業者の方に直してもらい、もう大丈夫だ。

軽音部の皆や店長たちには風邪であることをもう知らせてある。

「問題は体調の方が…」

さつきから頭痛が酷く、体がすごくだるい。

こんな時は寝るに限る。

というわけで俺はベッドに入り、すぐに眠りに落ちた。あれ？ここはどこだ？

自分の部屋のベッドで寝ていたはずだったが…俺の真上には星空が広がっていた。

それに真っ白な花びらがたくさん舞っている。

これは確か木蓮の花びらだな…

どれ、1枚掴んでみるか。

そう思い、花びらに手を伸ばしたその時、有り得ないことに気づいた。

俺の手が凄まじく短く、小さい。

この小ささは小学生なんてもんじゃない。下手をすれば赤ん坊レベルである。

おいおい、これじゃどっかの探偵君より質が悪い。

ふと視界の端に2人の男女がいた。

顔がよく見えない。誰なんだ？

すると、だんだん目が霞んできた。

嫌だ！まだこの夢から覚めたくない！

そんな願いも聞かず、無情にも俺の目は閉じてしまった。ふと目を

開けると、やっぱり俺は部屋のベッドにいた。

そして額には濡れたタオルが置かれている。

俺はそんなことをした覚えはない。つまり誰かが置いてくれたということだ。

でもいったい誰が？

何気なく横を見ると、

「あ、目が覚めましたか？蓮さん。」

「憂…なんでここに？というか学校はどうした？」

「今はもう夕方の4時30分です。学校はもう終わりました。」

確か寝たのが正午からやっていた、笑えばいいと思う番組が終わってすぐだったので、3時間以上寝ていたことになる。

「というかお前には風邪のことを伝えてなかったんだが…何で分か

「つたんだ？」

「実は、お姉ちゃんから、蓮さんが風邪をひいたから何を持って行けばいいかメールで聞かれちゃって…」

「オーケー、そこまでは理解できた。じゃあどうやって家に入ってきた？」

「鍵が開いてたので玄関から入ってきました」

「そんな軽いノリで言われてもなあ…」

「それより、鍵の掛け忘れとは我ながら不器用である。」

「ところで蓮さん、お粥作ってありますけど食べますか？」

「いつの間にか憂は手にレンゲを持っており、その中にアツアツのお粥があった。」

ほんと、出来た子である。

「ああ、頂きます。」

俺は憂の持つレンゲに手を伸ばした。

すると、

「ダメですよ。病人はちゃんと寝ていないと。」

それではお粥を食べれないんですけど…

そう思っているうちに、

「はい、蓮さん、アーンして下さい。」

あゝ、こねっでもしかして…

「このまま食べると…」

「はい」

一瞬断ろうかと思ったが、俺の空腹がそれを許さなかった。

なので俺はゆっくりとレンゲに口を運び、お粥を食べた。

「はい、よく出来ました。」

そう言われ憂に頭を撫でられる。

何かやけに悲しいんですけど…

それに恥ずかしくて元々熱っぽい体が更に熱くなってきた。だから俺は、

「ちょっと飲み物取ってくるよ。」

そうしてベッドから起き上がろうとしたが、

「あ、ダメですよー！ちゃんと寝てい…キヤッ！」

それを止めようとした憂を巻き込み、そのまま床に倒れてしまった。なので他人から見ると、俺が憂を押し倒したように見えてしまうわけだ。

「え〜っと、蓮さん？」

「いや、違うんだ！憂。これはその、事故であってだな……」

そう弁解しながらどここうとした、その時だった。ガチャッ

「蓮さん、こんにちわ〜。風邪はもう大丈夫です……か……」

言葉とともにだんだんと表情が固まってゆく小春がいた。

「えっと、確かこういう時は…WAWAWA…」

「ストップだ、小春！それ以上はなんかもう色々とヤバイ！」

マズい、小春がここにいるという事は…

「どうしたのよ、小春？そんなに固まって…あらあら、いいものを見せてもらったわよ、蓮。」

やはり店長もいた。

一番見られたくない人だったのに…

「小春、ナイス雰囲気殺し（エアープレイカー）よ！」

「て、店長！そんなこと言わないで下さいよ！」

ちなみに雰囲気殺し（エアープレイカー）とは小春の3大スペックのうちの1つである。

店長曰く、「小春の体は、全ての雰囲気げんそつをぶち壊すのよ！」だそう
だ。

小春の3大スペックや雰囲気殺しを名付けたのは、勿論店長だ。

え？あと2つも説明しろって？
1つはドジ及び天然属性である。

もう1つはとしようか、

ヒミツだ。

風邪でだるいのでまた今度。

それよりも、

「蓮く、これはどういふことかしらっ..」

店長がニヤニヤしながら聞いてくる。

「て、てて店長、こ、ここのこれは、つまり、その、蓮さんとその人は、お、お付き合いを.....」

「小春、何を早とちりをしているんだ！別に俺たちは付き合いったりは.....」

「「またまたく」「

ついには小春までも俺をいじり始め、憂はというと終始顔を真っ赤にして黙っていた。

どうでもいいが、もう少し寝させてくれ…

そしてこれをネタにして数日間店長にからかわれたのは言つまでもない。

第十二奏（前書き）

結局風邪をひいてしまいました。

これからは体調管理は改めて気をつけようと思います。

第十二奏

「夏だ〜!!!!」

「海だ〜!!!!」

唯と律の叫び声からも分かるように、俺たちは海に来ている。それもかなり綺麗な海である。

「よし、泳ぐぞ〜」

「お〜」

「お〜い、あんまりハメ外しすぎるなよ〜」

「遠くまで行っちゃダメだぞ〜」

そんな俺と漣の忠告に律と唯は聞く耳を持たず、かなりはしゃいでいた。

これが俗に言う最高にハイってやつなのだろうか？

そんなことを思いながら俺はため息をついた。

何でこんな事になっているかというところ、数週間前の溽のとある一言が始まりだった。一学期ももうすぐ終わり、夏休みが始まりそんなある日のこと

俺と唯と律は音楽室でそれぞれの練習していた。

「えーっと……あーっ！」

唯はギターのコードの練習をしていたが、その途中で薬指だけが180度近く開いていた。

おい、ちょっと待て！その動きは人間では有り得ないんじゃないのか？

人間は薬指だけ開こうとしても精々90度ぐらいしか開かないはずだ。

暇な時間があったら手をグーの状態にして、そこから薬指だけを伸ばしてみてくれ。

指を折らない程度にな。

おっと失礼、うっかり現実逃避してしまった。

「ホントに全部忘れちゃったんだな…」

律の言うとおり、唯はせっかく覚えたギターのコードを全て忘れてしまったのだ。

「えへへ、よくおばあちゃんに褒められたんだ。唯は1つのことを覚えると、他のことは全部忘れちゃうねって。」

「いや、それ多分違うぞ…」

律と同時にツッコミを入れる。

そこに勢いよくドアを開けて漣が入ってきて、奥にある机まで早歩きで向かった。

「漣、どこ行ってたんだ？」

「何か用事でもあったのか？」

するとこちらに振り向いて、

「合宿をします!！」

と言った。

「」「合宿?」「」「」

「そう、合宿。」

漣がそう言った瞬間、

「あはー、それって海？それとも山？」

律が身を乗り出して聞いてきた。

「遊びに行くんじゃないありません。バンドの強化合宿です！朝から晩までみっちり練習するの！」

「着ていく服買わなきゃ。」

「水着も買わないとな！」

「「聞けえ〜〜〜！！！」」

やっぱり唯と律は遊ぶ気満々でいやる。

「夏休みが終わったらもうすぐ学園祭でしょ？昔の学園祭の軽音部
っていったら、結構有名だったんだぞ！それなのに…」

「学園祭かあ……」

洩の執演も聞かず、2人は相変わらず突っ走った妄想をしているよ
うだ。

「模擬店…」

「焼きそば…」

「たこ焼き…」

「はいはい、私、メイド喫茶がしたいです」

「え、お化け屋敷だよ」

「メイド喫茶！」

「お化け屋敷！」

「メイド喫茶！」

「お化け屋敷！」

あ、澪の怒りが…

「メイド喫茶！」

「お化け屋敷！」

「あゝもゝ、メイド喫茶ったらメイドきつ…」

ゴッーン…！

遂に澪の鉄拳が炸裂した。

「あつうゝ、何で私だけ…」

まあ、元凶だからなあ…

ガチャッ

「皆さん、すいません、遅れちゃって…」

遅れてムギが入ってきた。

正座させられている律と唯

怒ってそっぽを向いている漣

それを苦笑いで見ている俺

そんな光景が部室に広がっていた。

それを見たムギは、

「とりあえず、お茶いります?」

と言った。「なる程。で、結局どうなったの?」

「ムギの別荘で合宿することになりました。」

ここは『ル・ジエ』。

俺と店長はいつも通りのんびりしながらそんな話をしていた。

「で、用件なんですけど…」

「分かってるわよ。合宿の間バイトを休むんでしょ?別に構わないわよ。」

「ありがとうございます、店長!」

なんというか、店長には敵わないな…

「しかしスゴいわね、そのムギって娘の家。まさか別荘まであるなんて…」

「全く同感ですよ。小春もそう思うだろ？」

隣に座っている小春を見ると、オレンジジュースに口もつけず、すごいうっとりしている。

うーん、この目はマズいなあ…

すると小春はこっちをすごい勢いで見て、

「蓮さん、私も合宿に連れてって下さいー!」

突然そんな事を言い出した。

「あのなあ…お前合宿に来て何するつもりだ？」

小春は考え込む素振りをしている。「こいつとこゝろは唯に似ている。

「あ、サポーターとかお手伝いとかマネージャーとかはどつですか？」

「いや、運動部じゃないんだから……」

それにどれも大差ない気が……

前言撤回。こいつは唯と同レベルだ。

「はあ、ちょっと待ってる。行けるかどうか聞いてみるから。」

「はい！お願いします！！」

そう言って俺は席を立った。

携帯を取り出し、ムギに電話をかける。

『はい、もしもし蓮さん、どうしましたか？』

「実はなムギ、少しお願いがあるんだが…」

『お願いですか？』

「ああ、実はな…」

『なる程、分かりました。全然構いませんよ。』

「本当か？ありがとうございます。」

『だって、人数が多い方が楽しいじゃないですか。』

「一瞬コケそうになるが、なんとか踏みとどまる。」

「とにかく他の皆には俺から伝えておくよ。」

『分かりました。それでは。』

「ああ、それじゃあな、ムギ。」

その後他の3人にも連絡してみたが、反対する人は誰もいなかった。

その事を小春に伝えると、

「わあ〜い、ありがとございませう蓮さん……！」

すごく喜んで抱きついてきた。

店長はそれを止める様子もなく、笑みを浮かべていた。

合宿、どうなるんだろう…

俺と小春は電車の時間の30分前には集合場所の駅に集まっていた。

するとそこに、

「おーい！蓮〜。」

「お待たせ〜。」

「すみませ〜ん、お待たせしたみたいで。」

上から律、漣、ムギである。

「そちらが小春さん？」

「ああ、こいつが佐山小春。よろしくな。」

「佐山小春です。どうかよろしくお願いします。」

「それでこっちが田井中律、秋山漣、琴吹紬。」

「よろしく〜」

「よろしくな。」

「よろしくお願いします。」

「さて、お互いの自己紹介も済んだところで、」

「1つ聞きたいことがあるんですけど…」

「唯（あと1人）はどこ（ですか）？」

俺たちの間にしばしの沈黙が走る。

「とりあえず電話してみるよ。」

澪が唯の携帯に電話をかける。

「…………おはよう……………」

小春以外の3人は、やっぱりなという顔をしていた。

電車、乗れるかなあ…

第十三奏（前書き）

合宿は多分2〜3話ぐらい続くと思います。

第十三奏

「は〜間に合った。」

「あれほど寝過ごさなって注意したのに……」

今俺たちは電車の中にいる。

あの後唯はなんとか間に合い、発車一分前に俺たちは電車に駆け込んだ。

そこ、迷惑行為とか言わない！

「えへへ、ゴメン。ワクワクしたら眠れなくて。」

「まったく、小学生か。」

律が笑いながら言う。

「いや、そうでもないみたい。」

漣に続いて顔を向けると、席に座って眠っているムギと、ムギの肩にもたれてこれまた寝ている小春がいた。

2人ともすごく楽しみにしていたもんな…。

「ふふつ、ふふふふふ…」

寝ているムギが突然笑いだした。

「ゲル状がいいの……」

ゲル！？

夢の内容がすごく気になる……

それに何故か小春の顔がだんだん青ざめてきた。

「どんな夢見てるんだろうっ？」

「よし、写真に納めとこっぜ。」

律がどこからかデジカメを取り出した。

「よしなよ、可愛いそうだよ」

「悪い出悪い出。」

唯も乗り気なようだ。

パシヤッ

律がフラッシュで撮影した瞬間、

「ん…あれ、ごめんなさい。」

「ふあ…寝ちゃってたんですか？」

2人とも目を覚ましてしまった。

「ほら、起きちゃった〜」

「ゴメンゴメン。それよりさ、別荘ってどこなんだ？そろそろ教えてよ。」

「えっつと…」

その瞬間、電車はトンネルに入ったらしく、外が見えなくなった。

「もうすぐ。」

そうして電車はトンネルを抜け、目の前には一面の海が広がっていた。

「わは、蓮君、海だよ！」

「ああ、すごいきれいだなー（棒読み）」

「どうしたの？蓮君、目なんかつぶって…」

「だ、大丈夫だぞ。唯。俺はちゃんと心で見ているからな…」

「蓮、お前もしかして…」

「蓮さんは高所恐怖症なんですよ」

「こら、小春！余計なことは言つな！」

こうして唯と律が開けた窓からの潮の匂いを感じながら俺たちは別荘に向かった。まあ別荘に着いたわけだが…

あえて言おう！

すじく…大きいです……

「うわゝ、でけゝゝ」

律が驚きの声をあげる。

「ごめんなさい、本当はもっと広いところを借りたかったんだけど、一番小さい別荘しか借りれなくて…狭いかもしれないけど、我慢してね…」

これで一番狭いって…

ムギン家って一体…

中も当然広く、フルーツの盛り合わせ、天蓋付きのベッド、冷蔵庫

には高級そうな霜降り和牛の肉がブロックで置いてあった。

それにはっと見ただけが塵一つ落ちていなかった。

「ああ、ぶっぞ。」

「うわ、広いな。」

「ここは別荘内のスタジオ。もちろん完全防音である。」

「アンプは…うん、大丈夫そうだな。」

ふと遷を見ると、バッグからラジカセを取り出していた。

「漣、そのラジカセは？」

「ああ、これか？これはな…」

再生されるとある曲。

「昔の軽音部の曲なんだ…」

「上手…」

「ああ、俺たちよりもずっと…」

これは正直な感想だった。

「なんか、これ聞いてたら、負けたくないなって…」

なるほど…

「それで合宿って言い出したのね？」

「うん」

「負けないと思う。私たちなら…」

「ムギ…」

あれ？唯と律がない…

「ちょっと唯と律を呼んでくる。」

俺はそう言ってドアを開けようとした瞬間、

バコーン

「よし、遊ぶぞ〜」

「オーイェー！」

「あのお唯さん、律さん…そんなに勢いよくあけると危ないんじゃないかな」

唯と律と小春はすでに水着に着替えており、律が思いっきり俺たちがいる部屋のドアを思いっきり開けた。

俺はというと、見事に壁とドアにサンドされていた。

あ、意識がもう…

そのまま俺は気絶してしまった。

第十四奏（前書き）

メルブラを置おうにも、お金が足りない…

第十四奏

ふと、目が覚めた。

とは言っても、まだ意識がはっきりせず、何も見えない。

取りあえず、頭が痛い…。

それに頭の部分だけ妙に柔らかい。

枕でもあるのか？

そう思いながら目を開けると…

「……………ん……………漣？」

「え…れ、蓮！？気がついたのか……………／／／／／／／」

目を開けたら、知らない天井ではなく真っ赤になった澁の顔があった。

しかもかなり距離が近い。

ということはこの頭の柔らかい感触はもしかして澁の膝？

「ありがとうな、澁。あと悪いがこのままでは起き上がれないから顔をどかしてくれないか？」

「うん……うん……／＼／＼／＼／」

そうして起き上がり、落ち着いた澁に色々と聞いてみた。

聞いたことを簡潔にまとめてみると、

俺が意識を失った後、漣の進言で漣以外の4人は既に海に遊びに行
った。

そしてそれから今まで漣が俺を膝枕してくれていたこと。

「ところで、俺はどのくらいの間気絶していたんだ？」

「だいたい30分くらいだな。」

30分！？膝枕をするには少々キツイ時間である。

「ありがとうな、ずっと膝枕してくれて。」

俺は感謝の意味を込めた笑顔で言う。

「……………// // //」

漣は顔を真っ赤にして黙っている。

「漣、どうかしたのか？」

「い…いや、何でもない。さあ、早く海に行こう！」

やけに楽しそうな漣に引っ張られ、俺は海に向かった。

「……………ニブチン……………」
「無人島に流れ着いてから、かれこれもう一週間ですね。」

「流されたときはどうなるかと思ったけどな…」

「でも、これはこれでなんか楽しいよね…」

海に着いた俺たちが見たものは、まるで無人島にでも漂流したような律、唯、小春の姿だった。
律は木の棒を杖にして、唯はゴムボートをひもで引っ張り、小春はそのゴムボートをこれまた木の棒で後ろから押していた。

もうわけが分からない。

「あ、大物発見…」

律が海岸に打ち上げられたワカメを取る。

「助かった…」

「しゅっぁんです…」

「わふ…」

小春よ、お前はいつから小さな打者になったんだ…

それよりも、

「何勝手な設定作ってるんだ？」

俺と漣がツッコミを入れるが、3人は全く聞いていない。それぞれろか、皆ある一点を見ている。

一言で言うなら、

漣の胸だ。

ポインという効果音がよく似合う。

「漣ちゃん……」

「ん？」

唯はなんとか言葉を紡ぎ出し、律はシヨックのあまりワカメを落とし、小春に至ってはこの世の終わりといった絶望溢れる顔をしていった。

まあおそらく自分のプロポーションと比べているのだろう。

「喰らえ！」

「へぶっ！ー！」

律の投げたビーチボールが見事に溲の顔に直撃した。

「泳ぐぞ唯、小春ちゃん！」

「うんー！」

「はいー！」

3人とも泳ぎに行っちゃった…

「痛い…」

「取りあえず漣、大丈夫か？」

「うん…けど、いい所だ。」

「ああ。」

漣は自前のカメラで海を撮影していた。

「で、何で唯は生首になっているんだ？」

「絵を描くんだって！」

「この計画の立案者は？」

「はい、私です！」

小春、お前かよ…

「せっかくですから、蓮さんが描いてください！」

「お前、俺の画力を分かってて言っているのか？」

「はい！」

「おっ、いいかもな！」

「面白そうですね！」

律にムギまで…

「分かった。いくぞ、唯！」

「うん！」

俺の全身全霊をかけて最高の作品を描いてやる！！

その結果として、唯以外の全員が爆笑してしまった作品が出来上がった。

なんていうか、これはもう言葉に出来ないな…

第十五奏（前書き）

わわ…わわ…

第十五奏

「あれ、ところでムギは？」

俺が描いた絵（敢えて言うならミルゲ）の中心に砂に埋まって首だけになった唯というカオスそのものを律のデジカメで撮影していたあと、いつの間にかムギがいないことに気づいた。

「ああ、ムギなら…あそこだな。」

律が指差す方向を見ると、1人でせつせと砂の城をムギが作っている。

「というかあれ、ムギの高さくらいあるんですけど…」

それになんと小春も何か作っている。

ムギの城とその近くにある直方体の柱（城と同じくらいの高さ）の間を細く高い通路でつないでいる。

「こういうのどっか見たことあるな…」

「小春、これってもしかして…」

「鉄骨の橋です。」

未来は僕らの手の中

じゃなくて、

「何で小春はこれを知ってるんだ？」

「この前店長に借りたマンガに載ってました」

店長おおおおおっ

頼むから小春にはギャングブル漫画を貸さないでほしい。

将来真似して確実に失敗しそうだ…

「小春、頼むからあのマンガの真似はしないでくれ…」

「は、はあ…分かりました。」その後俺たちは近くにある岩場へと行った。

「まさか岩場まであるとは…本当にすごいな、このビーチは。なあ、漣…ってあれ？」

隣にいたはずの漣がない。

後ろを見ると、

「怖くない、怖くない、怖くない、怖くない、怖くない…」

耳を塞ぎしゃがみ込んでいる漣がいた。

高いところならこの気持ちは俺も何となく分かる。

「お医者さんに行くと、膝のさらにぶじつばがびっしりと」「うわあ
あああっ!」「」

うおっ、いつの間に律がいるんだ？

「ふじつぽ！？蓮さん、私もうお医者さんに行けません…」

小春、後ろからいきなり腕を掴まないでくれ。かなりびっくりするからな。

「いや小春、これ嘘だから…」

「はあ…よかったです………」

く夕暮れく

「あゝ海水飲んだ」

「たどり着いたぞ〜黄金の島ジパング〜」

「私たちの悲願はついに達成されたのです〜」

唯、律、小春の3人はもう完全にウマが合っているようだ。
3人とも砂浜に手足を伸ばして寝転がっている。

「まだまだ!」

「おっ、スイカか〜」

漣がスイカを持って立っていた。

「せっかく海に来たんだから、思う存分遊ばないとここまで来た意味が…」

漣、もしかして…

「あーっ！練習ー！」

「忘れてたのかよ……」
だろっな〜

「ま…全くう〜、律が遊ぼうとか言っからだぞ〜」

「一番楽しそうにしていたのは誰だ？」

律のツッコミを澁も自覚しているらしく、棒読みのままそっぽを向いていた。夜になり、俺たちは夕食を食べた。

メニューはパン、ステーキ、ポテトチップ、そしてデザートにフルーツポンチである。

もちろん作ったのは俺。

パンは夕食前の買い出しで買ってきたフランスパンを斜めにスライ

スし、ステーキはもちろんこの別荘の冷蔵庫にあった肉を使った。その時の余熱でついでに付け合わせの温野菜を作り、その時に使い余ったジャガイモを薄くスライスして油でカラッと素揚げして少量の塩であっさりとした味付けに仕上げた。

最後に、買ってきてあらかじめ冷やしておいた炭酸と別荘に置かれていたフルーツの盛り合わせを贅沢に使い、フルーツポンチを作った。

え？ステーキにはポテトチップじゃなくてフライドポテトだった？

悪いが俺はフライドポテトは作れない。

夕食後

「あゝお腹いっぱい。」

「床が冷たくて気持ちいい…。なんかこつやって目を閉じると波に流された感じがするよね。」

律と唯は床に寝転がっている。

「あ、ホントだ。おやすみ〜」

「おやすみなさい…」

「おーい、始めるぞ〜。」

「二人とも起きて。」

夕食をおいしくいただいた俺たちは、軽く休憩をとった後、練習をしようということになったのだが、現在この状況である…

ちなみに小春は用事があるとかで、自分の部屋に戻った。

「こりゃ簡単には起きないな。」

「よし、ムギ、蓮、ちよっとどいて。」

透はアンプを唯のと律の頭付近に置き、

ジャーーン

思いつきりベースを弾いた。

これでおそらく頭もすつきりしただろう。

その証拠に2人とも耳をふさぎ、膝を丸めてうずくまっていた。

唯と律も自分の場所に着いたのだが、気力が尽きているようだ。

「なあ〜今日はもう止めにしようぜ〜」

「練習が目的でここに来たの!」

昼間のことをつつこむのは止めておこう。鉄拳が飛んでくる可能性がある。

「けどさあ〜」

「そつえば律、最近ちょっと太ったんじゃない?」

澁が小悪魔フェイスで聞いてくる。

「えっ?」

「特にい〜お腹の辺りとかあ〜。最近ドラム叩いてないからかなあ
〜」

「フギャー、ウギャー」

その言葉に反応して律がやけくそでドラムを叩く音を聞きながら、
漣は『計画通り』といった顔をしていた。

「もう、ギター持てない……」

「ええ!？」

お次は唯か…

「だって〜これ重いんだもん」

「だからもつと軽いやつにしろって言ったのに…」

漣は呆れ顔で言う。

「誰だ!このギター買おうって言ったのは?」

「お前だ!」

俺と漣のツツコミが響いた。

数分後…

「そろそろ床あつたまつてきたね…」

「ああ…」

2人は床をゴロゴロし始めた。

「汚れちゃうわよ。」

ムギ、多分それはないだろう。
この床すごいきれいだから…

「そんなんで学園祭どうするつもりなんだ？」

「だからあゝ、メイド喫茶がいろいろ言ってるだろ。」

「えゝつ、お化け屋敷だよ」

こいつらまた始めやがった…

「唯、お前何も分かってない。漣を見てみる。」

律に促され、唯も漣を見る。

俺もそれに倣う。

「な…何よ？蓮まで…」

「漣ほどメイド服が似合う奴なかないぞ。」

俺たちはその姿を想像してみる。

黒いスカート、純白のエプロン、メイドカチューシャ…

なんということでしょう。

カジュアルな服装で大衆的な彼女でしたが、匠の手（想像）により、あなただけの少女に大変身です。

おそらくかなり似合うだろう。

「あゝ、かわいいかも」

「なぐんてな、冗談だよ、み…」

ド
ゴ
ー
ー
ン

俺の目の前にあるのは顔と拳を真っ赤にした漣と、側頭部にでかい

こぶを作り失神している律の姿だった。

今の漣の左フックはかなり綺麗に入っていた。「これが終わったら練習するからな。」

「分かってるって。」

唯、律、ムギが俺たちに見せたいものがあるとかで俺たちは今外にいる。

「しかし、見せたいものって何なんだ？」

「蓮さん、何だか楽しみですな〜」

小春も用事が終わったようで、俺たちと一緒にいた。

「いくぞ、ムギ！」

「えええ！」

「「せ〜のっ!」!」

律とムギのかけ声と共に横一列に並べられた打ち上げられた花火の中心に、ギターをすごく楽しそうに弾いている唯がいた。

こうやっている、何だか夢の中にいるみたいだ。

そう、すぐに割れてしまう泡沫みたいな夢の中に…

「オーイエーオーイエー！あれ、もう終わり？」

打ち上げ花火が終わってしまったが、唯はまだ弾き足りないようだ。

「予算がな。」

「また今度。」

「そうだな、いつか武道館で派手にドババババーツと！」

「ほえ、武道館？」

「おいおい、目標はそこだって決めただろ。なあ、漣？」

「え？」

花火の余韻に浸っていたのだろう。漣が間の抜けた返事をする。

「じゃあその時はピンクがいい。」

「子供っぽいだろ。」

「え〜かわいいじゃんピンク。」

「私もピンクはちょっと…」

「俺もピンクは止めてほしいな。」

「え〜っ。」

「武道館目指すんだったら、まずはこれくらい出来ないとな。」

聞き覚えのある曲が溼の持つラジカセから流れ出す。

「上手いな〜。」

のだが…

「あれ？」の曲…」

『お前らが来るのを待っていた〜』

なんだこれ？

『死ね————！！！！！！』

あまりの音量に耳をふさぐ。

「蓮さ〜ん何なんですかこれは〜？」

「テープのB面が再生されたみたいだな。ってあれ、溼？」

「聞こえない、聞こえない、聞こえない……」

「ふじつぽ……」

「うわああっ！」

律が追撃をかける。

「膝の皿屋敷……」

「いやだあ〜、やだあ……」

膝の皿屋敷って何だ？

澗が泣きながら三角座りをしている。

「りっちゃん！」

「そのへんにしておけ！」「やりすぎよ。」

「あゝ澗、ごめんな…」

「澗ちゃん大丈夫だよ。」

「お化けなんていないわ。」

律がばつが悪そうに謝り、唯とムギが澗に慰めの言葉をかける。

「本当？」

そう言って振り向いた澗の顔はすごく可愛かった。

涙目を浮かべて上目遣い、さらに頬を赤らめている。

これで可愛くないなんて言うようなやつがいるなら、容赦なくロードローラーかタンクローリーを投げつけてやる。

「なあ〜漣、ゴメンって〜」

「ぶう〜」

漣はまだ拗ねているようだ。

「でも唯ちゃん、さっきの曲本当に…」

「うん、見せて!」

唯が弾いたのは、さっきの曲そのものだった。

「完璧よ、唯ちゃん。」

「でも、みよ〜んってところが分からなくて…」

みよ〜ん?

「多分、チョーキングのことだろう。」

さすが漣だ。

あと律、唯にチョークスリーパーをかけるのもその辺にしとけ。
マジで唯が落ちちまうぞ。

「チョーキングっていうのは弾きながら弦を引っ張ること。」

左利きなのに、右利き用のギターを弾いてみせる漣。

唯もそれに続いたが、突然笑い出した。

「あははっ、これなんか変々。」

「変って…」

「つぼだったみたいだな。」

「ふじつぼ!?!」

漣はさっきの場面をフィードバックしたらしく、俺とムギが慰める
中またおびえていた。

第十六奏（前書き）

スイマセン、何故か魔が差してしまいました……
今回で合宿編完結です。

第十六奏

「眠れない……」

今は朝の4時。

いつもは寝ている時間のだが、今朝はそう言うわけにはいかなかった。

何故こうなったかというところ、30分程前にさかのぼる……

「蓮さん、起きてください蓮さん！」

「ふぁ……何だ小春？こんな朝早くから……」

「あの……その……え……と……」

顔を赤らめながら手足をモジモジクネクネさせている。

そして何かを決意したような顔つきをして、

「こ…これからお花を摘みに行くんで付き合ってください！！」

はい？

「小春、ここは海辺だ。それに花なんて無かった気がするが…」

すると小春は顔を真っ赤にして、

「れ…蓮さんのバカ…！！！！」小春は俺に思いつきりアップパーをくらわして、涙目になりながら部屋を出て行ってしまった。

そして現在に至るわけだ。

「しかし、何だったんださっきの小春は？」

俺が何をしたというんだ？

「昼」

今日は午前中と夕方に練習、昼間は遊ぶというスケジュールとなった。

そして今はビーチパラソルの陰で休んでいるわけだが…

目のやり場に困る…

俺の左には白いビキニのムギ

右には黒いビキニの漣

右斜め前には水色のビキニの小春

左斜め前には白いビキニの律

そして真ん前にはフリルがついたピンクのビキニの唯

対する俺はトランクスタイルの海パンに、Tシャツという格好である。

俺はどこを見ればいいんだ…

その時律が、

「よし、そろそろまた遊ぼうぜ!」

と言った。

「りっちゃん、今度は何するの?」

「ビーチバレーやろうぜ!」

「いいね〜やるう。」

唯はかなり乗り気なようだ。

「よし、小春、俺たちも行こうぜ!」

「……………(プイ)」

小春は何も言わずに律たちの所に走って行ってしまった。

さて、どうしたものか…

俺は小さくため息をついて走っていった。

ビーチバレーの対戦チームは

俺&唯VS律&小春

となった。

「蓮君、一緒に頑張ろう！」

「ああ、行くぞ唯！」

「小春ちゃん、あいつらをぶっ飛ばそうぜ！」

「ビーチバレーを、革命する力を！」「ふぎや！蓮君、ボールを！」

唯が顔面でレシーブして、ボールが変な所へ飛んでいく。

「任せる唯！これで最後だ！！」

俺はダイブしながらボールを取り、相手のコートに入れた。

「蓮、お前いつの間にブーメラ スネイクを使えるようになったんだ？」

「律よ、これが普段の鍛練の成果だ！」

「わゝ蓮君すごい！」

「……………」

ビーチバレーは俺と唯の勝ちで終わったが、やっぱり小春は黙ったままだった。

く夕方く

「蓮、またリズムがずれてるぞ！」

「ああ、ゴメン…漣……………」

なんか今日は調子が変わた…

「蓮さん、少し休んだ方がいいのでは？」

「そうだ、蓮。少し休め。」

ムギと律に促され、俺は休憩することになった。

「ついでに私も…」

「律、お前は練習しろー!!」

漣がツッコミを入れた。

「はあ…」

俺は今、露天風呂にいる。

さて、どう小春に謝ろうか…

その思いだけが頭をグルグル回っていた。

「どっしりよっか…」

お湯につかりながら考える

考える…

考……え……る……

「……し……り……る」

あれ？

「お……蓮……」

うつすらと目を開ける。

『気がついた？』

あれ……？

「……マイ……？」

「蓮、何を言っているんだ？」

「ん…漣か……」

「蓮、大丈夫か？」

「ああ、なんとかかな…すまないな、また膝まくらしてもらって……」

しかも昨日と違い今日はお互い身につけているのはタオル1枚である。

「それよりも、今日の蓮と小春ちゃんは変だぞ。何かあったのか？」

「ああ、実は……」

俺は漣に今朝あったことを話した。「蓮、男としてそれはないだろう…////」

漣も顔を小春と同じく真っ赤にした。

「どっぴいっことなんだっ？」

「えーっとだな、その場合のお花を摘むっていうのは…ゴニョゴニョ
ゴニョゴニョ……」

「それ、マジか…？」

「うん…／＼／＼」

なんてこったい…

「知らなかったとはいえ、女の子を泣かせてしまうとは…我ながら
情けない……」

「まあ、知らなかったのはしょうがないとして、ちゃんと謝れよ。」

「ああ、そのつもりだ…ありがとな、漣。」

「うん…は、は、くちゅん」

漣がくしゃみをした。

無理もない。漚の肌は水滴が全くついていない。

つまりここに来てから風呂に入っていないということだ。

体も相当冷えているに違いない。

「漚、大丈夫か？」

「うん、くちゅん……」

その時、俺の視界が急に真っ暗になった。

「うわ、一体何だ？」

俺は自分の視界を真っ暗にしたものを思わず遠くに投げ飛ばしてしまった。

「あ、何するんだ、蓮！」

「ん、どうしたんだ？み……お……」

何の気も無しに漚の方を振り向いた瞬間、俺は自分が投げたものを

理解した。

俺が投げたものは、溲のタオルだったのだ。

それに、溲は女子の中では比較的長身であり、さらに膝枕のため正座をしていたのだ。

対する俺は長座であり、その影響で、色々見えちまったわけだ…

色々と…

ヤバい！漣の口が悲鳴をあげるそれにだんだん変わっていく。

俺は急いで漣の口をふさいだ。

「頼む、漣。今悲鳴をあげないでくれ！」

漣は首を何度も縦に振った。

さて、冷静にこの状況を整理してみる。

ここには一糸纏わぬ姿の女性がいる。

そしてそんな女性の口をふさぐ男が1人、つまり俺だ。

あれ？

どう見ても女性を襲うただの変態でしかない。

ガラッ

「漣さん、お背中流しま……す……」

俺の視線の先にはタオルを巻いた小春がいた。

こんな所で小春のエアブレーカーが発動してしまうとは…

「れ…漣さん…漣さん……」

小春の口がだんだん開く。

ヤバイ!!

動くこと雷の如し!

どっかの強豪中学校のテニス部副部长もびっくりなスピードで小春の口をふさぐ。

「頼む、悲鳴だけは勘弁してくれ!」

小春もうなずいてくれた。

で、こうなるわけか…

あのあと、風呂に入っていない2人と、すっかり湯冷めしてしまった俺の3人で混浴することになり、何故か俺が真ん中になってしまった。

「えっと…漣、小春……」

「れ…蓮、小春ちゃん、私は先にあがるね。」

漣はまた顔を真っ赤にしながら、急いで風呂場からいなくなった。

「ちゃんと責任取ってよね」「……………」

「……………」

露天風呂に沈黙が走る…

「あの…小春……………今朝はすまなかった!!」

俺は水面ギリギリまで頭を下げる。

「蓮さん…頭を、上げてください。」

頭を上げると、小春はいつもの笑顔を浮かべていた。

「いっちゃんぞうめんなさい…つまらないことで意地になっちゃって…」

「いや、いいんだ。でも、せめて何かお詫びをさせてくれ！」

小春は少し考えたあと、

「土曜日…」

「え？」

「今度の土曜日に1日私につきあってください…」

「あ、ああ…」

最後はお互い消え入りそうな声だった。翌朝

「で、律、お前は何をやってんだ？」

「合宿恒例の寝顔撮影」

それで手にデジカムを持っているわけか…

ムギは寝相がよかったのだが、あとの3人はすごかった。

唯はTシャツからへそが出てるし、漣は抱き枕に抱きついている。小春に至っては壁に足を引っ掛けて犬 家の一族の有名なシーンみたいになっていた。

それらの光景を楽しそうにカメラで撮影する律。

「まったく、後で漣にシメられても知らないぞ…」

漣ならやりかねないと思う。

「それもそうだな…。なあ蓮、小春ちゃんとはもう仲直り出来たのか？」

「瞬驚くが、すぐにそれを隠す。」

「ああ、ちゃんとしたさ。」

「それは良かった。」

「皆もお見通しってわけか…」

「まあね」

まったく…

「すまなかったな。心配かけちゃって…」

律にわびを入れる。

「いいさ、そのくらい。それより、漣たちが起きる前に退散しよ
うぜ。」

「そうした方が良さそうだ。」

俺と律はそつと部屋を出た。

聞いた話では、この後日に本当に律は写真のことで漣にシメられた

525°

第十六奏（後書き）

ちなみにあの場合の女性の「お花を摘む」という発言は、自分がお手洗いに行くということを表しているらしいです。

間違っていたらゴメンナサイ。

第十七奏（前書き）

今回は完全オリ話で、少し短いです。

第十七章

「あと10分か……」

腕時計を見ながらそう呟く。

今は土曜日の朝9時50分。

俺は商店街に近い公園のベンチにいる。

え？つなぎ？

着てる訳ないだろ！

俺はTシャツにジーンズと随分ラフな格好をしている。

何故こんな所にいるかって？

それは…

「蓮さ〜ん！」

そう叫びながらこっちに向かってくる、ノースリーブのシャツに膝上までのスカート、可愛い靴を履いた少女が1人。

「もしかして、私遅れちゃいましたか？」

「いや、大丈夫だよ小春。」

そう、今日は合宿で小春を怒らせた埋め合わせの日だ。

漣の話を聞いてからやっと合点がいったのだ。

小春はかなりの怖がりなのだ。

そして合宿1日目の夜の律が漣に言った「膝の皿屋敷」発言からか

なり想像を発展させて怖くなったのだろう。

そんな状態で夜中にお手洗いに行ける訳がなく、隣で寝ていた俺の部屋に来たわけだ。

「じゃあ、行きましょうか。蓮さん」

「ああ、そうだな。」

こうして俺たちは朝の商店街に向かった。「蓮さん、どこ行きましょうか？」

「そうだな、映画でも見に行くか？」

「はい！」

こうして行き先は映画館に決定した。

「で、リクエストはあるか？」

「えっと……これ！」

~~~~~

「蓮さん！すごく感動しましたね、あの映画。」

「……………」

俺たちは今駅前の喫茶店にいたのだが、俺は小春の言葉が耳に入らない。

というのも、さっきの映画が原因だった。

内容は不治の病にかかったヒロインと主人公の切ないラブストーリーだった。

最後にヒロインが病で亡くなるシーンでは、小春を含む多くの観客が涙を流していたのだが、俺は全然泣けなかった。

色恋沙汰の悲劇や惨劇は、現実には感動など全くない。あるのは深い後悔と絶望だけである。

そう、あの時だって…

「蓮さん！」

気がつくと、小春のくりくりした目がすぐ近くにあった。

「どうしたんですか？さっきからボーンとしちゃって…」

「いや、何でもない。」

「早くしないと、せっかくのご飯冷めちゃいますよ。」

そう言い小春は自分のクリームパスタを平らげてゆく。

まあ小春の言うことは正論なので、俺も自分のタラコパスタを平らげることにした。

「あゝおいしかった〜」

「初めてだったけど、なかなかいける味だな。」

「もちろんです！雑誌とかでも評判がよくて大人気のお店なんですから！！」

「道理であんな行列が出来ていたわけだ…」

そのおかげで俺たちは店の外で30分ほど待たされたのだ。

更に店の中に入ってもすぐには注文出来ず、20分程待たされた。

「うちにもあれくらい客が来たらな」

「蓮さん、それ店長の前では禁句ですよ。」

確かにそうだ。

もしあの人に聞かれていたら、最悪明日の日の出を拝めなくなる可能性だってある。

「次はどうしようか…」

「蓮さん、是非行きたいところがあるんですけどいいですか?」

「いいぜ、今日の主役はお前だからな。」

そうして着いたのが女性向けの服売場である。

うーん、居場所がない…

「蓮さん、これなんてどうですか？似合ってますか？」

「これはちょっと…他には？」

「じゃあ、これは？」

このやりとりは何回目だろう…

俺は小春の選ぶ服に評価をしているのだが、他の女性客からの視線が容赦なく俺に突き刺さる。

「小春…まだか……？」

「えーっと、もう少しです。」

俺の目で見てもまだまだかかりそうだ。

10分後

「蓮さん、これで最後です。どっちがいいと思いますか？」

小春の両手には2着の服が握られていた。

右手にはピンクのシャツ

左手には水色のシャツ

どうやら小春は俺に決断を委ねるつもりらしい。

「というか、両方は無理なのか？」

「お金が足りません…」

おいおい…

それにどっちも今日までの商品なので日をまたいで買うことは無理らしい。

「ほら、これで両方買え。」

俺は財布から5000円を取り出した。

「え…そんな…いいんですか？」

「当たり前だ。ほら、受け取れ。」

「あ…ありがとうございます……」

小春は少し泣きそうになっていた。

「さ、早く会計済ませてこい。」

「はい！」

小春は嬉しそうに小走りで会計に向かった。

「　　」

小春はよほど嬉しいのか、スキップで俺の横についていた。よっぽどどちらも欲しかったのだろう。

今俺たちは朝に待ち合わせした公園にいる。

「蓮さん、今日は1日ありがとうございました。」

小春が笑顔で言った。

「ああ、俺も今日は楽しかった。」

「蓮さん！」

小春がいきなり声を大きくして言う。

「何だ？」

「私、蓮さんにプレゼントがあるんです……」

プレゼント？

はて、いつ買ったのだろう？

「じゃあありがたく頂こうかな。」

「じゃあ、目を閉じてください……」

サプライズのつもりか？

俺は素直に目を閉じる。

「これでいいか？」

「はい。では、いそがます…」

へ？

いきますって何のことだ？

そう考えているうちに、

突然頬に柔らかい感触を覚えた。

それが小春の唇だと理解したのは、目を開けて小春が顔を真っ赤に

して走り去るのを見送ってから数秒後のことだった。

俺の顔が赤いのは、夕日のせいなのか小春のせいなのか俺には分からなかった。

## 第十八奏（前書き）

ゲストキャラの登場です。

## 第十八奏

「暑ち~~~~」

「そんなこと言わないでよ、蓮。余計暑くなるじゃない。」

俺は今『ル・ジエ』にいるのだが、今日はかなり蒸し暑い。

いくら夏の正午とはいえ、38度はないだろう…

「はい蓮さん、アイスコーヒーです。」

「お、サンキュー小春。」

「いえ…//」

小春の顔が少し赤い。風邪か？

「おい、大丈夫か小春？」

そう言い小春の額に俺の額をくっつけよじとすると、

「だ…大丈夫です〜。あ、店長、アイスティーいれますね…」

と店の奥に走っていった。

「蓮…あんた小春に一体何したの？土曜の夕方もあの子すごく舞い上がってたし。」

「お、思い当たる節は何も…」

「いや、あの反応は絶対何かしたわね。」  
そんな事を言われても…

「さあ、合宿から今日までにあんたが遭ったトラブルを話してもらおうわよ！」

「だから何もありませんって…」

カランカラン

「なんだ、相変わらず全然客がないじゃないか。」

突然肩まで髪がある着物姿の少女が店に入ってきた。

「式じゃないか。随分と久し振りだな。」

「ようレンにテンチョー。元気にしてるか？」

「ああ、なんとかな。」

「ふふ、久し振りね式。」

彼女の名前は両儀式<sup>りぎしき</sup>。

いつもは某所にある工房兼事務所の『伽藍の洞』にいるのだが、たまにこつちにふらりと来たりする。式はその目に『直死の魔眼』というおっかない目を持つている上に、戦闘能力がかなり高い。

「で、お前がいるってことは幹也も一緒か？」

「ああ、もうすぐここに来る。それよりも……」

すると式はいきなり顔を近づけて、

「なあ、早いとこアザカを落としてくれないか？あいつがいるとオレとコクトーが2人きりでいられる時間がかなり減るんだが。」

そんなことをボソツと言い出した。

「あのなあ…俺にあの幹也一筋のブラコンじゃじゃ馬娘をどっしろと…」

「誰がじゃじゃ馬娘ですって？」

「お前のこと…だ…よ………」

「こんにちは蓮。久し振りね。」

「あ、ああ…久し振りだな…鮮花………」

恐る恐る後ろを振り向くと、いい笑顔をした黒髪で長髪の女性がいた。

彼女の名前は黒桐鮮花。「くろくとうしあなかが 蒼崎燈子「あまのあきこという魔術師に弟子入りしている。

もちろん鮮花も魔術を使える。確か属性は火だったっけ？

「そう言えば、燈子さんは元気なのか？」

窮地を脱するため、なんとか話題を変える。

「ええ、相変わらずよ。そくだ蓮、久々に模擬戦でもしない？」

どす黒い笑顔でそう言った。

あれ？もしかして俺墓穴った？

「お、模擬戦ならオレも。どうも最近退屈だからな。」  
「やだよ。お前から相手だと疲れるもん。」

式は直死の魔眼  
鮮花は火の魔術

考えるだけでかなりしんどい。

すると式はしめたという顔をして、

「アザカ、お前レンと模擬戦やってる。オレはちょっと用事が……」

そう言い式は外に出ようとする。

「待ちなさい！どうせあなたの用事って兄さんなんですよ！？」

「そうだと言ったら？」

式が意味ありげに問う。

「絶対に行かせない。兄さんは私のものよ！」

一瞬で一触即発の状態になる。

誰でもいいからこの状況を何とかしてくれ…

とそこに、

カランカラン

「「兄さん（コクート）！？」「」

「ゴメン皆。遅れちゃって…」

1人の男が店に入ってきた。

「えっと、鮮花…何してるの？」

「な…何でもありませんわ。」

「式もとりあえず座ろうよ。」

「あ…ああ、そうだな。」

ナイス！

これ以上はないベストなタイミングで幹也が来るとは…

彼の名前は黒桐幹也。こくとうみきや

式と鮮花が惚れている人物だ。

「ありがとう幹也。お前のおかげで助かった…」

「あ、ああ…そうかい…それより久し振り、蓮君。」

「久し振り、幹也。」

こんな状況でもちゃんと挨拶するのが幹也らしい。

「皆さん、冷たいお茶が入りましたよ。」

お盆を持った小春もやってきた。

「しかし幹也、この暑い中その服装はどうなんだ？」

「いや、癖みたいなものだから…」

幹也は上下ともに黒い服を着ている。  
暑くないのだろうか？

「幹也さん、アイスコーヒーをどうぞ。」

「ありがとうございます、そして久し振りだね。」

「はい。お久しぶりです！」

幹也はアイスコーヒーを飲む。

「うん！いつ飲んでも小春ちゃんのいれるコーヒーはおいしいよ！」

「ありがとうございます！」

その瞬間、2名ほど目つきが変わった気がするがあえて気にしない。

「蓮君、そう言えば店長は？」

「ああ、店長ならそこに…」

店長は傍らで終始ニコニコしていた。

「店長さん、いつものアレをお願いします。」

「アレね、分かったわ。ちょっとついてきて。」

「式、鮮花。少し待っていてくれ。」

2人とも店の奥に行ってしまった。

その時、

ガシッ

「「小春<sup>コハル</sup>!!」」

いきなり小春の肩を掴む2人。

そう、式と鮮花だ。

「「ちよつとコーヒーのいれ方教えてくれない(か)?」」

「は、はぁ……」

数分後

「ゴメン、2人ともお待ちせ。」

幹也と店長が奥から戻ってきた。

「あゝ蓮、ちょっと届け物を頼んでいいかしら？」

「別にかまいませんが、どこにですか？」

「ん？どこよ。」

店長がいくつかの印が書かれた1枚の地図をくれた。

「ここですね。分かりました、ちょっと行ってきます。」

「帰りはいつでもいいわよ。」

俺に荷物を渡し、店長は完全に見送りモードになっている。

「蓮君、僕も手伝おうか？」

「お、ありがとう幹也。じゃあお願いします……」

ガシッ

「レン、ちょっといいか？」怒

「私も少しお話があります。」怒

い、今起こったことをありのままに話すぜ。

右肩にはひっそりとナイフの存在を感じ、左肩には気温とは別の熱

さを感じる。

そんな状態のまま俺は店の奥に連れて行かれた。

約3分後

「すまないなー幹也、ひとりで行ってくる。(棒読み)」

「そうか、気をつけてな。」

「そっちこそ…」

あのあと俺は2人のおはなし(脅迫)を聞いて、1人で行くことに決めた。

え？何を言われたか教えろって？

すまないが思い出したくもない。「あと一軒か…」

夏の午後、太陽はまだまだ容赦してくれないらしい。

かなり暑い。

「ちっさと店に帰るっ」「

そうして俺は最後の一軒に向かった。

「うわっでけっ」。

俺はいまとある屋敷の門前にいる。

「地図によるとここなんだよな。」

そう言いながらインターホンを鳴らす。

『どちら様ですか？』

「喫茶店『ル・ジエ』の者です。お届けものにあがりました。」

『……………どうぞ』

いきなり大きいドアが開いた。

大きいドアの先にはやっぱり大きい庭があり、大きい建物があった。

俺は建物のドアにあるインターホンを鳴らす。

すると、

「お待ちしておりました。さあどうぞお上がりください。」

「お、お邪魔します…。」

初老の男性が出てきて、俺は家に案内された。「お嬢様、お連れしました。」

「分かったわ。後は私が。」

あれ？この声…

「では、私はこれで…。」

初老の男性は俺の届け物を受け取るとどこかに行ってしまった。

「ごんにちは、蓮さん。」

「やっぱり、ムギか。」

そう、うちのお届け物の依頼人のうち、1人はムギだったのだ。

俺も今知った。

「というか、どこから情報を手に入れたんだ？言った覚えは無いんだが…」

「小春ちゃんに聞きました。」

あいつか…

実はうちの喫茶店『ル・ジエ』は喫茶店の他に別の顔を持っている。

それは一見さんはお断りのコーヒーブレンド及び紅茶の葉の販売である。ちなみにちよっと値の張るやつだ。

幹也はもちろんうちの常連だし、ムギも小春を通じて仲間に入ったのだろう。俺たちも合宿でお世話になったからな。

「蓮さん、今から一緒に遊びませんか？」

いきなりのお誘いを受けてしまった。

「ちよっと待っていてくれ。店長に許可もらってくるから。」

「大丈夫だムギ。許可もらえた。」

「はい、分かりました。」

何だかすごく嬉しそうだ。

「で、何するんだ？」

「まずはお茶にしましょう。のど乾いてると思うので。」

「お、ありがとうございます。」

ムギの言うとおり、俺はかなりののどが乾いていた。

「ではこっちへどうぞ。」

そう言われ俺は広い部屋に案内された。

「お嬢様に蓮様、ただいまお茶が入りました。」

「ありがとう、斎藤。」

「ありがとうございます。」

「それでは蓮様、ごゆっくり。」

斎藤と呼ばれた初老の男性はまたどこかに行ってしまった。

「さあ、いただきましょう。」

「ああ、いただきます。」

俺は目の前にあるアイスコーヒーを飲む。

「すごくおいしい。」

それは俺の口から出た正直な感想だった。

おそらく、いや確実に小春や俺の遙か上をゆく美味しさだ。美しささえ感じてしまう。

「斎藤のいれるお茶はいつ飲んでも美味しいわ。」

ムギも笑顔で言う。

「あれは見習う余地がありすぎるな…いつになったらあの境地にたどり着けるんだろうか…?」

「いつかきつとたどり着けますよ。」

こうしてムギとのささやかなティータイムは過ぎてゆく。

「蓮さん、もう一回やりましょう。」

俺とムギは今、黒ひ 危機一髪をやっている。

「また負けた…」

ただいま10戦10敗である。

何でこんなにムギは強いんだ？

というか黒ひ で10連勝って一体どんだけ運がいいんだよ…

「おっと、もうこんな時間だ。」

俺の時計を見ると、もうすでに5時を指していた。

「もう、お帰りですか？」

ムギが寂しそうに言う。

「…」

「ムギ、明日も暇か？」

「明日ですか？大丈夫ですよ。」

「なら明日、皆も呼ぼう。それでいいか？」

俺は笑顔でムギに聞く。

「はい、ぜひそうしましょう！」

「よし、決まりだ。じゃあまた明日な。」

「ええ、また明日！」

そうして俺はムギの家を去った。「店長、ただいま戻りました。」

「あら、おかえり。」

「幹也たちはどうしました？」

「もう帰ったわよ。それより蓮……」

店長がニヤニヤしている。

ヤバい！ろくなことが無い展開の予感がする。

「あんた、合宿の間にトラブルじゃなくてTOLoveに遭って  
たみたいね。」

「店長！字が違います！というかそれは色々とヤバいです…」

「ふふ、全部聞かせてもらったわよ。」

「聞いたってまさか…」

「ええ、小春が色々と話してくれたわよ。」

「やっぱりな…」

「俺は深いため息をついた。」

「あ、蓮さんおかえりなさい。」

小春が店の奥から出てきた。

「小春！お前ってやつは〜！！」

なので小春の顔を縦や横に伸ばした。

「は、はんはんへふは〜（な、何なんですか〜）。」

## 第十九奏（前書き）

今回はちょっとシリアスです。

## 第十九奏

翌日

俺は昨日ムギと約束した通り、軽音部の皆をムギの家に呼んで遊ぶことにしたのだ。

「うわ〜広いね〜」

「本当ね。」

唯と和が感嘆の声をもらす。

「すごいですよ店長！うちの喫茶店の何十倍も大きいです！..」

「こら小春、人の家で騒がないの。でも本当に大きいわね..」

店長と小春も続く。

え？何でいるかって？

理由は合宿の時とほとんど同じだ。

「あれ、律と漣はまだなのか？」

俺がふと呟く。

「りっちゃんと漣ちゃんなら、少し遅れて来るそうです。」

ムギが笑顔で返してくれた。

そして俺たちは2人が来るまで待つことにした。

30分後…

「2人とも来ませんね……」

小春がボソツと言う。

「よし、ちょっと電話かけてみるか。」

そう言い電話を手に取った瞬間、

「うお、なんだいきなり？」

携帯の着信音が鳴った。

しかもディスプレイには『律』と表示されている。

「もしもし、今どこにいるんだ？皆待って……」

「それどころじゃないんだ！漣が…漣が……………」

ひどく焦っているのが声ですぐに分かり、俺は何かいやな予感がした。「漣が…さら……………われた……………？」

「……………」

無言で頷く律。

あのあと俺は律とにかくムギの家に来るよつに言った。

「そんな……………」

「漣ちゃん……………」

ムギと唯が顔を真っ青にしている。

俺はというと、一瞬フラツとして重力が正常に働いていないのかとさえ感じてしまった。

「あたしのせいで、漣が……………」

「落ち着け律！とりあえずその時の状況を詳しく話してくれ。」

律の肩を掴みながら何とか落ち着かせる。

「…実は……」

律が話した内容をまとめるところだ。

律と澪はムギの家に向かう道を歩いていた。

すると突然黒い車が2人の前に止まり、中から黒いコートを着てサングラスをかけた数人が出てきた。

そして澪は車に押し込まれ、律は抵抗したがスタンガンを使われ気絶させられた。

律が目を覚ましたときには車の姿はなく、ポケットには1枚の紙があった。

「その紙がこれなんだ…」

律が1枚の紙を差し出す。

俺はその紙を受け取り、中身を読んだ。「あだたら団…」

俺が口にした言葉に、店長と小春が反応する。

「あだたら団ってあの…」

「でも店長、蓮さん。あの団はもう…」

「あの、そのあだたら団って一体何ですか？」

和が店長に質問する。

「暴力団のひとつで、この辺を拠点にしていたの。」

「蓮君、透ちゃんの居場所とかは書いてないの？」

唯が質問する。

「いや、何も書いていない。」

紙には赤い文字で大きく『あだたら団』とだけ書いてあった。

「そんな…どうしよう……」

「唯、まだ手はある。」

「どうしようって？」

「律、透は携帯を持ってたんだよね？」

「うん、携帯で時間を確認してたし…でもどうするんだ？」

律が不思議そうに聞く。

「小春、溇を捜せるか？」

「はい、やってみます。ムギさん、この家にパソコンは何台ありますか？」

「5台程あるけど…どうするの？」

小春は真剣な顔をして言った。

「それ全部貸してもらえませんか？」

カタカタカタカタカタカタカタカタカタ…

部屋に無機質な音が響く。

そして接続した5台のパソコンの全てにおびたらしい数の小さな文字や数字が表示されている。

「すごい…」

ムギが驚きの声をもらす。

それもそうだろう。パソコンを使っているのはあの小春で、しかもどっかの宇宙人ぐらいの速さでキーボードを叩いているのだ。

「よし小春、派手にやっちゃいなさい！」

「了解！」

小春はエンターキーを押す。

すると、パソコンにこの周辺の地図が映し出された。

そしてある場所に赤く小さな点が1つ見えた。

「小春ちゃん、この点は何なんだ？」

「澪さんの携帯がある場所です。」

「澪の携帯！？一体どうやったの？」

和が驚きの声をあげた。

「警察が行方不明者を捜索するときに携帯電話の電波を頼りにしたりするじゃないですか。あれと同じものを使いました。」

「でも小春ちゃん、このパソコンにはそんな機能無かったはずですが……」

「ええ、なのでそれを扱っているソフトウェアの会社にアクセスして使わせていただきました。」

唯たち4人は目を丸くしている。

これが天然とドジっ娘属性（ドジの方は最近少なくなってきた）、秀囲気殺し（エアープレイカー）に続く小春の3大スペックの最後

の1つ、機械使い（プログラムマスター）である。（店長命名）

「よし、場所は分かった。小春、携帯でナビゲーションを頼む。」

「やっぱり…行くんですか？」

「ああ、こっちから出向いてやる!」

俺が家を出ようとしたその時、

「待って、蓮君!」

「そつだよ、危ないぜ!」

「警察に連絡した方が…」

「行かないでください!」

唯、律、和、ムギの4人に止められてしまった。

「大丈夫だ皆。遷は絶対に連れて帰るから。」

「蓮君が危ないよ!」

唯が涙目で必死に言う。

「悪い、あの時みたいにはなりたくないんだ…」

俺は唯の手をそっと離す。

「蓮、これも持っていきなさい。」

店長が渡してくれたのは、本物のナイフだった。

「絶対にそれを血で染めないように！」

「分かりました。じゃあ、行ってきます…」

俺は腰にナイフを取り付け、外はいつの間にか雨が降っていたのでレインコートを着た。

「漣、無事でいてくれ…」

俺は自分の自転車に乗って、漣の携帯がある場所へ向かった。「ここか…」

俺は今、とある廃倉庫の前にいる。

「行くぞ!！」

誰に言ったわけでもなく、倉庫の中に入った。

倉庫の中にはたくさんの方がいる。ざっと1000人はいるだろう。

「お、誰だデメエ?」

俺に話しかけた1人に聞く。

「お前ら、あだたら団か?」

「ああ、そうですぜ。」

「女の子をさらってきただろう?」

すると男はニヤツと笑い、

「ああ、で、テメエは誰だ?」

と聞いてきた。

「俺か? 蓮だ。あの時のな!」

それを聞いた男はいきなり笑い出し、

「お前が蓮か! あの女を使っておびき寄せようと企んだわけだが、お前1人とは願ったり叶ったりだ!」

「そんなにベラベラ喋るってことは、俺を生きて帰す気はないってことか…」

「その通りだ。」

いつの間にか男やその仲間たちはバットやナイフといった武器を構え、異様な殺気を放っている。まるでこの世のものとは思えない程凄まじい。

「成る程、確かにこいつは魔的だ。だったら…」

俺は持ってきた木製のナイフを取り出して、

「倒さないとな!!!」

レインコートを勢いよく脱ぎ捨て、向かってくる集団に単身で立ち向かっていった。the other side

「蓮君、何で行っちゃうのさ…」

唯は大粒の涙を流している。

「大丈夫ですよ、唯さん。蓮さんは簡単にはやられませんから。」

小春は優しく唯に話しかけている。

「あの…1つ質問していいですか？」

「あら、どうしたの？ええっと…」

「真鍋和です。店長さん。」

「店長でいいわ。で、質問って何かしら？」

和が決心したように口を開く。

「あなたたちとそのあだたら団とはどんな因縁があるんですか？」

それを聞いた瞬間、店長が不敵な笑みを浮かべた。  
main si  
de

「で、これで終わりか？ たく…これだったら式や鮮花、三咲町の  
奴らの方がよっぽど強いぞ。」

俺の周りには気絶したあだたら団の連中がいる。

ただ1人を除いては…

「おい…」

「ヒッ！」

俺はあえて気絶させなかった1人に聞く。

「漣は…お前らがさらった女の子はどこだ!？」

「そ…その奥だ……」

ふとそちらを見ると、

「蓮!!!」

漣がそこにいた。

見たところ外傷はなさそうだ。

「漣!何もされてないか?」

「うん…大丈夫……」

「くっそ、テメエら絶対逃がさねえぞ!」

「漣、下がってる。」

男が拳銃を取り出して、

「食らえ〜！」

俺に向けて容赦なく発砲した。

「もう弾切れか？」

俺はかすり傷すら負っていない。

店長から借りたナイフで弾丸を全て防いだのだ。

「だったら、これならどうだ！」

今度はスタンガンを取り出す。

「それが律に使ったスタンガンか…」

「ああ、そして、お前もこいつの餌食だ!…」

スタンガンから電流を流しながら俺に突っ込んでくる。

が…

俺はそれを木製ナイフで止めた。

「あのなあ…お前、木は熱も電気も通しにくいつて理科で習わなかったか?」

「ち…畜生……。落ちろ————!…」

空いた手で殴りかかってきたので、

「お前が…落ちろ!…」

男のみぞおちを殴り、気絶させた。

「よし、着いたぞ。」

俺は店長に澪を助けた連絡を入れた後、澪を近くのカラオケボックスの中に連れてきた。

「蓮、こんなところに来てなにす……」

「澪、すまなかった……」

俺は澪を抱きしめた。

「すまん……俺のせいで、辛くて……怖い目にあわせてしまった……」

澪の体は震えている。

「今なら誰もいない。泣いたって、誰にも聞かれることはないぜ…  
もう無理しなくていいんだ、な？」

「れ…蓮！蓮！！」

澪はそのまま俺の胸の中で泣き崩れた。

「怖かった…すごく…もう、ダメかと思った……」

「大丈夫だ…もう怖くないぞ……」

俺と澪はしばらくお互いに動かなかった。「澪！」

「律、みんな！」

「澪ちゃん、大丈夫？」

「ケガはない？」

「何もされなかった？」

「うん、大丈夫だよ。」

ここはムギの家。俺たちを待っていてくれた皆は、漣との再開を涙ながらに喜んでる。

「あ、店長。これ、ありがとうございます。」

店長にナイフを返す。

「血は付けてないみたいね。安心したわ。」

店長も安堵の笑みをこぼし、

「ふう、みんなケガがなくて何よりです。」

小春も胸をなで下ろしている。

こうして、俺たちの壮絶な1日は終わった。

## 第二十奏（前書き）

ようやく原作復帰です。

## 第二十奏

ミンミンミンミン…

もう9月だといつのにセミの鳴き声が響き渡る。

俺はといつと、いつも通り部屋に向かっていた。

「おっ、早いな律。」

「よっ、蓮。」

律は机の上でアルバムを広げている。

「りっちゃんに蓮君おいっす。」

「おいっす。暑いな〜。」

「とうとうか唯、すぐだれてるな…」

まあこの暑さでは仕方ないだろう。

「ところで、何それ？」

「昔の軽音部のアルバム。澁が見つけたダンボールの中に入ったんだ。」

ダンボールとな？

何故か隠れたくなる人もいるアレですか？

「ん？この人…どこかで…」

唯が見ているのは1人の女性が写っている写真だ。

たしかにこんな人がいたような、いないような…

）  
）  
）

今部室ではムギ以外の皆がそれぞれ個人練習をしている。

「あ痛っ！」

「どうした、唯？」

「指の皮剥けちった。」

人差し指を立てながら言う。

「うわゝ、痛々しいな。」

「ねえ、澪ちゃんも見て。」

そんな人に見せつけるものでもないだろうに…

で、澪はというと、

「見えない聞こえない見えない聞こえない聞こえない聞こえない……」

完全に自分の世界にトリップしてしまっていた。

それを見た律はしめたという顔をして、

「あー、私もドラムの練習のし過ぎで手の豆潰れちゃったー」

遷の顔が真っ青になる。

「ほれっ、ほれっ……」

ここぞとばかりに律は遷に自分の手を見せつける。

「りっちゃん、ばんそうこうある？」

唯が人差し指をクネクネさせながら言っているが、律は聞こえてないようだ。

「蓮君はばんそうこう持ってる？」

「いや、持ってない。」

相変わらず指をクネクネさせている唯。

もう完全に遊んでいる律と怖がっている漣。

練習はどうしたんだ…？

「ちょっと譜面台を借りたんだけど…」

突然山中先生が入ってきた。

そのまましばらく部室に沈黙が走っていた。「軽音部が正式な部として認められてない？」

「どづいつことなんだ？」

ムギによると、学園祭の時の講堂使用許可書をもらいに行った所、軽音部は正式な部として認められてないのでもらえないそうだ。

「5人いれば大丈夫じゃなかったの？というか、今まで勝手にここの使ってたのかな？」

「……何も言われてないから大丈夫だろ。」

いや律、絶対大丈夫じゃないと思うんだが…

「あれ、ところで漣は？」

さっきから気になっていたことを聞いてみる。

「ああ、漣ちゃんなら…」

唯の指の先を見ると、

「まだあそこで怯えてるよ。」

まだしゃがんで丸くなっている漣がいた。

「帰ってーいー!!」

律のツッコミが響く中、俺はため息をついた。

「頼もう!」

「部長は私!」

「あのなあ…お前らもうちよつとまともに入れよ…」

ここは生徒会室。

あの後漕を置いて俺たちは生徒会室に来た。

「あれ、唯に蓮?」

「和ちゃん!？」

「よっ、和。」

何かの仕事をしている和がいた。

「え、何で和ちゃんがここに？」

「何でって生徒会だからだけど？」

「というか唯、聞いてなかったのか…？」

「すごいね、さすが和ちゃんだよ！」

唯がキラキラした目で言う。

「お前ら本当に幼なじみか？」

「こっちが聞きたいぜ…」

俺はこっさりため息をつく。

「それで、何か用事でもあるの？」

「おお、そうだった。実は…」

「軽音部…軽音部…やっぱり無いわね。」

「そうか…」

しかし何故だ？

「もしかして…」

「りっちゃん、何か心当たりが？」

急にシリアスな雰囲気が漂う。

「うん…これは弱小部を廃部に追い込むための、生徒会の…陰謀！」

唯、律、ムギの3人は一斉に和を見た。

「和ちゃんは本当は心が綺麗な子。目を覚まして！」

「何の話？というか部活申請用紙を出してないだけじゃないの？」

「部活申請用紙？」

「聞いてないぞそんな話！」

「聞いてるだろ！！！」

律の発言を否定したのは、黒い炎を纏った澁だった。

それよりも、澁さん、あなたはいつの間にもその目に万華鏡を宿したのですか？

279

まあそれは置いて、

「そう、あれはまだ春のこと……」

律が急に語り出した。

全部語るのは面倒くさいので、例の言葉で簡略化させてもらう。

皆も一緒にせーのっ、

キング リムゾン!!

一言で言えば、律が部活申請用紙を机の中に入れてそのまま書き忘れた。

以上!!!

「やっぱりお前のせいか〜！」

澪が律の頬を思いつきりのばしている。

「澪ちゃん、りっちゃんも悪気があったわけじゃ…」

「ムギは甘いんだ!」

俺は遠くから3人を眺めていた。

「何とというか、軽音部って唯にびったりだと思つわ…」

「あの3人については俺も同感だ。」

唯が口を半開きにしながらこっちを向いたので、俺と和は揃ってため息をついた。

「しょうがないわ、私になんとかしてあげる。」

「」「」「」「」「」「」「」

和が助け舟を出してくれた。

「軽音部：部員は5人と…で、顧問は？」

「「「「顧問？」「」「」」

しまった！すっかり忘れていた…

「アンタ達…」

返す言葉もないぜ…結局俺たちは山中さわ子先生に顧問をお願いすることになったのだが…

「これって明らかなストーカーだろ…」

「細かいことは気にすんなって！」

「はあ…」

俺はこっそりため息をつく。

俺たちは今さわ子先生をつけ回しており、律に至っては本を双眼鏡みたいにしていた。

「さっきから何なのアナタ達？」

ま、気づかれるわな…

「「「「先生！」「」「」」」」

「軽音部の顧問になって下さい！」

「まだ顧問いなかったんだ…」

先生は呆れており、俺はため息をついた。

「でも私吹奏楽部の顧問やってるから、掛け持ちはちょっと…」

「時間なら取らせません！」

「練習も自分達でやります！」

「ここに名前書いてハンコ押すだけ。ねえ、簡単でしょ？」

「なんとかお願いします！」

透、律、ムギ、俺は必死にお願いしているのだが…

唯はどこだ？

と思ったら、

「じ〜〜〜〜〜」

いつの間にか先生の足下にしゃがんでおり、先生を見上げていた。

「先生ってこの卒業生ですよね？」

「ええ…そうだけど…」

「さっき、昔の軽音部のアルバム見たんですけど…」

「えっ…!?!？」

先生の顔色が変わる。

「そのアルバムはどこ…?」

「ほえ? 部室ですけど…」

「そう…」

先生が後ずさりを始め、

突然、部室に向かってダッシュ出した。

「ちょっと追いかけてくる！」

「あ、ちょっと蓮！」

俺はさわ子先生を追いかけることにした。

今さわ子先生は階段を2段飛ばしで駆け上がっていく。

「なかなかだが、先生、あなたには速さが足りない！」

俺はそう言いながら思いっきりジャンプして、一足跳びで踊り場まで跳んだ。

そうして今度は廊下に出たわけだが、先生はなんと運ばれてくる荷物を飛び越えたのだ。

「ちょっと失礼。」

俺は謝りながら、逆立ちの要領から勢いで体を空中で回転させて着地する。

続いて先生はテーブルの下をくぐり抜け、俺はそのテーブルを飛び越える。

最後に女子が運んでいるフラフープの中をきりもみ回転しながら飛び込む。

「「きゃあ!」「」

それに驚いた女子が持っていたフラフープを放してしまった。

「おいおい先生……」

俺はそうぼやきながらエ ア初号機がA フィールドをこじ開ける  
感じで飛び込みながらフラフープを1つにまとめ、運んでいる女子  
に渡す。

まあそんな事をしていると、先生がいつの間にか部室に着いていた。

と、いつか、あの身のこなしは式までとはいかないが、かなりすごい。

「あの先生何者だよ……」

そう言いながら、俺も部室に着いた。

「はぁ……はぁ……これで……あっ！」

アルバムに駆け寄った先生だが、何か驚いているみたいだ。

「どれ……あ、写真が1枚無いぞ……」

そう、唯が怪しんでいた写真が無くなっているのだ。

「やっぱり、先生だったんですね…」

いつの間にか律達も部室に着いていた。

「ほら、この人…」

律の手にはアルバムから無くなっていった写真があった。

なるほど。確かにそっくりだ。

「よく分かったわね…そうよ、私ここの軽音部だったの…」

「意外ですね…」

「じゃあ、この声も…」

唯はいつの間にかコンセントにつないだテープレコーダーを持っており、再生ボタンを押した。すると、

『お前らが来るのを待っていた！死ねええー！！！！！』

合宿の時のあの音声が響いた。

「やめて、恥ずかしい。」

先生はしゃがみ込み耳を塞いでしまい、

「聞こえない聞こえない……」

横には同じ体勢の漣がいた。

「まだ引きずっていたのか……」

俺も同感。

「でも、何で軽音部に？」

「ふっ……それは……」

ムギが質問すると、先生は目を遠くに向けながら、突然自分の過去について語り始めた。

どうやら長くなりそうだ…

## 第二十一奏（前書き）

原作と多少順序が変わっていますが悪しからず…

## 第二十一奏

あれからさわ子先生の過去を俺たちは延々と聞いていた。

というわけでまた例の言葉で一部抜粋させてもらおう。

皆も一緒に…

キングク ムゾン！！

まあ簡単に言つと、

さわ子先生には昔好きな人がいたが、もっとワイルドな人が好きと言われた。

そこで軽音部に入ってワイルドになろうとした。

やり過ぎた。

以上！

「あれ？ってことはギターとか弾けたりするんですか？」

「そっかゝ弾いて弾いて。」

唯はいつの間にかアンプにつないだギターをさわ子先生に渡した。

一瞬さわ子先生は悦に入った表情を浮かべ…

「くっくっく…しゃーねーな…」

普段とは全く別の人物になった。

〳〵

「速弾き!？」

〳〵

「タツピング!?」

）  
）  
）

「背中弾き!?!」

）  
）  
）

「歯ギター!?!」

「あゝ私のギター…!」

漣、ムギ、俺、律は先生の演奏技術に驚き、唯は1人涙目だった。

「お前らあゝ音楽室好きに使い過ぎなんだよ!?!」

「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」

俺たちは言い知れぬ恐怖で土下座した。

「大体なあゝはっ！…今の…見た…？」

俺たちは揃って頷く。

その瞬間、さわ子先生が崩れ落ちた。

「先生の間はおしとやかキャラで通すつもりだったのに…」

「先生、顔を上げて…」

「りっちゃん…」

「バラされなくなったら顧問やって下さい！」

「りっちゃん！たくましい子！」

いい雰囲気か台無しだぜ…

「およ、ムギちゃん？」

「ん？どうした唯？」

「ムギちゃんが…」

ムギを見ると、うつとりした目で律とさわ子先生を見ていた。

「ムギちゃん？」

「ふえ！？」

「大丈夫か？もしかして風邪か？」

「ううん、大丈夫。」

「ならいいんだが…」

「そんなこんなで俺たちはさわ子先生に演奏を聞いてもらうことになった。」

「~~~~~」

「って感じのオリジナルなんですけど…」

「どうですか？顧問として…」

すると先生は

「前ノリ、後ノリとかリズムセクションがバラバラだったり色々気になることはあるけど…ボーカルはいないの？」

「あ…」

すっかり忘れていた…

「てことは歌詞もまだなんじゃ…」

「スイマセン…」

「あなた達、今まで何やってたの？ここはお茶を飲む場所じゃないのよ…」

ヤバい！かなり怖い…

「先生！」

「アアン！？」

ムギ、どうするつもりなんだ？

「ケ…ケーキはいかがですか？」

それは無謀というものだ〜！

「いただきます！」

「『『『頂くんかい！』『『『

その後、歌詞は漣が考えることになった。翌日…

漣が完成した歌詞を持ってきたようなので、見せてもらおうと思っ  
ているのだが…

「私が先に見る！何故なら私は部長だから！」

「む〜、なら、私は漣ちゃんの心の友だから！」

「じゃあ私は漣ちゃんの心の心その2だから。」

こんな感じでさっきからちっとも進んでないのだ。

そんな4人を俺とさわ子先生は離れて見ていた。

「小癪な！私は澁の心の故郷だぞ！」

「いつからそうなった…」

さわこの いかりの ボルテージが あがってゆく！

「そついえば田舎のおばあちゃん元気かなあ…？」

「いや、今は関係ないから…」

「あー年賀状出したかなあ？」

「話を逸らすな！」

「早く見せんかーい！！！！」

さわ子先生はとうとう我慢できなくなり、歌詞を澁の手から奪い取った。

「どれどれ…」

俺は左から、律は右から歌詞を見た。

そこに書かれていたのは…

キミを見てると

いつもハートDOKI DOKI

揺れる思いは

マシユマロみたいにふわふわ

…

とまあその後も凄まじく甘い歌詞が書かれていたわけで、俺たちは

「あああ…」

「背中がかゆい…」

「もどかしい…」

相当ダメージを受けた。

「やっぱり、ダメ…かな…？」

ヤバい！

澪が泣きそうになっている。

「いや、ダメってゆーか、ちょっとイメージと違ったってゆーか…」

律が必死にフォローする。

「ほら、唯からも何か言ってみてやれ！」

唯に振ると、

「スゴくいい…」

めっちゃめっちゃ目を輝かせていた。

「私はスゴく好きだよ、この歌詞！」

「ほ、ホント!?!」

いかん、唯は完全に落ちた。

こうなればムギに…と思ったが、

こちらも超がつつとりしていた。

「ムギもいいと思っ…」

「はい…」

「じじいのおじい…」

「うん…」

「ホント!?!」

「イエス…」

「マジ!?!」

「どどどどどど…」

最後の方は訳が分からないが、どうやら賛成のようだ。

「さわちゃん！」

「え、さわちゃん？」

律はさわ子先生に助けを求めた。

「さわちゃんはこういうの無しだよね？」

すると先生は少し考え込んだ後、

「わ、私も〜こういうの好きかも〜」

あっさり賛成してしまった。

これで賛成4人、反対2人になったわけだ…

「蓮〜…」

「諦める、律。ここは民主主義に従え…」

俺も賛成して、結局この歌詞でいくことになった。

「で、ボーカルは誰にするの？」

「やっぱり漣じゃないか？歌詞は覚えてるだろ？」

「そんな…私にはムリだよ…」

えらく漣が恥ずかしがっている。

「こんな恥ずかしい歌詞なんて歌えないよ」

「おい、作者…！」

どうやら本人も恥ずかしさを実感しているようだ。

「んじゃあ蓮、やってみるか？」

「律よ！俺にコレを歌えというのか…？」

俺は即座に断った。

唯がものすごく歌いたそうにしている。

全力でスルー！

「ムギ、やってみるか？」

そしてムギに振る。

「私は…キーボードで精一杯だし…」

「そっだよな…」

唯を見ると今度はウインクでめっちゃアピールしている。

ま、スルー

もっかい見る。

「んっ…あっ、ああ〜」

ゆいは はっせい んんしゅうを している

しかし うまく きまらなかった

ついに唯はハンカチをくわえ、泣きそうになっていた。

「唯…やってみるか？」

「え〜私い〜？」

急に明るくなりやがった。

「でも〜、私歌そんなうまくないし〜、上手にできるか分かんない  
ってゆ〜かあ〜」

「じゃあいいや。」

律があっさり言った。

「ウソ、ゴメン！歌う、歌いたいです！」

唯が必死になって訴えている。

あんな態度とるからだ…

「よし、じゃあ歌ってみよっか。」

「ラジャー！」

そうして歌ってみたわけだが…

「キミを見ていると、いつもハート…」

「唯、ギターを忘れてるぞ…」

「あっ、そっか…」

「おいおい……」

そっかじゃないだろ……

〵  
〵  
〵

これはまさか……

〵  
〵  
〵

「……今度は歌、忘れてる……」「……」

ある意味予想通りの結果だった……数日後

「えっと……ボーカルが唯で、曲目が『ふわふわ時間』と……オッケー、出演時間が決まったら連絡するわ。」

「悪いな、わざわざ来てもらって……」

「いいのよ、これも生徒会の仕事だし。でも本当に唯で大丈夫なの？」

和が不安げに聞いてきた。

「大丈夫だよ。先週からさわちゃんの家で特訓してるし。」

「多分間に合うんじゃないかと……」

そう、ギターを弾きながら歌が歌えないという事実が発覚したので唯はさわ子先生の家で特訓してるのだ。

すると、

「待たせたわね……」

部室にまぶしい光が差し込んだ。

「完璧よ。」

さわ子先生が親指を立てている。

「さあ唯ちゃん、皆に見せてあげなさい！」

そして、

~~~~~

「上手い！」

「以前よりも上達してる！」

「自信に満ち溢れた表情！」

「これは…いけるぞ！」

「ぎみをみでるぞ、いつもハードギョギョ…」

「~~~~~」

俺たちの希望は唯のハスキーボイスにより打ち砕かれた。

「練習させ過ぎちゃった」

「声枯れちゃった」

「「可愛いこぶつてもダメだー!!」」

唯とさわ子先生がペ　ちゃんの真似をしていた。

「そんな…じゃあボーカルは？」

「変更なら今日までよ。」

その言葉と共に俺たちは漣を見る。

「ん？ん？…ふえ!？」

漣も気づいたようだ。

「そうね、漣ちゃんなら歌詞覚えてるだろうし。」

「歌詞作った本人だからなあ。」

「頑張ってね。」

「ファイト！」

「ハスキー！唯からもお願い！」

その後、澪は顔を真っ赤にして倒れてしまった。

学園祭まで後3日！！

第二十二奏（前書き）

皆さんがお祭で食べるものの定番は何ですか？

ちなみに私はフランクフルトです。

第二十二奏

文化祭当日

俺、律、漣、ムギのクラスはお化け屋敷をやることになった。

今俺は自分の担当の時間が終わり、外を校内をうろついている。

ちなみに俺の役割は落ち武者だった。

理由は俺が刀を持つと様になるかららしい。

どちらかというと、ナイフの方がしっくりくるのだが、この際それは無しだ。

さて、どこから見てまわるつか。

とりあえず俺はパンフレットを見て、フランクフルトの店へ行くことにした。

「ふう、大体まわったな。後は焼きそばか…」

俺はフランクフルトの他に、たこ焼き、フライドポテト、お好み焼きといった、お祭り定番の食べ物で制覇していた。そして今から焼きそばを売っている教室に行くところである。

「あ、蓮くん」

「お、唯じゃね〜か。というかその不思議なアフロは何だ？」

そこでは唯が紫のアフロを被りながら、焼きそばをホットプレートでジュージュー焼いていた。

「まあいいからいいから、兄さん食べて行きなよ〜」

「ま、1つ頂くか」

ハスキーボイスな唯の変な言葉は置いて、俺は焼きそばを食べることにした。

「お待たせしました〜」

クラスの女子が運んでくれた焼きそばは、麺や肉、野菜がポリユームたっぷり盛られていた。

「盛るぜえ〜、超盛るぜえ〜ってな」

そんな事を言いながら、焼きそばを食べようとしたその時、

「蓮君！」

うちのクラスの女子が入ってきた。

「ゴメン、今すぐ一緒に教室に来て！」

「とりあえず焼きそばを……」

「そんな暇ないから、早く来て！」

俺は焼きそばを残し、腕を引っ張られながら教室に向かった。「疲れた……」

クラスでの用事を済ませ、今は階段で休んでいる。

「お疲れ様。なかなか大変みたいね」

顔を上げると、警察のような帽子をかぶった和がいた。

「いや、お前程じゃないさ……って、何これ？」

「見て分からない？焼きそばよ」

いや、それは分かるんだが……

「何で和が？」

「唯に聞いたのよ。蓮が焼きそばを食べれずに連れて行かれたって」

「それでわざわざ持ってきてくれたってわけか。ありがとうな」

「どういたしまして。さ、練習あるんでしょ？早く食べた方がいいわよ」

「ああ、頂きます」

そうして、しばしの和との2人っきりののんびりした時間を過ごした。その後部屋に行ったら、俺以外の皆が既に揃っていた。

「よし、皆そろったし、練習するか！」

漣の言葉を皮切りに、練習が始まった。

「よし、大分いいんじゃないか？」

この前さわ子先生に言われた課題も克服し、リズムもあっていた。

「みんな、練習はかどってる？」

突然さわ子先生が部室に入ってきた。

「先生、どうしたんすか？」

「まあ、不本意にも軽音部の顧問になったわけだし…じゃーん、衣装を作ってきました」

どこからか、白と黒のゴスロリ衣装を取り出した。

「先生、気持ちはうれしいんだけど…タイミングが…」

そう言い律が顔を向けた先には、

「あ…あんな服着て歌うの？大勢の前で…？」

澪がガチガチに固まっていた。

「うーん、これは気に入らなかったか」

澪が必死に首を縦に振っている。

「私が昔使ってたやつ着る？」

これまたどこからか不思議な仮面がついた変な衣装を取り出した。

「わあ、やっぱりさっきの着たくなってきた」

よっぽど嫌なんだな…

「ストップ！さわちゃん！」

律がとうとう歯止めをかけた。

「そんな衣装、澪じゃなくても恥ずかしいよ」

「そうかしら？それに、2人とも喜んで着てるわよ」

いつの間にか唯とムギがスク水とナース服に着替えていた。

いつの間に着替えたんだ？

まさか、ザ・ワードを使ったのか？

「あらららららっってお前らコレっ！」

これにはさすがの律もツッコんだ。

「どづしてこんな事に…」

「まだ緊張してるの？」

さわ子先生はこっそりと遷に近づき、

「遷ちゃんだって分からないようにメイクしてあげよっか？」

耳元でそんな事を言い出した。

「じゃ、本番頑張ってねっ」

そして嵐のように去っていった。

「あの人は何がしたかったんだ？」

「ぬあゝ、私、今ので全部忘れちゃったよゝ」

唯、そんな格好でいってもアホなだけだぞゝ

「練習しましよ。それしかないわ」

「そつだ、練習だ。何もなかった、何もなかったんだ…」

律がまるで自己暗示をかけるように言い聞かせる。

「はは…ははははは…」

溼の乾いた笑いが部室に響く。

果たして、大丈夫かなあ…？

「じゃあ、これ講堂まで運んどいて」

「ほい」

俺たちは今、機材を講堂に運んでいる最中である。

「あれ、ところで遷は？」

「遷には別のことやってもらってる。今運んでもらってもアシなだけだし…」

まあ、溼ならボーカルをやるショックでアンプとかを落としかねない。

「時が…見える！」

そんな事を呟きながらアンプを運んでいると、前方にフラフラと歩く唯がいた。

「大丈夫か？」

「あ、蓮君、大丈夫だよ」

唯も俺と同じくアンプを運んでいるのだが、いかんせん腕力に差がある。

「少し休むか？」

「ううん、大丈夫。私だって軽音部だもん」

「……そっか……」

驚いた。てっきり「蓮君お願い〜」とか言ってくるものだと思っていたのだが……

唯も少しずつ、けれど確実に成長している。

いつかは俺や和の手を離れていくんだろうか……？

「蓮君？どしたの？」

「ん？ああ、何でもない。早く運んじまおうぜ」

「うん！」

俺たちはまた歩き出した。

ところで、この廊下を行き来するムギを何度か見た気がする。しかも汗ひとつかかずに…

クロッ アップでも使っているのか？

それともやっぱリザ・ワールなのか？

第二十三奏（前書き）

文化祭編はすみませんがこれで終了です。あまりに急な展開で申し訳ありません。

m () m

第二十三奏

「ふいゝ疲れたゝゝ」

「唯、お疲れさん」

機材を全て運び終え、へバリ度キシMAXな唯に労いの言葉をかける。

「お茶が入りましたよ」

「さすがムギちゃん！」

全くだ。最高のタイミングである。

なので俺たちはお茶を頂くことにした。

「りっちゃんと澪ちゃんって幼なじみなんだよね？」

唯が突然律に質問する。

「ああ、幼稚園からの…あれ？小学生からだったかな？」

「幼なじみ違うんかい！」

まさか唯のツッコミを聞く日が来るとは…

「ってことは澪って昔からあんな性格だったのか？」

ついでに俺も聞いてみる。

「そうだぞ、私が澪の髪を誉めたり、左利きなのを皆に自慢してたりしたら、すごく恥ずかしそうにしてたからな」

「いや、それお前しゅごちゃんが原因だ（じゃん）！」「」

今度は唯と同時にツッコんだ。

「機材運ぶの終わった？」

澪が部室に戻ってきた。

「大分落ち着いてるじゃん。あんなにボーカル嫌がっていたのに…」

「そりゃあ、子供じゃないんだから…」

そう言いムギから紅茶を受け取った澪の手は、

「いつまでも動揺してられないわよ…」

ガタガタと震えるというより揺れていた。

よくあれで紅茶がこぼれないものだ…

()(メチャメチャ動揺してるじゃん…)()(

「そんなんで本番どうするんだ？」

「もつヤダ…」

漣がそうつぶやいた。

「律、ボーカル代わって！」

「じゃあドラムはどうするんだ？」

「私がやるから！」

「じゃあベースはどうするんだ？」

「それも私がやる！」

「ああやってもらおうか、逆に見てみたいわ！」

とつか律に漣、それはカ
リキーみたいに腕が4本ないと無理な
気がするんだが…

「律、りっっっ」

「あ、離せ！」

H A N A S E ?

それは置いていて、

どうしようか…

澪はまだ緊張してるしな…

「そつだ、MC考えとこうぜ！」

律が突然そんな提案をした。

「MC？ミルクチョコレートの略？」

「「違う！」」

唯のボケに思わず律とツッコんだ。

イニシャルには合ってるんだが…

「マスターオブセレモニーの略。ほら、曲と曲の間に自己紹介とかするだろ?」

「ああ、アレ?」

どうやら唯も納得したようだ。

「みんな、こんにちは。今日は私たちのライブを見に来てくれて、ありがとう」

「わっわっわい」

律のMCに対してムギはニコニコ笑い、唯は両手を大きく振ってなんとも楽しそうだ。

「ギター! 休みの日にはいつもゴロゴロ。甘いものなら私に任せろ! のんびり妖精、平沢唯~~~~!!」

「ジャラ〜ン、ジャラジャラジャラジャラ、ギュ〜イ〜ン!」

唯がノリノリでエアギターをする。

「キーボード！お菓子の目利きはお手の物。しっとりノリノリ天然系お嬢様。琴吹紬〜！！」

「ポロポロポロポロポロ〜ン」

ムギもエアキーボードをしている。

「またまたギター！高所でなければ最強無敵。武術剣術何でも来い！軽音部の用心棒、水月蓮〜！！」

ゴスツ！

「どんだけ物騒な紹介なんだよ！
律に軽くげんこつをかます。」

俺はお偉いさんの護衛や扉のつつかえ棒になった覚えはない！

「ベース！痛い話と怖い話が超苦手。軽音部のドン、デンジャラスクイーン秋山漣〜！！」

ガスツ！

今度は漣がげんこつを入れる。

「誰がデンジャラスだ！」

「そついつところろが…」

というか、用心棒に首領^{シム}って…

いつから軽音部はそんな危ない集団になったんだ…？

「最後に私、ドラム！容姿端麗頭脳明晰。幸せ運ぶ皆のアイドル、田井中律〜！！」

ドスッ！

「自分だけ持ち上げすぎだ！！」「」

最後に俺と漣でげんこつを入れた。

「ふふっ…あははははははは」

唯をきっかけに、その場の皆が笑い、部室は笑い声に包まれた。

さすがは部長で幼なじみといったところか。そんなこんなであったという間に本番がやってきた。

「皆、練習の成果を見せるときだぜ！」

「うん！」

「ええ！」

「おう！」

律の言葉に、三者三様の返事をする。

「律、やっぱりこれ着て出ないとダメかなあ…？」

「ぶぶぶぶ、よく似合ってますわよ溲ちゅわん」

「うん！すぐくかわいいよ…！」

「大丈夫だって溲！」

「ん〜もっ…！」

遷は黒を基調としたフリフリの服を着ていたが、実際とても似合っていた。

ちなみに俺はの格好は真っ黒のタキシードである。

例の仮面だけは絶対につけたくない格好だ。

『次は、軽音部によるバンド演奏です』

ついに、この時が来た。

「よし、皆いくぞー!!」

「「「おー!!」」」

「お〜…」

1人小さかったが気にしない。

俺たちは自分の場所にスタンバイして、ステージの幕が上がり、俺たちの演奏が始まった。演奏している間俺たちは文字通り夢中にな

っていた。

周りの歓声もBGMの一部に聞こえてしまう。

夢のような時間はあっという間に過ぎていく。

透もきちんとボーカルとして歌を歌えている。

俺たちや観客が一体となった時間はついに幕を閉じてしまった。

観客の大歓声で講堂が埋め尽くされている。

「みんな、ありがとう！」

これで漣の恥ずかしがり屋も克服出来るだろう…

そう思いステージを退場しようとしたその時だった。

「きゃっ！」

「漣ちゃん！？」

漣がコードにつまづいてしまったのだ。

「漣！」

俺は漣の下に潜り込み、転ぼつとしている漣をイナバウアーのような体制で何とか受け止めた。

しかし、

ツルッ

「あれ？」

イナバウアーの角度が急すぎて、足を滑らせてしまい、漣が俺に覆い被さる様に転んでしまった。

「痛たたた…」

漣が膝を立てて起きあがろうとする。

ヤバい！今の漣の格好では観客全員に漣のパンツをさらすことになる。

それだけは絶対に避けねば！！

そんな1コンマ未満の思考の末、俺は床に倒れたまま漣を抱きしめた。

「ふえ？れ…蓮!？」

「すまん漣、ちょっと大人しくしてくれ。」

そう言い聞かせ、俺は漣を抱きしめたまま半回転する。

そして体制を逆転させ、観客に背を向けるように膝立ちになる。

「ほら、つかまれ漣。」

「う…うん……////」

そうして漣に手を貸して、一緒に立ち上がってから退場した。

「何であんな事したかと思ったら、そう言う理由があったのか…」

「それ以外に理由があるかって…」

あの後俺は律達に尋問を受けていた。

「まあそれはおいといて、打ち上げに何か食べ物を買に行くか？
まだ模擬店もやっているみたいだし。」

窮地を脱するために、提案を持ちかける。

「うん…まあいいや。あたしも行くぜ！」

「私も行く。」

「私も。」

唯とムギも賛成した。

湊は……部室で留守番することになった。

「とりあえず、クレープでも買つか？」

「うん、買おう！買おう！」

「あゝ良かった。クレープがまだあって…」

「ほんとにな…無かったら俺どうしようかと思ったぜ…」

俺たちは何とかクレープを買えたわけだ。そのついでにアイスも買い、皆で食べているところだ。

「ところで蓮君、店長さんたちは文化祭に呼んだの？」

バナラアイスを買ったムギがいきなり質問する。

「店長達にはライブは一時間遅れで伝えた」

「ええ！？いいのかそれ？」

「律よ…この気持ちは授業参観の日に親に来てほしくない子供のよ
うな気持ちなんだ…」

「おいおい…」

店のパソコンにはロックをかけたし、小春にもくぎを差すメールを
いれておいた。

だから絶対に大丈夫なんだ！

「蓮さ〜ん！…！」

何…だと…

この声はまさか…

俺は油が抜けたオンボロ機械のようにゆっくりと声のする方を見た。

まあそこにはいたわけだ。

「随分探しましたよ」

こっちに走ってくる小春が…

「どこにいたんですか？」

「よ、久しぶり小春ちゃん。」

「律さんに唯さんにムギさん。お久しぶりです」

落ち着け俺。今来たっていう可能性だつて…

「皆さんのさっきのライブ、すごく感動しました!!」

微塵もなかった…

「つてことは最後のあれも…」

「ええ、ばつちり見させてもらったわよ、蓮」

あれ〜おっかしいな〜

「何故店長が今ここに…?」

「あら、あんな嘘が私に通じるとでも思ったの?それに、小春に対してパソコンをロックするなんて見戯に等しいわよ」

店長は不敵な笑みを浮かべながら言う。

は、そうか!

これは罠だ!むしろ粉バナナ!

店長が俺を陥れるために仕組んだ罠だ!!

それに小春にメールで口止めさせたはずなのにいるっていうのはおかしいじゃないか！

ん？メール…？

「店長、まさかあのメールって…」

「ええ、私が小春に送らせたものよ」

なんてこつたい…

店長は俺よりも早く小春に手を回していたというところが…

「ま、いいものを見せてもらったし、今回のことは帳消しにしてあげるわ」

店長がすごく楽しそうに言った。

俺はその場で深いため息をついた。

「あ、蓮さん。口にチョコがついてますよ」

おそらくさっき食べたチョコアイスが口に付いているんだろう。

そんなことを思っていると、

「はい、取ってあげますよ…よし、オツケーです。はむっ…」

小春はなんと自分の指で俺の口に付いたチョコを取り、それを食べてしまったのだ。

「小春ちゃん、恐ろしい子!」

「小春…今の行為分かっててやったのか?」

律がツッコミを入れ、俺が恐る恐る質問すると、

「ほえ!? 私、何かいけないことしちゃいましたか!?!」

「いや、ナイスよ小春」

小春は全く分かってないようだった。

翌日から、校内の女子によって構成された『澪ちゃんファンクラブ』、『蓮君ファンクラブ』、そして数少ない男子により構成された『蓮撲滅クラブ』の3つのクラブが出来たのはまた別の話。

第二十四奏（前書き）

今回は閑話コーナーです。

第二十四奏

風の旅人（以下風）「自重もせずいきなり登場！どうも、例のP
Vのマーはネタと結論づけた、作者の風の旅人です」

蓮「本当にいきなりだなおい…」

風「おいおい、ノリ悪いなあ。せつかくの閑話コーナーだし、も
っと熱くなれよ！」

蓮「1人でやってる…。いきなり変なところに連れて来やがって。用
がないならもう帰るぜ」

風「ストップ！本題はこれからだ。実は本文中においてオリキャラ
の情報があまりにも少なすぎるといふ意見がハガキでどっさり来て
るんだ」

蓮「さつきから気になってた、そのデカイダンボール箱一杯に入っ
ているハガキはそういうことか」

風「そ。だからその要望にお答えして、このハガキの質問に答えて
いこうっていうのがこのコーナーだ」

蓮「んじゃ、早速質問に答えていこうぜ（さつさとやって早く帰る
…）」

風「お、ノってきたねえ。んじゃ、まずはこれだ！」

蓮は一体何者なんですか？

蓮「いや、何これ…？」

風「この類の質問が一番多かったぞ。さあ、答える！」

蓮「はあ…何者かって言われても、ただの学生だけ」

風「ちょ、おまwww、嘘ついてんじゃねえよwww」

蓮「何でそうなるんだよ!？」

風「ただの学生はナイフ使ってあんな戦闘しないっつーの！」

蓮「まったく、人を化け物扱いしやがって…」

風「違うのか？」

蓮「当たり前だ！次行くぞ次！え〜つと…」

小春は見た目を他の漫画のキャラで例えるなら誰ですか？

蓮「そうだなあ…そう言われると誰だろうっ？」

風「麻雀が打てない宮 咲じゃね？」

蓮「言われると確かにそうだな〜」

風「というわけで小春カモン！」

小春（以下小）「あれ？どこですかここ？」

蓮「おま、何したんだ？」

風「ん？作者の特権ってやつ。まあそれはおいといて、お前ってやつぱり 永咲みたいだなあ…」

小「誰ですかそれ？何かの漫画のキャラですか？」

風「その通り。これ原作だから読んでみる」

少女読書中…

小「ちょ、ちょっと待ってください！私こんな短いスカート、恥ずかしくてはけませんよぉ〜」

蓮「問題はそこかよ…」

風「まああれは今までにない短さだからなあ。じゃ次ね〜」

小春のスリーサイズを教えてください！

小「絶対嫌です！！！」

風「ふっふっふ…そう言うと思ってちゃんと用意したぜ！」

蓮「何をだ？」

風「小春のスリーサイズが書かれた紙に決まってるじゃないか。これをいつもこの小説を読んで下さっている、全国の読者の皆さんにお届けするんだ！」

小「何であなたがそんなのを持ってるんですか！？それにそんな事、絶対にダメです！」

風「何を言う！これを言わないと、お前がもしかしたらものすごく太っていると思ってしまう人だっているかもしれないじゃないか！」

小「太ってません！」

蓮「まあ言うなら、体つきも宮 咲みたいな感じだ」

風「つまり幼児たいけ…くはっ！」

小「次いきますよ！」

蓮「（もはやヤケだ…）」

店長の性格はどんな感じですか？

蓮「（ガタガタ…）」

小「（ブルブル…）」

風「どした？2人共おびえだして…」

蓮「この質問はタブーだ…」

小「恐ろしくて言えませんよ…」

風「そんな事もあるつかと、店長の情報をゲットしたぜ！」

蓮「おい止める！それはパンドラの箱だ！」

風「うるさい！俺はより多くの情報を伝える義務があるんだ！どれどれ…あれ？」

蓮「どうした？」

風「情報が所々？？？になってやがる…」

蓮「ついにあの人は作者の力を超えてしまったか…」

風「こうなったら直接聞くしかないぜ！」

店長（以下店）「誰に何を聞くのかしら？」

風「え、えくと…やっぱりいいです……………」

店「あら、遠慮すること無いわよ。私もたっぷり聞きたいことがあるけど」

風「あ〜れ〜…」

小「え〜つと…果たしてこれでいいんですか？」

蓮「まあ作者もいなくなったし、いいんじゃないか…」

小「じゃあ、私たちが最後しめましょうか」

蓮「そうだな…え〜と…こほん、『軽音部活動日誌！』をいつも愛読いただきありがとうございます」

小「次のページから私たちのプロフィールを載せてありますので、そちらもお楽しみ下さい」

蓮「この小説のご質問、感想等引き続きお待ちしております」

小「たくさん質問がたまったら、またこの場でお会いできると思います」

蓮「それではその時が来るのを信じて…」

蓮・小「さようなら〜」

小「蓮さん、さっきのポケモン勝負の続きやりましょう!」

蓮「頼む小春：次からはこだわりカーフ持たせてし、ふき覚えたカイパーガとカの実を持たせた耐久型のスイモンはパーティーから抜いてくれ!」水月蓮みなつきれん

年齢：16歳

特技：ナイフを使った戦闘、体術

好きなもの：コーヒー全般

嫌いなもの：高い場所

身長：172?

佐山小春さやまこはる

年齢：15歳

特技：機械類の操作

好きなもの：可愛いもの

嫌いなもの：怖いもの全部

小春の3大スペックの紹介

・天然属性ナチュラリスト：文字通り天然ボケ

・雰囲気殺し（エアブレイカー）：その場の雰囲気を一瞬にして打ち消す能力

・機械使い（プログラママスター）：大抵の機械なら造作もなく使いこなすことができる能力

身長：156？店長（本名不明）

年齢：20代前半

性格：カオスな事が大好き

（他は全て????になってました。）

第二十五奏（前書き）

新シリーズ突入！

第二十五奏

ある夜

「はあ、はあ、はあ……」

1人の少女が走っている。

少女は大人用の白衣を着ているが、それだけで体が全て隠れてしま
う程幼い。しかもその白衣も所々破れてしまっている。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

それでも少女は走り続ける。

まるで何か恐ろしいものから逃げようとして……

そして白衣の左胸のポケットには、『佐山』と書かれたネームプレートが縫い付けられていた。~~~~~

「はあ……」

「どうしたのよ蓮、ため息なんかついちゃって…さては何かあったわね？」

文化祭から数日後、俺は今『ル・ジエ』にいる。それに明日からシルバーウィークとやらが始まるというのに、かなり気が滅入っている。

「実は学校で『蓮撲滅クラブ』の人たちに追い回されて…」

「あら、自業自得じゃないの？」

「しょうがないじゃないですか。あの時はああするしか無かったんですから…」

ちなみに『蓮撲滅クラブ』のスローガンは、「生きているなら、ハーレムの神様だって殺してみせる！」だそうだ。

つたく、ハーレムは神様じゃなくて習慣だっつーの。

「ところで、小春はどこに行ってるんですか？」

「さあ？その辺うろついてるんじゃない？」

カランカラン

「ただいま戻りましたあ〜」

小春が玄関から入ってきた。

のだが、お腹の部分が妙な膨らみ方をしており、その上モゾモゾと何かが動いている。

「え〜と小春…その腹は何だ？」

「いえ、何でもないです…」

ミヤ〜オ

あれ…？

今は俺でも店長でもない。

俺と店長は揃って小春を見る。

「え、え〜っと…ネ、ネコの鳴き真似ですよ」

明らかにウソだと分かるのだが、まあ置いておこつ…

するじ、

「あ、ダメ…動かないで…くすぐった…あつ…」

小春の胸元から1匹の白い子猫が顔を出した。

「あ、あの〜…え〜っと…」

小春はバツが悪そうな顔をしている。

それを見た店長は1度ため息をついた。

「店の中に入れなければ別に飼っていいわよ」

「ありがとうございます！」

店長の言葉に満面の笑顔を浮かべ、店の奥に入っていった。

「ところで名前はもう決めたのか？」

俺が気になってたことを聞いてみる。

「はい、この子の名前は『ユキ』です！」

もしかして…

「その猫が白いからその名前にしたのか？」

「はい、もちろんそうですよ」

予想通りというか何というか…

とりあえず俺は、深いため息を1つついた。

「とうるか店長、いいんですか？あんな事言っちゃって……」

「あら、何のこと？」

笑みを浮かべながら聞き返してくる。

この人、絶対分かって言っているな…

「小春の奴、猫なんて飼えるんですか？」

「あの声を聞けば分かるんじゃない？」

店長が店の奥に顔を向ける。

俺もならって向いてみると、何か声が聞こえてきた。

「さあ〜ユキ、お風呂に入りましょうねえ〜」

「!?!?!」

ちよつと待て！

猫を風呂に入れるとか、それはやっちゃいけないだろう…

「明らかに無理でしょう…」

猫の悲鳴を聞きながら店長にやる気のない抗議する。

「あら、あなたがいるじゃない」

「店長、まさか俺が…」

「ええ、小春に猫の飼い方を教えてあげて」

珍しいな。店長が頼み事なんて…

もしかして…

「店長、あの時のことを思い出してるんですか？」

「ええ、まさかあの小春が子猫を拾ってくるなんてね…」

店長は遠くを見ながら呟くように言う。

「別に構いませんが、この連休は店長にお願いしてもいいですか？」

「あら、どっか行くあてでもあるの？」

「ええ、ちよつと里帰りに……」

「……………ふん…分かったわ、気をつけるのよ」

店長は心得顔をして言った。

俺は店の奥に行ってハンガーに掛けてある、幾つかの内ポケットが付いたジャケットを外す。そこにリボルバー式のモデルガンを入れ、愛用の鞘付き鉄製ナイフと木製ナイフを腰のベルトに固定する。

更にその横に立てかけてあり、カバーをかけてある板を持ち出した。

「あらあら、随分な装備ね」

「もちろん、あそこは結構物騒なんで……」

「ま、気をつけなさいよ。って、もう行くの？」

「もうすぐ電車が来るんで…行ってきます」

「ふふ、行ってらっしゃい」

「あ、それとこの本、持っていきますよ」

「ええ、構わないわよ」

俺は店の本棚にある一冊の地図を取り出し、鞆の中に入れて喫茶店を出た。

そしてその地図の表紙には『学園都市』と書かれていた。「さて、着いたはいいが、早速迷っちゃったぜ…」

俺は今、学園都市のどこかの路地裏にいる。

地図通りちゃんと大きな道を歩いていたはずだったんだけど…

「風紀委員シヤツジメンに頼もうにも、もう夜中だしなあ…ってあれ？誰かの声が聞こえるぞ」

俺はその声ができる方向に向かった。

「え〜と…何やってんだ当麻？」

「お、蓮じゃねーか。」

俺の目の前には黒髪ツンツン頭が特徴の男がいる。

名前は上条当麻かみじょう とうま。その右手に異能の力を全て打ち消す幻想殺し（イマジンプレーカー）を宿す、傍迷惑ならぬ旗迷惑な人物である。

「当麻、お前にいくつか質問があるんだけど…」

「何だよ？質問って」

「その女の子は誰だ？」

途端に当麻の顔に焦りが浮かぶ。

「お、俺の知り合いだ…」

ふーん…

「で、次の質問なんだけど、お前の後ろにいる奴らは誰だ？」

そう言い俺はいかにも不良と思われる男達を指差した。

「さあ？」

「いや、さあ？ってお前まさか、また見ず知らずの女の子を助け…
つて、あ……」

「なるほどそう言うことか…。おい、お前もこいつらの知り合いか
？」

突然男達の中の1人が口を開いた。

「そのツンツン頭の知り合いだけど何か？」

するとそいつはニヤッと笑った。

「じゃあ帰すわけにはいかないなあ……」

うーん、どうしようか……？

ふと名案を思いついた俺は、当麻に言った。

「なあ当麻、お詫びにいい言葉を教えてやる」

「何だよいきなり……」

俺は女の子と当麻の手をつかみ、

「三十六計逃げるにしかずだ。逃げるぞ当麻！」

そのまま走り出した。

「待てこの野郎！！」

「畜生、不幸だーーーー！！！」

不良達から逃げる中、当麻の叫び声が真夜中の学園都市に響いた。

第二十五奏（後書き）

今回から始まった新シリーズ、隠れサブタイトルはズバリ、『とある生徒の休日旅行』^{パケーション}です！
うーん、締めきがないような…

第二十六奏（前書き）

もはやパロディの域を越している気がする…

第二十六卷

「はあ…はあ…」

「これでもう撒けたらう…」

不良達からの逃走開始から約15分後、俺たちはある公園のベンチで休んでいる。

不良に絡まれていた女の子は、

「助けてもらって、本当にありがとうございます!」

緊張から解放された安堵からか、やたら明るくなっている。

「とりあえず当麻、この子をジャッジメントに預け、見つけたぞこの野郎!」「」

先程の不良達が公園の入り口にいた。

「見つかったか…。当麻、その子を頼む。」

「おま、大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫」

「テメエ、無視してんじゃねえ！」

不良の1人が声を荒げて言った。

「あゝ悪かった悪かった…で、何の用だっけ？」

「もう許さねえぞ！」

そう言い、手から炎を出す。

「なるほど、パイロキネシスト発火能力者が…よし、当麻はその女の子と下がっててくれ」

「ったく、気をつけるよ」

心配する気があるのなら、そんな投げやりでなくてもっとちゃんと
言っただけいいものだ…

「覚悟しな！」

いきなり男が俺に火を放ってきた。

このままでは俺は確実に黒こげになるだろう。

それはあまりにも嫌なので、俺は右手を前にかざした。

すると火は、俺を黒こげにする前にいきなり消えてしまった。

「な…：テメエ、何しやがった!？」

「見ての通り、ただの消火作業だけど何か？」

「いや、明らかに違うだろ…。」

フラグ乱立野郎のツッコミは置いといて、

「さあて、続きをやるっか?」

俺は笑顔を浮かべながら相手に近寄っていく。

「くっそー、これならどうだ!」

不良たちは全員で俺に向かってきた。

「おい当麻。女の子は大丈夫なのか?」

しかし俺はそんなことは気にせず、平然と当麻に話しかける。

「ああ、ちゃんと無傷だぜ。」

「あ…危ない!」

女の子が叫んだ瞬間、不良たちの手から人間よりももっと固い物にぶつかった様な音が響いた。

「あんた達大丈夫か? 拳を壊したりとかしてないか?」

まるでオモチャで遊ぶ無邪気な子供を優しく注意するように、拳を押さえ悶絶している不良達に聞く。

「う、うわあ~~~~！」

不良達は一目散に公園から逃げ出した。

「やっと終わった。んじゃ当麻、この人を預けるのにちょっとジャ
ツジメントに連絡してくれねーか？」

俺が女の子を見た時、女の子はいつの間にか座ったまま気絶してい
たようで、目を閉じていた。

「ああ……って圏外になってやがる。ちょっと待っててくれ」

そう言い残して当麻はどこかに行ってしまった。

「まったく、携帯くらい貸すのに……」

ふと女の子を見ると、何か既視感を感じる気がする。

「腰までの黒髪に白梅の花の髪飾り……この子どっかで……」待ちな
さい！」「ん？誰だ……？」

気絶した女の子を運ぼうとしたら、いきなり茶髪でショートヘアの女の子に呼び止められた。

「アンタ、佐天さんに何したの？」

相当怒っているようで、体から電流を発している。

「いや、何もしてないんだが…っておい！」

女の子はいきなり電撃を飛ばしてきた。

「ちょ、おま、アブねーな。もう少しで当たるところだったじゃねーか」

「な…アンタ、一体どうやって空中に立ってんのよ？」

女の子の言つとおり、俺は空中に立っている。

勿論佐天さんを抱えて。

というか俺からすれば、電撃を飛ばすそっちの方がすごいんだが…

俺は佐天さんをベンチに座らせ、そこから離れる。

「随分と潔いじゃない」

「潔いもなにも、濡れ衣なんだけどなあ…いいぜ、あんたの気が済むまで相手するから」

「へえ、かなりの自信じゃない…後悔しても知らないわよ!」

あれ?心なしか電流の量が増えているような…

もしかして俺、墓穴つた?

「はあああ!」

相手が突進してきて、そこからキックをかます。

「よつと…軸足もぶっ飛ばせ」

俺は屈んでそれを避け、そのまま軸足にスライディングを仕掛ける。

「なんの!」

しかし相手はそれをジャンプして難なくかわした。

「へえ…なら!」

俺は次の態勢に移った。

「へっ、どうよ!ってあれ?アイツがない?」

「こっちだ!」

「!?!?!?!」

俺は相手の後ろに一瞬にして回り込んで首に手刀を入れて気絶させ、戦闘を終わらせようとした。

その時、

ガッ！！！！

突如現れた何者かに止められてしまった。

「ジャツジメントですの。お姉様を傷つけようとしたその罪、お覚悟はよろしくて？」

うわぁぁお……

「え〜と……ちょっと話を聞いてもらえるかな……？」

「犯罪者は皆そう言いますわね」

「いや、だから俺は濡れ衣だって……」

「聞く耳持ちませんわ。よりによってお姉様に手を出すなんて……絶対許しませんわ！」

「そこ！公私混同しない！！」

さて…これからどうしようかな……………？

とりあえず…

当麻！早く帰ってこ〜い！！」なるほど、その言いつどでしたの

「やっと分かってもらえたか…」

俺たちは近くのファミレスにいる。

「まあ、何はともあれすいませんでした」

「ごめんなさい、勘違いしちゃって…」

「次から気をつけてくれればいいさ」

俺は注文したオレンジジュースをのんびり飲んでいる。

「そういえば自己紹介がまだでしたわね。私はジャツジメント177支部に所属する白井黒子しろいくろこですわ。そして左にいるのが御坂御琴みさかみことお姉様、そして左にいるのが佐天涙子さてなみこさんです。」

「どうも〜」

「よろしくね」

「俺は水月蓮。こっちこそよろしくな」

なんでこんな事になったかといえば、あの時までさかのぼることになる。

「そこ！公私混同しない！！」

「関係ありませんわ。お姉様の敵は私の敵です！」

俺と御坂と白井が再び臨戦態勢になる。

その時だった。

「御坂さん、白井さん、ちょっと待ってください！」

「佐天さん！？」

「どっしりですのっ？」

2人ともとても驚いている。

「その人は悪い人じゃありません！私を不良達から助けてくれたんです！」

その言葉が決め手になって、何とか俺の誤解は解けた。

「全くお姉様は、もう少し控えめでお淑やかになさって下さいな」

「ひるたいわね、黒子は！」

「いや、スカートの下に短パンをはいてあんなキツクかましてくるのに、それでお淑やかかって言うには少し無理がある気が…」

「水月さん、その通りですわ!」

白井が、まるで自分の同士を見つけたような輝かしい目をしていた。

「ほらお姉様、水月さんもこう言ってますし、早くその短パンを…」

「脱がないわよ!というかアンタいつ見たのよ?」

「ああ、さっきスライディングした時に見えた」

「何のためらいもなく答えるんですね…」

「短パンならためらう理由が無いからな」

ちよつとヤバい目をした白井をよそに、佐天さんからツッコミに答える。

「そういえば、アンタに聞こうとずっと思ってたんだけど、アンタの能力って一体何なの?」

白井を押さえ込んだ御坂がいきなり口を開いた。

第二十七奏（前書き）

蓮の能力が明らかに！

第二十七奏

「『『エアロマスター
気体操作能力者?』』」

「ああ。それが俺の能力さ」

俺の能力を知った3人は目を丸くしている。

「いや、そんなに驚くことか?」

「え? テレキネシスト 念動能力者とかじゃないの!？」

「何でだ?」

「いや、だって空中に立ってたりしたから…」

俺はオレンジジュースを飲み終えてため息を1つつく。

「御坂、気体操作と言っても、別に風を操ることが全てじゃないんだ」

「え? どういっこと?」

「その前に、ここはファミレスだ。もう少し静かに喋ってくれ…」

俺が店内を見回すのに倅い、席から身を乗り出して聞いてきた御坂も店内を見回す。
店の中にいるわずかな客はもちろん、店員さん達も皆こっちを見ていた。

「う、うん…ゴメン… / / / /」

御坂は真っ赤になりながら席に座った。

ちなみに席は四角いテーブルに

御 俺
白 佐

と言う風に座っている。

「全くお姉様は…それで水月さん、一体どういうことですか？」

呆れていた白井が聞いてくる。

「俺は気体の“状態”を操ることが出来るんだ。」

「状態………ですか？」

「ああ、だから気体を固めてブロック状にすることも可能ってわけだ。ま、そうしたらそのブロックは動かせなくなるんだけどな」

「白井さん、どういうことなんですか？」

佐天が白井に耳打ちするようにこっそり聞く。

「うーん…恐らく、大気を面でとらえ、ブロックぐらいの硬さにするには相当密度を高くする必要があるはずです。しかし、そんな事をすれば周りの気体はたちまち失われてしまい、真空になってしまふ。けれど、あなたの話を聞く限りそれはない。となると気体の運動を止めたんでしょう。」

「運動？」

「そう、多分水月さんは気体を周りが真空にならないギリギリの密度にした後、重力やその抗力さえ受け付けない状態、つまり空間的に見て完全にその場に留まっている気体を作り出した。どこか違います？」

白井が自信に満ち溢れ、それでいて妖しい目つきをして俺に問いかける。

こんなしたたかな奴を見たのは、店長以来だな…

「おう、大正解だ。まったく、頭の切れる中学生なこと」

「あら、それはどうも」

「え…じゃあ、あの発火能力者の時の火はどうやったんですか？」

バイロキネシスト

佐天が俺に再び質問する。

「ああ、それは…」
「気体の温度を下げて、冷気の壁を作ったんでしょう？」

今度は御坂が答えた。

「その通り」

「うしっ！」

俺より早く正解を言ったのが嬉しいのか、御坂はガッツポーズをしている。

もしかしてこいつ、相当の負けず嫌いなのか？

「まあ、佐天さんも気をつけて下さい。最近は不良の他にも物騒な事件が多発してるんですから…」

「何なんだ？その物騒な事件って」

今度は俺が白井に問いかける。

「最近、何者かにある共通点を持つ女の子がよく狙われているんですの…」

白井の顔が真剣になる。

「共通点？」

「被害にあった人は皆、長さはどうあれ、髪の色が黒なんですの」

なる程、そいつはかなり物騒だな。

「あ、そうそう。もう一つ聞きたいんだけど…」

「お姉様、話の腰を折らないで下さいな」

「…ひるねい…」

御坂が顔を真っ赤にしながら白井に反論する。

「まあまあ…で、聞きたいことってなんだ？」

「あの瞬間移動よ。あれはどう説明するの？」

ああ、スライディングの後のアレね…

「お姉様、一体どうということなんですの？」

白井はとても驚いた様子である。

「私がジャンプして距離を置いたのに、一瞬で私の後ろに回り込んだの」

「あん時は驚いたぜ。何せ一足跳びで数メートルも跳んだんだからよ」

「なんかいろんな意味ですごくレベルの高い話ですね…」

佐天はすっかり置いてけぼりになっているようだ。

「でも、気体操作の他に空間移動能力テレポートも使えるなんて…あり得ませ
んわ！」

白井が声を荒げて反論する。

「いや、あれは能力じゃない。あれは…」

「縮地」

今度は男の人の声が割って入った。

顔を上げると、白衣を着た茶髪の優男がいた。

「縮地？何ですのそれ？」

「強靱な脚力で一步目から最高速度に達し、一瞬で間合いを詰める幻の技。これが決まれば相手にはまるで地脈を縮めて瞬間移動したように見えるからそう呼ばれている……」

俺達4人は呆然としている。

「おっと失礼、面白そうな話題だったものでつい……」

「いや、それはいいんですけど、随分博識なんですね」

「なに、昔たまたま本で見かけただけさ」

男はフツと微笑みながらも自分のことを謙遜していた。

しかし、縮地について書かれた本が学園都市にあるうとは

是非とも今度読んでみたいものである。

「では、私はこれで。そうそう、あまり夜更かししていると成長しませんよ…」

そんなセリフを残して彼は店を出て行った。

「一体何だったんだ、あの人？」

全くもって謎である。

「では水月さん、最後の質問です。あなたレベルはいくつですか？」

あゝ、やっぱりそうきたか…

出来ることならこの質問には答えたくなかったんだけどな

聞かれたからにはしょうがない。

俺は一呼吸置いてから答えた。

「さあ？」

「いや、さあって…。どういことですか？システムスキャン身体検査は受けているんじゃないの？」

「矢継ぎ早だな…というかさっきのが最後の質問じゃなかったのか？」

「あ…揚げ足を取らないで下さいな！」

白井が必死に反論する。

なんかおもしろいな…

それに御坂に至っては、さっきのお返しと言わんばかりに顔をニヤリとさせている。

「まあ実をいえば最後にシステムスキャンを受けたのが、ここを出て行く直前の4年前なんだ」

「では今はどちらの学校に？」

「桜ヶ丘ってところに通ってる」

「桜ヶ丘…聞いたことありませんわね…」

「だろうな」

「あそこはいい所だが、メジャーってわけではないからな。」

「知らないのも無理はないだろう…」

「それで、ここに来たということはやはりシステムスキャンをお受けになるんですか？」

「ああ、明日の昼になったら知り合いの先生にやってもらえることになってる」

「で、その後も桜ヶ丘で何をやってるのかとか白井や御坂の能力、そして御坂の破天荒っぷり（白井談）について等、色々なことについて盛り上がった。」

「ところでお前ら、寮の門限とかは大丈夫なのか？」

時計を見ると、既に11時になっていた。

「！！！！！！！！」

御坂と白井の顔色が急に変わりだした。

大丈夫じゃないんだろうな…

制服から見て、2人が通っているだろう常盤台中学には怖い寮長がいるっていう噂を聞いたことあるからな

まあそんなこんなで佐天は俺が送ることになった。某所にて

1人の男がパソコンの画面を見ながらほくそ笑んでいる。

「ふーん、あれが水月蓮、そして噂の超電磁砲か。レールガン確かに面白そう
な子達だ……」

その男が浮かべる笑みの意味を知るものは、彼以外の誰もいなかった。

第二十八奏（前書き）

なんかいつの間にかバトル小説になっている気が…

第二十八奏

「はあ、クリスマスだからって何でこんなことに……」

1人の少年がため息をつく。

しかしその格好は決して彼の私服というわけではない。

今の彼は赤い服に赤いズボン、頭には綿で出来た赤い三角帽子を被り、白く大きな袋を背負っている。

俗に言うサンタクロースの格好である。

「しかも雪まで降っててこりゃもう、あいつ程じゃないが不幸だ……」

少年は失意のあまりとぼとぼしながら歩く。

だから目の前から走ってくる、白衣を着た1人の少女に気づくこと

が出来なかった。

「キャツ！」

「痛っ！って大丈夫か？」少年は、自分にぶつかってしりもちをついた少女に手を貸す。

「え…？サンタ…さん…？」

少女は虚ろな目で問いかける。

「うーん、格好からいえばそうなんだが」

「お願いします…助けて…下…さ…」

少女はそのまま気を失ってしまった。

「ったく、かなり冷えてるじゃねーか。さて、どうしたものかな…？」

少年は少し考え、

「しゃーない、素直に助けるか…」

そう結論づけ、少女を背負って歩き出した時だった。

「テメエ、ちよつと待ちな！」

数人組の男に囲まれた。

「そいつをこっちに渡してもらおうか」

「いや、この子めっちゃ逃げたぞ」

「ボコられなくなかったら、ごちゃごちゃ言わずにさっさとわた…」

ビュッ…！

男の目の前ギリギリにいつの間にか少年の拳があった。

「さて、ここで問題だ。ボコられるとしたらどっちでしょっ…」

少年は睨みをきかせながら言う。

「?あんたの懐に簡単に入り込める、サンタの格好をした俺

?この寒空の下1人の女の子を数人がかりで追いかけて回し、あまつさえ俺に喧嘩を売ってきたお前ら

さあて、どっちだ?」

「く…くっそー、お前ら行くぞ!」

男達は一目散に逃げ出した。

「ふう、なんとか逃げてくれたか…」

少年は安心したように言う。

実際、この状況は少年にとっては不利だった。

なぜなら少年は気を失った少女を抱えていて自由に動けず、そもそも少女を奪われた時点で勝負は決まった様なものなのだ。

「これ以上体を冷やすといけないし、早いとこ連れて帰るか…」

少年は少女を抱えて再び歩き出し、街の中に消えていった。「はあ、今日は波乱万丈な1日だったな……」

「まあまあ、そう落ち込まないで下さいよ」

俺は佐天を家まで送っている最中だ。

「あの…水月さん、聞きたいことがあるんですけど…」

「ん？何だ？」

「能力ちからがあるって、どんな気持ちですか？」

佐天が少し目を伏せ、悲しそうにしていた。

「そつだな…悲しいな」

「え？」

「完璧な人間なんていない。それに力があるうと無かるうと、人を頼ったり、大切な人を危険にさらしたりすることもある……」

「!！」

佐天が目を見開き、驚きの様子を見せる。

「だからそういう時に、自分を責めちまうんだ……。力があるのにと
うして守れなかったんだって」

俺は星空を見あげた。

「水月さんは、やっぱりそういう思いをしたことがあるんですか？」

「……俺は夏のある日、この力を持っていながらむざむざ友達を危険な目に遭わせてしまった事がある……」

あの時涙はどれほど怖い思いをしたか…容易に想像できてしまう。

いや、その想像を超えていたかもしれない。

「そう…ですか……」

佐天が顔を下に向け、悲しげな目をしている。

この目は…

「聞いちゃいけないことだったらゴメン。佐天、お前昔何かそういう事があったのか？」

「えっ！？な…何で……？」

驚きを隠せずにいる。

どうやら凶星だったようだ。

「やっぱり、聞いちゃいけなかったか？」

「いえ、そう言うわけではないんです。実は…」

佐天はそうして、ポツポツと話してくれた。

「レベルアップ幻想御手か…まさかそんなものがあつたとはな」

「ええ、私のせいで友達を危険な目に遭わせてしまつて…それで…」

佐天の目に少し涙が見える。

「佐天、ちよつといいか？」

「えっ？はい…」

「これは俺の知り合いが言つてたことなんだが、人間は物事をやる時間は少なくとも機会はたくさんある…だそうだ」

え？知り合いつて誰のことか？

もちろん式のことである。

「お前はその事をきちんと反省してるみたいだし、それでいいんじゃないのか？それに、お前にしか出来ないことだってたくさんあるよ」

ふと佐天を見ると、

「そうですね…あ、ここまでで大丈夫です。ありがとうございます！
た！」

「ああ、どういたしました」

彼女は、笑っていた…

「さて…何か忘れてるような…」

ふとそんな事を思い、考える…

あ…「わりい当麻。すっかり忘れてた…」

「もういいぜ…。こんぐらいの不幸はとっくに慣れてるからな…」

「当麻、なんだか負のオーラが出てるぞ…」

というか、どんだけ不幸な生活を送っているんだ？こいつは…

「ほら着いたぞ。ここだ」

「へえ、ここか…」

俺は当麻の部屋に案内された。

学園都市にいる間は、当麻の部屋に泊まることにしたのである。
もちろん本人には事前に了承済みである)

しかし、その時に言われた言葉が引っかかった。

「なあ当麻、シスターに気をつけろってどういう…ハッ!」

なにやら俺たちが入った玄関から異常な殺気の様なものを感じる。

「当麻、後ろにある玄関の方から…」

「言つな！振り向くな！分かっている…。そうか、いないと思ったらそういつことが…」

ここから先は言われなくても分かる。

あの殺気の主は俺たちが部屋に入るのを確認してから確実に仕留めるつもりなんだろう。

「とつま…今までどこ行つてたの…?」

並々ならぬ怒気を漂わせながら、その声の主は俺たちに近づいてくる。

「いや、落ち着けインデックス！これはだな…ってあれ?」

いつの間にかインデックスと呼ばれた純白の幼いシスターは、俺が持つビニール袋に目をやっていた。

ちなみに中身は当麻を探し出す前にコンビニで買った、俺の数日分

の食糧である。

「い飯〜〜!」

いきなりインデックスは俺のビニール袋に飛びかかってきた。

「はあ、いじいじとか…」

俺は空になったビニール袋を持ちながらうなだれている。

俺の食糧は全てインデックスに食べ尽くされ、おまけに現在進行形で頭を噛まれている。

とは言っても彼女が噛んでいるのは俺の周りのスライム状にした空気なので、痛みは全く無いんだが…

それよりも、シスターには気をつけろという当麻の忠告の意味がや
つと分かった。

まさか初日の、しかも数時間もせずに食糧が全滅するとは…

まあ、こっちは部屋を借りてるので、何も言つ気はないんだけど。

「蓮、ゴミ捨ててくるわ」

「ああ、サンキュー当麻」

俺は袋にゴミを全て入れ、当麻にそれを渡した。

当麻は右手でそれを受け取った。

その時！

当麻の右手が俺の手に当たった。

すると俺の周りのスライム状の空気は全部元に戻り、

ガブツ！！！！

インデックスの鋭い歯が俺の頭に突き刺さった。

「おい、蓮！？大丈夫か？」

「痛つてえ~~~~~~~~！！！！！！」

俺の絶叫は、深夜の学園都市に吸い込まれていった。

第二十八奏（後書き）

このシリーズが吉と出るか凶と出るかは分かりませんが、温かい目で見守っていただければ幸いです。

第二十九奏（前書き）

今回はクリスマススイヴということので、いつもよりボリュームたっぷりでお送りします。

それでは皆さん、

メリークリスマス！

第二十九卷

「はい、これで終了しましたよ」

「ふう、ありがとうございます」

今はお昼過ぎ。

現在当麻達が通っている高校で、たった今俺のシステムスキャンが全て終わったところだ。

「それにしても、お久しぶりですね、水月ちゃん」

「ええ、こちらこそお久しぶりです、小萌先生こもえ」

俺は今先生を見下ろしている。

見下ろして〜ごらん〜なんてもんじゃねえぞ！

は置いといて、

月詠小萌先生は桃色の髪に身長135?という、赤いランドセルと黄色い学生帽がよく似合いそうな人なのだが、こう見えてもう成人であり、お酒とタバコをこよなく愛する人なのである。

「でも、本当に突然でしたね。何かあったんですか？」

「いや、単に時間が取れなかったもので…。では先生、俺はこれで」

「水月ちゃん、体に気をつけて下さいね」

「先生こそ、お酒の飲み過ぎには注意して下さい」

俺は笑みを浮かべながら、学校を後にした。「さて、これからどうするかな?かな?つと…」

当麻の部屋に帰って昼食を食べようものなら、昨夜の二の舞になってしまつのは明らかである。

なので近くのファミレスで昼食を食べることにしたのだ。

そして今は昼食を食べ終えたところである。

ふと、ポケットから携帯の振動を感じた。

見ると、着信画面に『白井黒子』と表示されていた。

「はい、もしもし…」

『あ、もしもし水月さんですか？ちょっとお姉様が…』

「御坂がどうかしたのか？」

『ええ、実は…』

『黒子、ちょっと代わりなさい！』

『お姉様！電話を取らないで下さいな！』

『ちょっとあんた！今すぐこっちに向かいなさい！』

「こっちつてどっちなんだ…」

『あの…だから…黒子、言ってやって！』

『全くお姉様は…もしもし白井です。ジャッジメントの177支部は分かりますか？』

「4年前から場所が替わっていなければ大丈夫だ」

『それについては心配いりませんよ。では、お待ちしておりますので』

「分かった。なるべく早く行く」

そうして俺は電話を切った。

「さて、目的が出来たし早く行くか」

俺は背中に掛けてある板のカバーを外した。

数分後：

「ジャツジメントの177支部。ここで間違いなさそうだな…」

俺の目の前には『ジャツジメント177支部』と書かれた看板がある。

俺はその近くにある階段を上り、ドアを開けた。

「ウィーッス」

「あ、水月さん！」

「おや、随分早いご到着で」

中では佐天と白井がソファーに座っていた。

「女性はあるり待たせないようにしないとな」

「それは良い心がけですわね」

「あれ？ところで御坂はどこに？」

「ああ…お姉様なら、あなたの後ろに」

「逃がさないわよ…」

あれ？もしかして怒ってる？

「さあ、システムスキャンは済んだんでしょう？レベルを早く教えなさい！」

指をバキバキ鳴らしながら言う言葉ではないと思うんだけど…

「ちなみに大能力者（レベル4）や超能力者（レベル5）だったら、もしかしてこの前のリターンマッチとか言って本気で勝負したりとか…」

「思ってるに決まってるでしょうー！」

だろうな〜

「さあ、早く教えなさい!」

ま、しゃーねーな。

「分かったよ…レベル4だ。けど勝負はやらないぜ」

「ぐっ…また今度、あんたが忘れた頃に挑んでやるわ!」

なんとも物騒なセリフだなおい…

「というか白井、俺を呼んだ理由ってもしかしてこれだけじゃないだろうな?」

「まさか。他にもありますわよ」

正直これだけのために呼ばれてたら、かなり気が滅入っていたところだ。

「誤解とはいえ、あなたがお姉様に危害を加えようとしたことを見逃す代わりに、例の事件の捜査に協力してもらおうと思っています」

「交渉か…分かった。俺も協力させてもらおう」

「そう言っただけだと助かりますわ」

「黒子、それじゃああたしも！」

御坂が自分も捜査に協力させてもらおうように黒子に申し出る。

「もちろんお姉様にも協力していただきますわ。この事件、今までにない何か嫌な予感がしますの…」

「よし、任せなさい！」

こうして、あの事件の捜査が始まった。「そうと決まれば白井、今までその事件の被害者の写真を見せてもらえないか？」

それを見れば、新しい手がかりが見つかるかもしれないからである。

「分かりましたわ。これです」

白井がパソコンに保存された被害者の画像の一覧を開いてくれた。

「被害者は現在18人。今分かっているのは、全員黒髪ということ

「ただですが…」

俺は被害者の肩から上が映っているパソコンの画像をじっと見て、
1つの疑問が浮かんだ。

「妙だ…」

「どづいつことなんですの？水月さん」

「被害者の服をよく見てみな」

「……なるほど、そういうことですの。確かに妙ですわね…」

画像を見た白井が納得した顔になった。

「あの…水月さん？服を見ろって言われても、全員制服なんですけど…」

「制服がどうかしたって言うの？」

佐天と御坂が不思議そうな顔をしている。

「被害者の中に、常盤台中学の生徒がいないんだ」

「ホントだ…でもどうしてなんでしよう？」

そう、今まで襲われた被害者の内、常盤台中学の制服を着ている生徒が1人もいないのだ。

それに白井によると、この事件は常盤台中学の付近でも起こっているそうだ。

これがただの偶然とは考えにくい。

それに、ここまで奇妙な共通点が存在すると女子生徒を襲うこと自体が目的とは思えない。

「もしかしたら、犯人には別の目的があるのかもしれないぞ…」

「別の目的ですって？」

「何なんですかそれ？」

「さあ？それが分かれば苦労しないんだが…」

「た、ただいま戻りました」

ドアから、頭に花がたくさん付いているカチューシャをつけた少女が入ってきた。

「あら、お帰りなさい初春^{ついはる}。そういえば紹介がまだでしたわね。彼女は初春飾利^{ついはるかざり}、ジャツジメントで私のサポートをやってもらっていますの」

「初春です、よろしくお願いします」

「水月蓮だ。こっちこそよろしくな」

自己紹介を済ませたとき、初春は心底びっくりした様子で俺を見ている。

「えっと…初春、俺の顔に何か付いてるか？」

「その声…間違いない、サンタさんだー！」

「」「」「サンタさん！？」「」「」

初春の爆弾発言に、俺たちは目を丸くしていた。

「ちょっと待って初春、サンタさんってもしかしてあの時の？」

「そうですよ佐天さん！2年前のクリスマスに……」

「え〜っと……水を差すようで悪いのですが、そろそろお仕事の話に戻ってもよろしいですか？」

白井がいきなり割って入ってきた。

「ああ、そうだったな。んじゃ、再開するか」

「白井さん、一体どういうことなんですか？」
事情を知らない初春は、一般人の、しかも見ず知らずの俺が捜査に協力しているという状況が不思議でならないのだろう。

「事情は後で話しますわ。それより、貴女も早く捜査の準備をなさい」

「分かりました！ちょっと待っててください」

初春は部屋の奥の方に走っていった。

数分後

初春はこっちに戻ってきて、白井の口から一連の事情が説明された。

「なるほど…そういうことですか。それで、これからどうするんですか？」

「まずは、犯人の正体を突き止めることが先決ですわね。そのためにどうするか…」

俺たちがしばらく考え込んだ後、

「ねえ黒子、こういうのってやっぱり幽作戦とかがいんじゃない

の？」

ひらめき顔の御坂がそんなことを提案した。

「おそらくそれが妥当ですわね。で、誰がその圏になるかという
とですが、ここはやはり……」

御坂、白井、初春の視線が俺に集まっていた。

「やっぱり俺か……」

「もちろんです。あなた黒髪ですし、囿役にはうってつけですわ！」

そんな当たり前な感じで言わなくてもいいのに……

「よし、じゃあ……」

「わ…私がやります!!」

「佐天さん!? ダメです、危険ですよ!」

佐天の申し出に初春が食い下がっている。

「私、何もしないでただ見ているのはもう嫌なの。それに、昨日蓮さんも言っていましたよね? 私にしかできないことがあるって…」

佐天の目には、覚悟を決めた強い意志が宿っている。

「……………分かった。囿役は佐天にやってもらおう」

俺の決断に御坂と白井と初春は始めは驚いていたが、全員賛成してくれた。

そして話し合いの結果、作戦を実行するのは今夜に決定した。「それでは水月さん、作戦開始までまだしばらく時間がありますので、『サンタさん』について詳しく聞かせてもらいますわよ」

白井のツインテールが触手みたいに動いているが、実際どうやって動かしているのだろうか？

「はあ…分かったから少し落ち着け」

4年前のクリスマスっていったら、多分あれだろうな…

俺はその時の事を話し出した。

2年前

「何なんだこれは？」

俺の手には1枚の手紙がある。

ちなみに内容は、

『こつちでやるクリスマス会で人手が足りねえから手伝ってくれ！
by上条当麻』

だった。

「当麻がやるのは当然のことだから予想できる。

俺は突然降りかかった厄介事にうなだれている。

同封されたお便りには『第七学部小学生クリスマス会』とでかできと書かれていた。

というか何で学園都市の外にいる俺にわざわざ頼むとは…

おそらくどっかの女性が困っていたのを当麻が助け、その結果がこれなのだろう。

あいつにはそろそろ一級フラグ建築士の称号をやった方が良さそう
だ。

あいつは無自覚なんだけどな。

それにたまには里帰りもいいだろう。

かなり恥ずかしいだろうけど…

クリスマス会当日

「「メリークリスマス!!」」

俺はかなり自暴自棄ハイテンションにサンタの役をこなし、ちびっ子達にプレゼントを配りまくった。

ちなみに当麻はトナカイの役だった。

「はい、2人ともお疲れさまでした」

「「お疲れさまでした……」」

もはや会場として公民館を貸して下さった役員さんにまともな返事すら出来ない程、俺と当麻は疲れ切っていた。

「それじゃあ鍵もかけましたし、家までまっすぐ帰って下さいね」

「「分かりました……」」

役員さんはそのままどこかへ行ってしまった。

「じゃあ当麻、さっさと帰ろうぜゲブツ！」

ドサドサという音とともに、俺たちは屋根から落ちてきた雪を頭からかぶった。

「不幸だ……」

「だから何で当麻だけじゃなくて俺も不幸に巻き込まれるんだ？」

ちなみに公民館は鍵がかかっている戻れない。

このまま行けば風邪を引いてしまう。

そして俺たちの手元には、先ほどのパーティーで使った衣装がある。

俺は遂に覚悟を決めた。

「当麻、こつなったらやるしかないぜ！」

「まさか蓮、このトナカイを着ると？」

まさしくその通りである！

こつして俺たちはトナカイにサンタという奇抜な格好で、クリスマス一色の夜の学園都市を歩く羽目になった。

「さて、これどうしようかな？」

当麻と分かれた後、俺は白い袋から余った2つのプレゼントを取り出す。

「きちんと人数分あるはずだから、余ることは無いと思うんだけどな……」

おそらく今日来れなかった人の分なんだろう。

それをネコババするわけにはいかない。

どうしようかと考えあぐねているその少し前方で、

「うつ、ひっく……」

「ほら、もう泣きやみなって」

泣いている女の子とそれを慰めている女の子がいた。

「どづしたんだ？」

俺は頭に花が付いたカチューシャをつけて、泣いている黒いショートヘアの女の子に聞いてみるが、泣きやむ様子が全くない。

「あ……この子、今夜やるはずだったクリスマス会に参加しそびれ

「ちやいまして…っであれ？」

腰まで届きそうな黒髪の女の子が俺を見て固まっている。

「初春、サンタさんが来たよ！」

「ひつく…え？サンタさん！？ホントだ〜佐天さん、本物のサンタさんだ！」

泣いていた少女は一変して喜びだした。

「それじゃあ、君達にプレゼントだ。メリークリスマス」

「メリークリスマス！！」

ショートヘアの女の子のプレゼントの中身は可愛いペンダント、ロングヘアの女の子のプレゼントの中身は白梅を模した髪飾りだった。

2人とも嬉しそうにお互いのプレゼントを自慢している。

「サンタさん！本当にありがとう」

「気をつけて帰るんだぞ」

女の子達はそのまま走り去ってしまい、見えなくなっていました。

「ということは佐天さんのその髪飾りは、その時にもらったものなの？」

「ええ、まあ…」

佐天が顔を赤らめながら髪を撫でている。

「初春はペンダントはどうしてますの？」

「仕事や学校でつけるわけにはいかないの、プライベートの時につけてます」

プレゼントをきちんと使ってもらえるのって、こんなに嬉しいことなんだな…

まさに感無量である。

「おっと、そろそろ時間ですわよ。皆さん行きますわよ！」

いつの間にか日が暮れてきたので、俺たちは作戦の準備をした。

「というか俺が佐天に既視感を感じたのは、こういうことだったのか
…「2人とも、異常はない？」

「こちらはありませんわ」

「こっちもだ」

御坂と白井と俺で佐天を中心に三角形のフォーメーションを組み、
初春にはジャッジメント177支部でサポートをもらっている。

こうして事件の犯人をあぶり出す作戦に出たのだ。

「初春、この付近に誰か不審な動きをしている人はいませんか？」

「人はいません。ただ……」

「ただ？」

白井は初春のはっきりしない語尾に疑問を覚えているようだ。

「ただ……未確認の物体がそっちに向かっていきます！」

「何ですって!？」

するとその時、

「皆さん、犯人が!つてあれ?何これ？」

佐天の前に立った俺たちが見たのは、

「……ロボット!？」

一見するとタチ マと間違えそうな、1台のロボットだった。

第三十奏（前書き）

今回から諸事情により、地の文を蓮から作者に変更させていただきます。

混乱するかもしれませんが、ご容赦下さい。

第三十奏

「え〜っと…こいつが事件の犯人なのか？」

あまりに意外な出来事に遭ったせいかわ、蓮はどこか呆れたような顔だ。

「何バカなことやってんの？あいつを操っている奴が犯人に決まってるじゃない！」

「いやお姉様、相手が敵意を見せなければそうは言えま…」ガシヤッ！』…すわね」

黒子が言い終わる前に、ロボットの右手の部分から刃物が出てきた。

「お姉様に水月さん、取りあえずあれを破壊して下さいな」

「了解！！」

白井は佐天をテレポートで避難させ、蓮と御琴はそれぞれ戦闘態勢をとる。

するとロボットは俺たちめがけ、刃物を振りかぶって襲いかかった。

「遅いぜ！」

蓮が左手でロボットの右手を押さえ、

「喰らえ！」

右手でロボットにナイフを突き立て、高い音が響いた。

「な…何よこれ？」

「こんなのありか？」

ナイフはロボットにダメージを与えていない。

それどころか、触れてすらなかった。

ロボットがバリアーを張って蓮の攻撃を防いだのだ。

「アンタ、ちょっと離れて。そのロボット！これでも喰らいなさい！」

蓮が離れるのを確認し、御坂が少し強めの電撃を放つ。

しかしこれもバリアーで防がれてしまう。

「もう！一体どうなってんのよ？」

御坂が苛立ちの様子を見せる。

「こつなったら手加減しないわよ…覚悟しなさい！」

御坂の体に走る電流の量が跳ね上がった。

「ちょっと待て！お前今の状況が分かってるのか！？」

「あのロボットを倒せるってことでしょ？それぐらい分かってるわよ…」

「そうじゃない、お前絶対分かってないから！」

蓮の言葉を見殺しして、御坂は大量の電流をロボットに放った。

ロボットはバリアーを張るもあっさり破られ、電流を浴びて大破した。

「はあ…だから言ったのに…」

「全くお姉様は…少しは学習して下さいな」

蓮と白井は揃って落ち込んでいる。

「い…いいじゃない！目的を達成出来たんだし」

「その代償があれなわけだ…」

蓮は遠くに目をやる。

「というか何でこんな所にこんなものがあるの!?!」

御坂はバンと鉄塔を叩く。

それは送電線を張っている送電用の鉄塔であり、その先にのびている電線が御坂の電氣量に耐えきれずに切れていた。

「今頃街では大規模な停電が起きているだろうな……」

「う…うるさいわね! ロボット回収して早く帰るわよ!」

成り行きから言い返せない御坂は、顔を真っ赤にしながらロボットの回収に向かった。「初春、復旧はまだか?」

「電気が来るまでもうしばらくかかるみたいです」

翌日、蓮たちはジャッジメントの177支部にいるのだが、電氣は全くついていない。当然パソコンもついておらず、ロボットのデータを解析することも不可能なのだ。

「それにしても、ここまで暑いと初春のスカートをめくる気も起きませんね〜」

「暑くなくてもめくらないで下さい!」

「ああ、太陽が憎いぜ…」

佐天たちのやりとりをよそに、ついに蓮は大自然に文句を言い出した。

「あなた達、またここをたまり場にしてるの?」

するとそこに、メガネをかけた女性が入ってきた。

「固法先輩?」

「どうも、お邪魔してます」

「あなたが水月蓮さんね。私は固法このりみい美偉。ジャツジメントで白井さんの先輩よ。よろしくね」

「こちらこそよろしくお願ひします」

固法と蓮はお互いにお辞儀をする。

「ところで水月さん、この暑さを解消するためにちょっと協力してもらえないかしら？羊羹あげるから」

「え？俺すか？」

固法の自分への突然のお願いに驚いているのか、蓮は呆然としていた。

「あゝ、涼しいですね〜佐天さん」

「そうだね〜」

「まさかこんな方法があったとは…」

「すっかり見落としていたわ」

初春、佐天、御坂、白井は現在涼んでいる。

「ありがとう、水月さん。おかげで助かったわ」

「別に構いませんよ。こっちも羊羹をもらってますし」

蓮は固法からもらった羊羹を小さく切って食べた。

固法が蓮にお願いしたことは、蓮の能力を使って室内温度を下げる事だった。

そのおかげで、この空間にいる人が例外なく冷気を満喫している。

もはや人間エアコンである。

「水月さん、どうしたんですの?」

蓮はいつの間にか何かを考えているようだ。

「いや、俺の能力でこんなことが出来るんだ、御坂ならもっとすごいことが出来ると思ってな」

「へ？」

呆然とする御坂に対して、蓮はすごくニコニコしていた。

「すごい！本当にパソコンが動きました！」

「そりゃ電気だからな。動かないはずないさ」

「お姉様、これじゃ人間発電機ですわね」

「う…うるさいわね黒子！」

蓮が思いついたのは、御坂の能力でパソコンを動かすことだった。

これで電気が復旧するのを待つ必要が無くなったわけだ。

「初春、いけますの？」

「はい、これが動けば大丈夫です」

初春がロボットのデータを吸い出し始めた。

数分後

「これでこのロボットにインプットされているデータを100パーセント引き出しました」

「へえ、驚いた。大したもんだな」

蓮が目を丸くして驚いている。

「初春は優秀なオペレーターですから、これぐらい朝飯前ですわ。他はアレですけど…」

「そうですね、確かにアレですね…」

「白井さんだけでなく佐天さんまで、アレって何なんですか？」

初春は自分がトロいと言われていることに気づいてないみたいだ。

「それより初春、データ取って何か分かったことはあるか？」

「ええ、どうやらこれは試作機らしく、まだ不完全な部分がいくつも見られます」

「てことは、今度はこれ以上の奴が作られるってことか？」

「今度こそ完璧に負かしてやるわ！」

憂鬱そうにしている蓮をよそに、御坂はよく分からないリベンジに燃えているようだ。

「もう少しデータがあれば何か分かるかもしれませんが…」

「なら、その専門の機関に聞いてみるか？」

蓮が学園都市の地図に一点の印をつけた。

「水月さん、それは何なんですの？」

「大脳工学研究所だ。ここなら何か分かるかもしれないしな」

「そうね、このままここにいっても仕方ないし、行きましよう！」

こうして蓮たちは『大脳工学研究所』に向かうことにした。

第三十一奏（前書き）

このシリーズ、出来れば冬休みの内には終わらせようと思います。

第三十一奏

「それでは、タクシーでも拾って行きましょうか？」

「いや、タクシーよりもっと速いのがあるぜ」

白井にそう提案しながら、蓮は壁に立てかけてある少し大きめの板を取り、そのカバーを外した。

すると中から灰色のスケボーみたいなものが出てきた。

スケボーと違うところは、それにタイヤが付いてないことである。

「水月さん、それは何ですか？」

初春が首を傾げて聞いてくる。

おそらく、いや確実に見たことがないんだろう。

「これは飛行鉄板フライングボードっていう、知り合いにもらった物なんだ。」

「名前からして、それは空を飛べますの？」

「もちろんさ」

ちなみに蓮が言うには、彼はこれに乗っているときだけ高所恐怖症が治るんだそうだ。

「わあ、水月さん、是非それに乗せて下さい！」

初春の目がえらくきらきらしている。

「5人ぐらいなら大丈夫だからな。みんなで行くこつぜ！」

「ああ、お姉様とこんなに密着出来るなんて…夢みたいですよ！」

「夢で終わってくれればよかったんだけどね…」

フライングボードにはなんとか5人乗れたのだが、如何せん密着状態になっている。

「水月さん、早く行きましょう！」

「初春、お前目がやけにきらきらしているぞ。ま、行くぞ！」

蓮が足に能力を集中させると、板が5メートルぐらいの高さまで浮いた。

「すごい！ちょっと、これ浮いてるじゃない！」

「みんな、しっかり掴まってるよ！」

蓮たちを乗せたフライングボードは、勢いよく出発した。

ちなみにこの危険行為は、白井の越権行為おしじこでなんとかならしい。

「さて、着いたぜ」

「確かにタクシーより速いですけど、多用は禁物ですわね」

「初春、すごい面白かったね！」

「はい！何かアトラクションみたいでしたね！」

初めての体験に初春と佐天がはしゃいでいる。

「ここが脳工学研究所か」

都会の中心部から少し離れた場所に大きな建物があり、そこには『
脳工学研究所』と書かれた看板があった。

「どちら様ですか？」

中に入ると、職員と思える女性がいた。

「ジャッジメントですの。ある事件の捜査のため、ご協力をお願いに来ました。ここの責任者をご面会させていただきたいのですが」

白井が自分のジャッジメントの腕章を見せる。

「分かりました。少々お待ち下さい」

職員は責任者を呼びに、奥に走っていきこうとした時、

「その必要はないよ」

「しよ、所長に副所長！」

2人の男が奥から出てきた。

「「「あ！ファミレスの時の謎の人！！！」」」

「おや、君達か。久しぶりだな」

「なんや、所長の知り合いでつか？」

「ああ、ちよつとな」

そこにいたのは連たちが2日前に会った茶髪の優男と、関西弁をしゃべる黒髪で細目の男だった。

「すまない、自己紹介がまだだったな。私は篠山邦治しのやま くにくに。そしてこっちが……」

「小野昂おののすけや。よろしくな」

「じつは……」

「また変な回路やな」

初春がロボットから吸い出したデータを見た篠山と小野が難しそうな顔をしている。

「何か分かりそうですか？」

「蓮君：だつたかな？すまないがこれを詳しく解析するには、少し時間がかかりそうだ」

「まだ停電が直つたらんから動くのは独立電源だけやからな。ま、分かったら連絡入れるさかい、それで堪忍してな」

小野が頭をかきながら蓮をなだめるように扱った。

「すまないが、これからデータの解析を行うので今日はもう帰りなさい。それでは」

「ほな、また来てな」

篠山と小野はその一言で奥に行ってしまった。

蓮たちもこれ以上この場においても仕方なく、それにそろそろ夕暮れ時なのでフライングボードで177支部に着いた後、その場で解散となった。「ただいま〜ってどうしたんだ当麻？」

「いや、飯の他に色々あつてな…」

「飯以外のどういう色々があつたら、夜中にシスターに噛まれている高校生っていう状況が完成するんだ？」

蓮の言うとおり、当麻はインデックスに頭を噛まれて既に力尽きていた。

おそらく彼女の逆鱗に触れるような行為を当麻が取つたのだろう。

「で、今度は何をしたんだ？」

「家に引きこもつてた」

「当麻、お前鬼だな…」

この暑く、しかも停電でエアコンがつかない日に家に1日閉じ込められたら反抗してもおかしくはない。

「でさ〜当麻、何で俺も巻き込まれそうなのかな、かな？」

狩人の目をしたインデックスが鋭い歯を煌めかせながら、ゆらゆらと蓮に向かってる。

「イ…インデックス、待て！やるなら当麻をやれ！」

「おい蓮！何でそうなるんだ！？」

「ふふ…ふふふふふふふふ…」

インデックスは2人の元にゆっくりと近づいていく。

「そして当麻君、その右手を放してくれないかな？」

「蓮、死なばもろともってやつだ」

「ふふふふふふふふふふ…」

インデックスは言い争う2人に文字通り飛びかかった。

「うわああああ！」

「不幸だああああ…！」

蓮と当麻がインデックスの歯の餌食になったのは、もちろん言ってもない。

第三十二奏（前書き）

次からおそろくバトルに突入です。

第三十二卷

翌朝

昨日の停電はようやく復旧して、学園都市は本来の機能を取り戻した。

蓮はジャッジメント177支部にやってきた。

「ういゝっす…」

「おはようございま…って水月さん、そのたぐさんの歯形は一体どうしましたの？」

「何かあつたんですか!？」

中にいた白井と初春が、蓮の腕についた歯形に驚きを隠せないでいる。

蓮は昨晚、半ば狂乱していたインデックスに頭だけでなく、左右の

腕も噛まれてしまったのだ。

「いや、色々あってな……それより白井、例のことについて何かあつちから連絡はあつたか？」

「いえ、何も連絡はありませんが？」

「やっぱそうか……そうそう初春、すまんがあのロボットのデータのバックアップを取って、ファイル形式に変換してくれないか？」

「構いませんが、一体どうするんですか？」

「もう1人のプロフェッサーに見てもらおうと思つてな」

蓮の不可解な発言に、初春はパソコンを立ち上げながら首を傾げていた。

「で、そのプロフェッサーって誰なの？」

「もしかして、初春よりすごい人なんですか？」

データを変換している間に御坂と佐天が到着し、オフィス内にはいつものメンバーが揃った。

「さあ、どっちだろうな。分からん」

「なんか気になりますわね」

「水月さん、ファイルの変換終わりました」

パソコンの画面にはファイル形式のアイコンが映し出されていた。

「サンキュー初春。後は俺がやるから大丈夫だ」

蓮は初春と席を交代し、携帯から電話をかけ始めた。

『はい、もしもし佐山です』

「小春だな？」

『蓮さん？どうしたんですか？』

「すまんが今から店のパソコンに、あるロボットの設計データを送るから急いで出来る限り解析してくれないか？今度ケーキ奢るからさ」

『ケ…ケーキですか？分かりました！急ぐと言ってもしばらく時間がかかるのでそちらで待機していて下さい』

「ああ、すまんな小春」

『別に構いませんが、危ないことはしないで下さいね…』

「分かってるさ。それじゃあな」

蓮は電話を切ると宛先を入力して、あらかじめ用意してあった添付ファイル付きのメールを送信した。

「一体どこに送信したんですか？」

初春が首を傾げながら聞く。

「ちょっと知り合いの店が雇ってるやつにな」

「ていうか、ケーキでつられるなんてまるで初春みたいですね」

「全く、その通りですわ」

「いや、実際そうなんだが……」

「今度は水月さんまで!？」

数少ない自分の援軍が減ったことにより、初春は落ち込んでしまった。

数時間後

ブルルルルル…

オフィス内に設置されている電話が鳴り響いた。

「あ、私出ますね」

初春が電話に出て、知り合いらしい誰かと話している。

「はい…はい…分かりました。それでは」

初春はそのまま電話を置いた。

「誰でしたの？」

「大脳工学研究所の篠山さんです。データの解析が終わって分かったことがあったそうなので、私ちよつと行ってきます」

「気をつけて行ってこいよ。あと初春、ちよつと耳かせ」

「なんですか？」

「実はな…」

「君が初春飾利さんだね？分かったデータを持ってくるから、少し待っていてくれないかね？」

篠山はどこか奥に行き、研究室には初春1人が残された。

「さて、白井さんに連絡を…ってあれ？何だろう？」

初春は引き出しからはみ出した書類を見つけた。

ヴー、ヴー、ヴー…

蓮の携帯のバイブレーションが鳴りだした。

「もしもし」

『あ！蓮さんですか？小春です。データの解析が終わりました。それで、今そっちのパソコンに新着メールは入ってますか？』

「ちょっと待ってくれ…。ああ、入ってるぜ。それで何か分かったか？」

『はい。結論から言うと、これはどの周波数の電波、正確に言うと電磁波も受信することが出来ません』

「なんだって？じゃあどうやってあれは動いてるんだ？」

『今そっちにこのロボットが受信する波と受信機のデータを送りました。それで、このロボットが受信しているのは電波ではなく、脳波です！』

「そんなことが可能なのか？」

『現代の科学技術をもってしても、脳波を使ってロボットの遠隔操作は不可能です。しかし学園都市の科学技術や誰かの能力を使えばおそろく…』

「可能ってことか」

『ええ…』

「分かった。ありがとな、小春」

蓮は電話を切ると同時に、パソコンに入っていたメールの添付ファ

イルを開いた。

「これか…」

その時、

「それで、電話の内容はどうだったの？」

「固法さん！？いつからいたんですか？」

蓮の後ろにいつの間にか固法が立っていた。

「ついさっきよ。それより、その波のデータは何なの？」

蓮はその場のみんなに電話の内容を話し、固法に書庫バンクへのアクセスを頼んだ。「よし、出たわ！脳波一致率99.7パーセント！」

「こ、この人って…」

パソコンに映し出されている顔写真に蓮が固まっていた。

「これって…」

書類を見た初春が声にならない驚きをあげている。

「脳波による機械の遠隔操作の研究報告書…？これって…！！」

「初春ちゃん、おいたはあかんで」

「過ぎた好奇心は身を滅ぼすよ」

「小野さんに、篠山さん…？まさか……」

篠山と小野の2人が怪しい笑みを浮かべていた。

「あれ？この人、名前が…」

「佐天さん、どうしたの？」

「いえ、顔は知ってるんですが名前が…」

「名前が…違う……」

そう、顔は篠山なのだが、名前が違うのだ。

「この名前…そうか、そういうことか…」

蓮が今までにない悲しそうな顔をしている。

「水月さん、どうしましたの？」

「いや、何でもない」

「ふふふ…今のところ順調だ」

「ここまで計算するとは、あんさん恐ろしいな」

小野の両手には、気絶した初春が抱えられていた。

「さあ、我が計画の始まりだ！」

そして彼らの前には、何かたくさんさんの管が集まっていた。

「どう？初春さん出た？」

「ダメだ、繋がらない」

「そんな…」

初春に電話をかけても全然出ない。

「けど、まだ大丈夫だ！」

「どういふことですか？」

佐天が不安そうにしている。

「またあいつに頼むことになるんだが…」

『蓮さん、今度はどうしたんですか？』

「小春、『パンドラ』をこっちに送ってくれないか？頼む！」

『……分かりました。ケガをしないように気をつけて下さいね……』

「分かった。ありがとな……」

蓮が電話を切ると同時に、パソコンに添付ファイル付きのメールが入った。

「水月さん、パンドラって一体何ですか？」

「小春が自分で作ったソフトに付けた名前だ」

蓮がパソコンのスペースに数字を打ち込んでいく。

「白井と固法さんに1つ頼みがある。今から見るものは全て外部に漏らさないでくれないか？」

「分かったわ」

「私、口は固いんですの」

「そうか、ありがとう……」

蓮は礼を言い、パソコンのエンターキーを押した。

すると、画面に地図が映し出された。

「これって、学園都市の地図じゃない!？」

「それにこの赤い点って、まさか初春の…」

「ああ、初春の携帯の位置だ」

その言葉にその場のみんなが驚く。

「そんなのどうやって?」

「事情は後だ! 固法さん、ここでナビゲーションお願いします?」

「分かったわ。アンチスキル警備部隊にも場所を知らせておくわ」

「よし、みんな行くぜ! 今日昨日よりも飛ばすからな、しっかり捕まってるよ!」

「」「了解!」「」

蓮、御坂、白井、佐天は外に出てフライングボードに乗り、初春のもとに急行した。

「ふう…」

一仕事終えた小春が一息ついて、ユキと遊んでいる。

「小春、蓮はどうだった？」

「あ、店長。やっぱり何か危ないことに関わっているみたいですよ」

「そう…」

店長はそれを聞くと、自分の携帯からどこかに電話をかけた。

「あ、もしもし、あの人がいる？え、いない？なら君に頼みがあるんだけど…」

第三十三卷（前書き）

もう年の瀬ですね…

第三十三奏

「さて、これからどうするかな？」

ここは深夜のファミレス。

クリスマスだというのに、随分人が少ない。

「ん…う…ここは…？」

「お、起きたか」

少女は寝ぼけ眼で辺りを見回す。

「何があったかは聞かないけど、大丈夫か？」

少年の問いに対しても少女は虚ろにしか答えない。

しかし、

「俺は水月蓮っていうんだが、お前の名前って何なんだ？」

この質問に対しては、どこか不思議そうな顔をした。

「ん？どうしたんだ？」

「あの…名前って何ですか？」

「えっと…もしかして名前が無いのか？」

「はい…」

少女の驚きの発言に、少年はしばらく呆気にとられた後、何かを考えるそぶりをして少女を見た。

「白衣に佐山って書いてあるから、後は下の名前だな…」

そして少年は急に明るい顔になった。

「よし、何か春みたいにぼわぼわしてるから小春だ！」

「小春…ですか？」

「ああ、お前は今日から佐山小春だ。よろしくな、小春」

「は、はあ…よろしく…お願いします…」

この日から、少女は佐山小春となった。「まだですよ、水月さん？」

「もうしばらくかかりそうだ」

蓮たちは今、フライングボードで無人の長い直線道路を滑空している。

「ところで水月さん、さっき言ってた『パンドラ』ってどういうソフトなんですか？」

佐天が蓮に質問してくる。

「『パンドラ』は、携帯のGPS機能をパソコンのソフトウェアに変換したものなんだ」

「そんな事出来るの？」

出来るとしたら小春ぐらいである。

「さて、そろそろ敵のお出ました」

前方に多数のロボットが見えた。

しかもこの前の試作品とは外見が違い、より洗練されたボディーになっており、防御力が増しているようである。

「多いな〜」

「けれど向かっている先は学園都市。見逃すわけにはいきませんわ」

「さっさとやっっちゃわよ!」

フライングボードから降りて佐天を近くに避難させ、蓮、白井、御坂は戦闘態勢をとった。

「2人共、ちょっと後ろに下がっててくれ」

蓮は右の腰につけたホルスターからリボルバー式の黒い銃を取り出し、ロボットに銃口を向けた。

「水月さん、それってまさか…」

「ああ、んじゃ行くぜ!」

蓮が引き金を引いた瞬間、無数のカマイタチをまとった竜巻がロボットを襲い、バラバラにした。

「ちょっとあんた！危ないじゃない！」

「お姉様…どつちもどつちですわよ…！」

蓮たちの目の前には、瓦礫の山と化したロボットの残骸が広がっている。

「どつやら、一息つく暇も無く第二陣の到着みたいだぜ」

先程と同じ方向からまたロボットの大群が見える。

しかもさっきよりも数倍多く、刃物をこちらに向けてやる気満々だ。

これではまるできりがない。

再び戦闘態勢をとったその時、

「きゃあああああー！」

佐天の悲鳴が聞こえた。

見ると、こっそり近づいたと思われる1台のロボットが佐天に襲いかかっている。

「『『佐天^{さん}!!!』』」

黒子はテレポート、蓮は縮地、御坂は電気で筋肉を刺激してそれぞれ佐天の所に行き、佐天を攻撃から守る。

しかし、

「御坂さん!!!」

「お姉様!!!!」

「しまった!!!」

佐天をかばうあまり、御坂は自分の防御が疎かになってしまった。

気づいた時にはもう防御が間に合わない近さだった。

「御坂！」

蓮はとっさに御坂を突き飛ばした。

このままでは蓮に刃物が刺さってしまう。

「くっ！！！」

蓮はダメージを覚悟した。

ドオオオオン！！

突然の爆発とともに、蓮は吹っ飛ばされた。

「痛たたた…何なんだ一体？」

「何？あの車…」

御坂が指さす方向から、1台の車が近づいてくる。

キキイイイ！とブレーキをかけ、その車は蓮たちの前で止まった。

「やあ、蓮君」

「幹也！？」

運転席から顔を出したのは幹也だったのだ。

「なんとか間に合ったみたいだね」

「ちょっと待て。お前がいると言っことは…」

「オレもいるぜ」

「って、私もいるわよー！」

式と鮮花も車から出てきた。

「お前ら、何でここに？」

「お前の知り合いに頼まれたんだよ」

「知り合いって…まさか店長が！？」

「ああ、コクトーをだしに使いやがった…」

式は少し不満そうな顔をしている。

「そんなことより、行くところがあるんだろ？だったら早く行っていい」

「ここは私たちでおさえとくわー！」

「サンキュー！とその前に…式、ちょっといいか？」

「ん？何だ？」

「まったく…目が痛いぜ…」

「これでよし。悪いな、式」

「終わったんならさっさと行け」

「ああ…行くぞ、みんな！」

蓮は佐天、白井、御坂をフライングボードに乗せると、また急いで滑空し、初春のもとに向かった。

「ふう…おい、準備はいいか？」

「言われなくても！」

向かってくるロボットたちに、式は直死の魔眼をナイフでなぞり、鮮花は火の魔術でロボットを爆発させる。

ロボットたちが2人を取り囲む。

2人は背中合わせのまま、それぞれ構えている。

「いくぞ！」

式の声が合図となり、2人はそのままロボットに突っ込んでいった。「あの2人、本当に大丈夫なんですの？」

白井が心配そうに蓮に詰め寄る。

自分たち能力者が手を焼いた相手を、何の能力開発も受けていない外部の人間に任せて大丈夫なのだろうか？

白井だけでなく、2人の実力を知らない者ならば当然の質問だろう。

「大丈夫大丈夫。あいつらはそんなに弱くないから。それよりも…」
蓮たちの前に、大きな建物が見えてきた。

「俺たちがやらなきゃいけない事は別の方だろ？」

「…そうですね…って前！」

「げ!?!」

目の前に突然壁が現れた。

「黒子!」

「分かってますわ!お姉様!」

壁にぶつかる直前、蓮たちはその場から消えた。

「あゝ危なかった…。みんな、大丈夫か？」

「なんとかね…」

「こつちもですわ」

「私事です…」

取りあえずみんなの無事を確認した蓮は、目の前にいる人物、小野を睨みつけた。

「あんたか…」

「ああ、にしてもまさかあれをよけるとはなっ！」

小野が足で地面を踏みつけた瞬間、白井がみんなを連れてテレポトをして、少し離れた場所に現れた。

一瞬遅れてその場からアスファルトの棘が出てきた。

「なんや勘の鋭い嬢ちゃんやな」

「水月さん、お姉様と佐天さんを連れて先に行って下さいな」
白井は小野を見据えている。

「黒子、大丈夫なの？」

白井の提案に御坂が不安そうに聞いてくる。

「見たところあの能力に対して一番有利に闘えるのは、失礼ですが恐らく私だと思いますの。それに、」

白井は御坂を一瞬見て、

「お姉様と水月さんには、初春を助けていただかないと」

不敵な笑みを浮かべた。

「…分かったわ。黒子、気をつけなさいよ！」

「もちろんですわ。さ、早く行って下さいまし」

その時、ニコニコしていた小野の表情が真剣になる。

「もしかして、わいがむざむざあんさんらを行かせると思ってるんか？」

小野がまた地面を踏みつけようとする。

「そのとおりですわ」

しかしその前に白井は蓮たちを目の前の建物の中にテレポートさせ、自分も離れた場所にテレポートした。

すると先程と同様、その場にアスファルトの棘が現れた。

「同じ技ばかりでは、私もいい加減飽きてしまいますわよ」

「それは大丈夫や、嬢ちゃんを飽きさせることなんて無いさかいな！」

小野がいきなり白井に向かい走り出した。

第三十三奏（後書き）

今年はこれで投稿は最後です。

皆さん、よいお年を。

第三十四奏（前書き）

明けましておめでとうございます。

今年も『軽音部活動日誌！』をよろしくお願いします。

三（一）三

第三十四奏

ここは『大脳工学研究所』とはまた違う場所。

周りは自然に囲まれ、学園都市の都心部から少し離れた場所に『脳波研究所』はある。

蓮たちは今、その中の長い通路をフライングボードで移動している。

「ったく…まだ終わらないのかよ、この廊下は」

「いくら何でも長過ぎよ…」

さつきから20分程移動しているのだが、一向に出口が見えてこないのだ。

「ちょっとこれって怪しくはないですか？」

佐天の指摘を受け、蓮が考え込む。

「御坂、俺に1つ考えがあるんだけど…」

「奇遇ね。あたしもよ」

御坂が、待つてましたとばかりの顔をする。

「それじゃあやるか！」

蓮が先程の銃を取り出す。

「佐天さんは離れてて」

御坂が手のひらに電気をためる。

「「セーのっ！！」」

蓮は銃から火柱を、御坂は手から電撃を放ち、壁を破壊し穴をあけた。

佐天は目の前で起きたあまりに驚きの出来事に、ぽかんとした表情になっていた。

「というかさ、あんたパイロキネシストでもないのにどうして火を

出せるのよ!？」

御坂は蓮の両肩をつかみ、グラグラと揺らしている。

「ちよつ、御坂、落ち着け!！」

蓮は頭を揺らされ、かなり気分が悪そうである。

「酸素濃度と温度を上げると、後は火種だけでああなるってわけだ
…」

「あの…何を火種にしたんですか？」

佐天が、気分を悪そうにしている蓮の背中をさすりながら聞いた。

「ああ、それはこれだ…うえっぷ…」

蓮は、一本のライターを取り出した。

「ええつと…本当に大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫だ」

蓮が自分の背中にある佐天の手をやりわりと離す。

とつか、蓮の炎の出し方はまるでどこかの大佐みたいである。

「おや、随分と早かったな」

穴をあけた壁の向こうから、篠山が歩いてくる。

「ああ、それより、初春を返してもらっせ」

蓮は篠山を睨みつける。

「残念ながら、それは出来ない…」

「2人共、下がってる！こいつ、かなり出来る」

篠山の奥には、先に到着したと思われるアンチスキルが全滅していた。

「さあ…始めようか」

篠山はナイフを構え、蓮に向かってきた。

ナイフなら明らかに蓮の方が有利だ。

この場にいる者なら、誰でもそう思うだろう。

実際、御坂や佐天もそう思っていた。

しかし、

「ぐあっ！」

蓮がふつとばされ、壁に叩きつけられた。

「水月さん、前！」

「これで終わりだ」

篠山が一気に間合いを詰めた。

「くっ！」

蓮は前方に、空気を固めた壁を作る。

しかし、

「甘いぞ！」

篠山はその壁を貫通し、蓮の心臓を狙いナイフを刺した。

壁には、蓮の血が飛び散っていた。「はあ…はあ…」

「ふう…どうや嬢ちゃん？もしかしてそろそろ飽きて来たんか？」

白井は小野の質問には答えず、肩で息をして、片膝を地面につけている。

対する小野は、少し息を乱しているだけで、その差は歴然としている。

「ふん…まだまだ…ですわ！」

白井は鉄製のダーツを投げる。

しかし、鉄の壁にふさがれる。

(くっ…またですの…?)

実際、これが初めてというわけではない。

「何回やっても無駄やで。嬢ちゃんではわいの回路接続「コネクション」にはかなわんのだ」

回路接続「コネクション」とは、自身もしくは他人と他の何かをつなぐことにより、その物質を意のままに操ることが出来る能力である。

「ということは、あのロボットを操っているのは…」

「この前まではわいやけど、今日は違うで。今ロボットを操っているのは…」

小野の発言は、白井を動揺を誘うには充分だった。

「あゝ危ねえ……」

蓮の左肩から少し出血している。

蓮は心臓にナイフが刺さる直前に、とっさに自分のナイフで軌道をずらし、即死を避けたのだ。

「さあて、続きをやるか！……ってあれは……？」

蓮が篠山よりももっと遠くを見ている。

それに気づいた御坂と佐天もならって同じ所を見る。

「やっと気がついたか？」

そこには、何かの機械の心臓部みたいなものがあった。

そこからは何本もの半透明の管が伸びている。

「初…春…?」

その管は初春の頭に繋がっており、初春は半目開きで意識がないような状態だった。

「初春を…あのロボットたちのマザーコンピューターに利用したですって…?」

「ああ、その通りや」

(やはり、水月さんの知り合い方の言う通りでしたわ…)

~~~~~

「ん？電話だ」

式たちに助けられ、フライングボードで移動している最中、蓮の携帯が震えた。

「もしもし」

『蓮さんですか？』

「小春か？どうしたんだ？」

『1つ聞きたいんですけど…』

「ああ、ああ、そうか…分かった。わざわざすまなかつたな…」

蓮は電話を切るが、その顔はどこか浮かないものだった。

「何か分かりましたの？」

「ああ、いい知らせと悪い知らせがある」

「じゃあ、いい知らせから教えて下さい」

佐天が緊張した雰囲気になっている。

「あのロボットは強いといっても、所詮は遠隔操作。つまり親玉、コンピューターでいうならマザーコンピューターを潰せばあのロボットは止まる」

「よし、じゃあさつさと止めちゃうわよ！」

「それで、悪い知らせというのは？」

意気込む御坂をよそに、白井が蓮に質問する。

「あれだけの数のロボットを複雑に動かすには、それに類するもの……つまり機械の人並み外れた高度な情報処理能力が必要なんだそう  
だ」

「それってまさか……」

何かを分かったのか、白井の顔が驚きに変わる。

「そう、恐ろしくあのロボットたちのマザーコンピューターは…初春だ！」

~~~~~

「あなたたち、初春をさらっただけでなく、利用したということですわね？」

「ま、そうなるわな」

それを聞いた瞬間、白井の目つきが変わった。

「そうですか…それだけ聞ければ充分ですわ」

白井はダーツを指の間に挟み、

「それならなおさら負けるわけにはいきませんわ!」

小野を再び睨みつけた。

「まだやる気やな…いいで、完璧に叩き潰したるさかい、覚悟しいや!」

小野はアスファルトで剣を何本も作り、白井に向けて飛ばした。

白井はテレポートでこれを避ける。

そして離れた所に現れ、小野に向かって突っ込んできた。

「ヤケになってもわいは倒せへんで!」

小野は迫ってくる白井の方に向けて棘状のアスファルトの山を作り、白井を串刺しにしようとする。

しかしそうなる前に白井はテレポートして、今度は小野のすぐ横に現れ、ダーツで突きを繰り出した。

この距離では、防御しても間に合わない。

「はあっ!」

そう判断した小野は、ジャンプしてそれを避けた。

そして空中で受け身を取り、地面に着地した。

「当たらんくて残念やったなあ…ってあの嬢ちゃんは?」

小野の視界には白井が映っていない。

「「ちらですわよ!」

「な!?!後ろやと!?!」

白井が次にレポートで現れたのは、小野のすぐ後ろだったのだ。

完全に不意をつかれて一瞬反応が遅れた小野は、白井の手刀を避けることが出来なかった。

「なんや…やれば出来るや…ない…か…」

小野はそのまま気絶してしまった。

白井は小野の両手首に手錠をかける。

「水月さん、あなたがお姉様にやろうとした奇襲攻撃、悪くありませんでしたわ」

白井の咳きは、青空に吸い込まれていった。

「みんな、無事でいて下さいな…」

白井は蓮たちがいる建物を見上げた。

「ったく……」

蓮は左肩を抑えている。

「この太刀筋、強さ……もしかして……」

「ああ、彼女の力だ」

篠山は不敵に微笑み、蓮は合点がいったような顔をしている。

「やっぱりそうか……お前、式の力をコピーしたな？」

「ほう……よく分かったな。それで、君はどうするつもりだ？」

篠山が挑発的な口調のまま、ゆっくりと蓮のもとに歩いていく。

「何にしろ、お前を止める！」

蓮はナイフを構え、篠原に突っ込んでいった。

第三十五奏（前書き）

冬休みには終わりそうにありません…

O r z

第三十五卷

「それでさっきから気になってたんだが、その板は何なんだ？それが追われている原因なのか？」

少年が少女が背中に背負っている板を指さした。

「…これは飛行鉄板^{フライングボード}。あなたの言う通り、これを持っているせいで私は追われています。それともう一つ…」

少女は懐からリボルバー式の黒い銃を取り出した。

「これは能力拳銃^{スキルガン}といって、使用者の能力に対応した攻撃を繰り出します。どちらも悪用したらとても危険な武器です。」

「何でそんな物騒なものを持つてるんだ？」

俯いていた少女が、顔を上げる。

「私、これを無理やり開発させられていて、そこから逃げてきました。」

少女は一呼吸すると、何かを決心した顔になった。

「あの…これらを預かっていただけませんか？」

この発言に、少年は多少驚いているようだ。

「おいおい、俺が悪人だって可能性もあるんだぜ？それでもいいのか？」

すると少女は少年の顔を見て、

「あなたは、悪い人には見えませんし、本当に悪い人ならそんな事言いませんよ」

顔全体に屈託のない笑顔を浮かべた。

「……分かった。俺で良ければ預かせてもらっぜ」

「本当ですか？ありがとうございます！それでは、私はこれで……」

少女は明るい表情になり、深く頭を下げた。そして、その場から立ち去ろうとした。

「ちょっと待て、お前もだぞ」

少女は意味が分からず、首を傾げている。

「いや、お前も俺が預かるってことだ。まあ正確に言えば、俺の知り合いだけだな」

「え…？いいんですか？」

少女は目を丸くして、目元にはうつすら涙がたまっているのが見える。

「ああ、どうせ行き場所も無いんだろ？だったら一緒に来いよ。武器だけ渡されて、はいさよならじゃあこっちも困るしな。大丈夫だ！お前は、俺が守るから」

少年はあくまで善意で言ったので、それが女泣かせのセリフだとは全く気がつかなかった。

「あ…ありがとうございます…！じゃいます……」

「ちよっ…よしよし…」

少女は感極まって、少年の胸に飛び込んで泣いてしまった。

とは言っても少年の格好はサンタクロース、しかも場所はファミレスなので、周りから見れば奇妙な状況なのだが…

「よし、じゃあ行くか」

「はい！」

こうして少年と少女は行動を共にすることになった。「いや、やっぱりムギちゃんのお菓子はおいしいね」

ここは桜ヶ丘高校の軽音部室。

蓮以外の軽音部のみんながいつも通りお茶を楽しんでいる。

「みんな、今日こそは練習するからな！」

漣はみんなを説得するが、

「そう言っとなって〜漣〜」

「そっだよ〜。のんびりいこっよ〜」

もはやのれんに腕押しである。

「ムギからもなんか言ってよ〜」

漣は唯一の味方であるムギに助けを求めるが、

「まあまあまあまあまあ」

「6回!?!」

あえなく裏切られてしまった。

ピシッ！

「あれ？何か割れる音がなかった？」

「確かに…ちょっと見てくるわ」

唯の言う通り、何か割れる音が部屋に響いたので、ムギはティーセットを置いてある棚を見てみることにした。のだが…

「みんな！ちよつと来て！」

「どうしたの？ムギちゃん」

「こねって…」

ムギの手には、ひびが入ったティーカップがあった。

「なあムギ、もしかしてこれ、蓮のじゃないのか？」

「その通りよ、漣ちゃん」

そう、蓮のティーカップだけにひびが入っていた。

しかもそれは別に古いという訳ではなく、むしろ新しいほうである。

「蓮さん……」

「嫌な予感がする……よし、蓮のバイト先に行ってみよう！何か分かるかもしれない」

「漣ちゃん、蓮君のバイト先の店の場所が分かるの？」

唯の手痛い指摘に、漣は黙りこんでしまった。

「分かんないんだな……？」

律が呆れている。

「私、知ってるわ!」

「ムギちゃん、いつの間に?」

「色々あってね…」

おそらく紅茶の配達を頼むときに調べたのだろう。

「よし、みんな行こう!」

「」「うん!」「」

溲たち4人は蓮のバイト先である『ル・ジエ』に向かった。

「はあ…はあ…はあ…」

「水月さん…」

「そんな…」

蓮は現在左肩の他にも左目の上部を負傷しており、そこからの流血のせいで左目が塞がってしまっている。

「こうなってもまだやる気かい？」

「うるせえ…お前にだけは負けるわけにはいかないんだ！みやまくにはる佐山邦治
！」

「ほう…私の本名を知っているとは…バンクにでもアクセスしたのか？」

そう、バンクで脳波を調べた時、出てきた名前は『篠山邦治』ではなく、『佐山邦治』だったのだ。

「小春を無理やり利用したのはお前だな？」

「小春？ああ、あの逃げ出した子が…そうだ、私だ。私があいつを利用したんだ！」

「いったい…何のこと？」

会話についていってない佐天と御坂が首を傾げている。

「小春、小春：もしかして、あの時の人じゃない？」

御坂が思い出した顔をする。

「あの時って、ロボットのデータを解析してくれた時の人ですか？」

佐天も思い出したようだ。

「そうか、やはり君が保護していたのかい、蓮君？」

佐山が不気味な笑みを浮かべている。

「あの子を返してくれないか？あの子がいないと計画の実行が不可能なんだが…」

「…まさかお前、小春を捕まえるためにあのロボットで女子学生を襲ったのか？」

「ああ、よく分かったな…その通りだ。あの子は黒髪だったからな…それに、あの子は能力開発を受けていない。だから…」

「だから、レベル3以上しかない常盤台の学生は襲わなかったってわけか」

「全く、鋭い奴だ…」

ここまで自分の考えが明らかにされても、佐山は依然余裕のある態度を見せている。

「ついでにお前の能力だが、自身に他者の戦闘能力を付加させる…どこか違うか？」

「いや、その通りだ。これは形態変化トランスフォーマーっていうんだが、使用するには面識のある人物の記憶を媒体としなければならぬんだ…」

そう、佐山は蓮の記憶を媒体にして、式の戦闘能力を身につけたのだ。

実際、蓮は式と何回か模擬戦をやったことがあるのだが、蓮の全戦全敗なのである。

「今の君では彼女に勝つことは絶対に出来ないのだ！」

佐山はナイフを構え、止めをさしに蓮に突っ込んでいった。

「水月さん、逃げて下さい！」

佐天が大声で叫ぶも、蓮は動こうとしない。
それどころか、ナイフと左手を前に出し、空気の壁を作って防ごう
としている。

「それは私には効かないことを忘れたか？」

佐山の言う通り、先程空気の壁を作ってナイフを防ごうとしたのだ
が、あっさり破られてしまったのだ。

このままではさっきの二の舞である。

するど、

「鏡花水月・反射鏡！」
リフレクター

蓮がそう唱えた時、

「何!？」

「ナイフが通っていない!? 一体何で…?」

先程は破られたのだが、今回は見事にナイフを防いでいた。

「さあ、ここからが本番だ！」

第三十六奏(前書き)

厨二病 厨二病
＼ () /

第三十六卷

「ねえ…蓮、その子どうしたの？」

「見ての通り、拾ってきました、店長」

「いや、拾ってきたって…猫じゃないのよ…」

店長と呼ばれた女性は、ため息を一つつく。

「まさか、その子を私が育てるとか言うんじゃないでしょうね？」

「とどうか、この子を住み込みで雇ってくれませんか？」

すると店長は妖しい目つきをした。

「じゃあ、試験でもやる？そこのあんた、名前は？」

「さ…佐山小春です…」

店長は少女の全身をまるで品定めするみたいにじつくりと見ている。

「小春ね…あんた、何が出来るの？」

「パソコン関係を…少々…」

「パソコンね…だったら…」

店長は一冊のファイルを取り出した。

「これ、今週の出納帳なんだけど、パソコンに移して整理して頂戴。制限時間はパソコンを立ち上げてから15分以内ね」

「分かりました！」

「あら、いい返事じゃない。それじゃ、パソコンも立ち上がったみたいだし…」

店長はいつの間にかストップウォッチを持っていた。

「それじゃ、スタート」

ストップウォッチのスイッチを押した瞬間、少女は恐るべき速さでパソコンを操作した。

少年はもちろん、店長さえも呆然としている。

「蓮、あんたとんでもない子を拾ってきちゃったみたいね…」

「同感です…」

そして

「あの…全部終わりました」

少女がそう告げたのは、試験開始から5分も経っていなかった。

「よし、即採用よ!」

「あ…ありがとうございます」

親指を立てている店長に対して、少女はどこか実感がわいていないような顔だった。「何故だ？何故ナイフが通らない!？」

佐山はナイフを突き立てるが、一向に空気の壁が破られる様子はない。

「はぁ…ここまでやった以上、さっさと決着をつけさせてもらっぜ」

すると蓮はその場から一瞬で消えた。

「後ろか！」

佐山が後ろを向くと、蓮がナイフを振りかぶっている。

「そんな事、私がさせるとでも？」

佐山は蓮よりも早くナイフを振り抜き、蓮を真っ二つに斬った。

「水月さん！」

佐天が叫ぶと同時に、蓮の体は真っ二つのまま消えた。

「『鏡花水月・水泡の幻』！」
ウタカタ

声が出た方を見た皆の目には、空中に浮いている何人もの蓮が映っていた。

「ちょっと…何これ？」

「一体どういう事ですか？」

御坂と佐天が驚きの表情を見せるが、

「これはまさか…蜃気楼か？」

「ああ、その通り」

佐山だけは蓮の技を見破っていた。

「蜃気楼って、もしかして夏にたまに見かけるアレ？」

「ああ、そもそも蜃気楼っていうのは、空気の密度や温度の差によって光が乱反射して無いものがあるように見えたり物が空中に浮いて見えたりする現象なんだが…」

その場に見えるたくさんの蓮が、次々にナイフを構え始める。

「俺にかかればそれを起こすことぐらい造作もないって事さ!」

そこから佐山に向かって一斉に突っ込んでいった。

「そんな目くらまし、私には無駄だ」

佐山が大きくナイフを振り抜き、蓮の幻を斬る。

「残念外れ。『鏡花水月・百花繚乱』!」

フルブルーム

佐山の右側に現れた蓮は目にもとまらぬ斬撃の嵐を繰り出し、佐山はナイフで防ぐのが精一杯だった。

「くっ…どづいつことだ!?!」

焦る佐山をよそに、蓮は何故か嫌そうな顔をしている。

「はあ…これは厨二病くさいから使つのは嫌だったんだが、そもそも言ってられないからな!」

蓮はナイフでガードごと佐山を吹っ飛ばした。

「何で？さっきまでとは動きが全然違う…」

御坂が心底驚いた様子を見せる。

「確かに、動きはさっきまでとは別人だな。それでも、彼女程では…」

「そうそう…式との模擬戦が全戦全敗っていう成績は、これを使わない場合なんだ」

その言葉に佐山は鋭い目つきになった。

「そうか…だが、君が強い力を持ち、学園都市のために私を斬ろうと、私はここで負けるわけにはいかないんだ！」

「誰が学園都市のためにあんたを斬るなんて言った？」

佐山の叫びを蓮は一蹴した。

「俺があんたを斬る理由はただ1つ…」

蓮はナイフを逆手から順手に持ち替え、

「俺の仲間到手え出したからだ！『鏡花水月…』」

蓮は縮地を使い、

「『無明の月』^{イクリプス}！」

そのまま佐山を空中に切り上げた。「水月さん…終わっただんですか？」

「ああ、なんとか…うっ…」

疲労のためか、蓮は地面に両手両膝をついた。

「ちょっとアンタ、大丈夫？」

「ああ、少し休めば大丈夫だ…」

実際、端から見て蓮はとても大丈夫そうには見えない。何せ左肩と左目の上部からの出血により左目は使い物にならず、他

にも擦り傷や打撲がいくつかあるのだ。

「あの…水月さん、さっきのあれは一体何だったんですか？」

佐天が先程からの疑問を蓮にぶつけた。

「…ゴルフとかでショットを打つ前に選手が素振りをしたり、プロ野球選手がバッターボックスに入る前に行う一連の動作があるだろ？アレをやると、やらない時よりも何倍も動きにキレが出るみたいなんだ」

正確には、そのような一連の動作を行うことにより、それが成功するイメージを固めることが必要である。

これは個人によって異なり、その動作の質が上がれば上がる程、動作のキレも跳ね上がるのだそうだ。

「俺の場合は繰り出す技名を唱えながら技を繰り出すと、その技の威力が最も上がるんだ。ったく…隙はデカいわ、技はバレるわ、厨二病みたいに思われるわ…本当に嫌になっちまうぜ…。なあ、御坂？」

「そこであたしに同意を求めないでよ…」

御坂は突然同意を求められ、半ばあきれた顔で反論する。

「ところで、アイツは大丈夫なの？さっき思いつきりやったみたいだけと…」

御坂は向こうで倒れている佐山を指差している。

「あのなあ…ちゃんと峰打ちしたから大丈夫だって。それに…」

「「それに？」」

「あつちもちゃんと防御したみたいだぜ」

蓮は佐山を一瞥した。

佐山は意識を失っており、その手に握られたナイフは蓮が斬撃を入れた場所にあり、その刀身は真っ二つに割れていた。

「ていうかあの人、アレをガードしたんですか？」

「ま、コピーした元の奴がかなり強いからな」

「それってさっきナイフ持って着物着てた人のこと？」

御坂が自分の記憶を思い出しながら聞いた。

「ああ、式っていうんだ。それよりも…」

蓮は佐山に近づいて、

「この人を早く拘束しないと…ってあれ？なんだこれ？」

蓮が見つけたのは、開閉式の金色のペンダントだった。

「これって…」

「まさか、この人の…」

「ああ、間違いないだろう…」

中には、1人の女性の写真がはまっていた。

茶髪がかったセミロングで、写真の中で微笑んでいる。

「見られて…しまったか…」

佐山がゆっくりと起き上がった。

「随分早く起きたんだな。後30分程は寝ていると思ったのに」

「とっさにガードしなかったら、恐らくそうになっていただろうな…」

佐山は左手で自分の右の脇腹を押さえている。

おそらくダメージがまだ残っているのだろう。息がまだ少し荒い。

「で、結局誰なんだ？この人…」

「ちょっと！？いきなりはマズいんじゃない？」

蓮の直球の質問に、御坂が待ったをかける。

「ここまで皆に迷惑かけたんだ。聞く権利くらい…」私の…部下だ…」

突然佐山が口を開いた。

「私と彼女はかつて、ある研究所で働いていた…しかし、ある事故がきっかけで全てが崩壊してしまった！」

「ある事故…？何があったの？」

「…脳波を使用して脳の制限解除し、それによって能力の向上を行う実験を彼女が受けることになったんだ！」

「何だって…？そんな事が…」

蓮たちはあまりの驚きに言葉を出せずにいた。

「当然実験は失敗し、それ以来彼女はずっと眠ったままなんだ！」

「だからって、こんな方法を取らなくても…」「君なんか何が分かる！」「」

蓮の意見を佐山は遮った。

「君に、大切な人を奪われる悲しみが分かるのか！？」

蓮は押し黙ってそれを聞いていた。

「君がどんな存在だろうと、何を敵に回そうと、私は立ち止まるわけにはいかないんだ！」

その時、

ガッ！

何か不気味な音がした。

「ちょっと、何よこの音？」

「初春の方からだ！」

ズズツ…ズズズズツ…

今度は何かが這い出てくるような音がした。

「おいおい…」

「何…あれ…？」

初春の頭から、黒い何かが現れた。

それはまるでスライムのように空中を漂っている。

いきなりそれに横筋が2本入り、

ギョロツとした目が現れた。

そして今度は口を開き、

第三十七奏（前書き）

このシリーズが終わったら、再び閑話コーナーを予定しています。そこでの質問や、その他のご意見ご感想をお待ちしています。

第三十七巻

「トロトロトロ」

ここは喫茶店『ル・ジエ』

小春は猫じゃらしで白い子猫のユキと遊んでいる。

そこに、

カランカラン

「すみません！店長さんはいますか？」

息せき切らした4人の軽音部員がいた。

「あれ？皆さんどうしたんですか？」

小春は1人ポカンとしていた。

カランカラン

「店長さんはいらっしやいますか？って皆も？」

今度は和が入ってきた。

「和ちゃん！？どうしたの？もしかして蓮君がらみ？」

「その様子だと、唯たちもそうみたいね…」

和は否定しなかった。

「あらあら、みんな揃ってどうしたの？蓮ならいないわよ」

店の奥から店長が出てきた。

「あ、店長さん、もしかして蓮が何か危ないことに巻き込まれたりしてませんか！？」

「別にそんな連絡は無いわ」

「そうですか…」

和たちは安心した様子を見せる。

「ま、わざわざ来てくれたんだし、お茶でも飲んでいく？」

「いえ、さすがにそこまでは…」

「部活もまだあるんで…」

和と澪が断ろうとするが、

「あら、あそこの2人はもう準備万端って感じよ」

「澪も早く来いよ」

「せっかくだしお茶もらおうよ」

店長が指差した先には、すでに律と唯がテーブルに座っていた。

「皆さま、お茶が入りましたよ」

人数分の紅茶をトレーに乗せた小春がやってきたので、和と澪もお茶をいただくことにした。「ぐっ…ぐああああ…」

「急にどうしましたの？」

いきなり小野が苦しみだした。

「あんさん、早くあの建物の中にいる、頭に花を乗つけた嬢ちゃん
の所に行った方がええで……」

「どづいことですか？」

ちなみに小野の身柄はアンチスキルに渡されている。

「おそらく中には化け物があるはずや」

「化け物ですって？一体何の？」

「ああ、それはやな……」

「暴走……思念体？」

「そうだ……おそらくあれはあの子の高い情報処理能力により培養さ
れ、ついには本人の意識をも乗っ取り自立してしまったのだらう」

佐山は暴走思念体を見ながら言う。

「じゃあ、アイツを倒さないと初春さんは……」

「おそらく目覚めないだろう……」

「じゃあ、倒すしかないでしょ！」

御坂が暴走思念体に電撃を放った。

「やったか？…ってまじかよ!？」

そいつは電撃を浴びて一部が消し飛んだが、すぐに再生して元通りになってしまった。

「あれは思念の塊だ。一般常識が通じる相手じゃない!」

「おいおい、そんなのありかよ……」

佐山の言葉に蓮はため息をついた。

いきなり暴走思念体が蓮に向かって無数のエネルギー弾を撃ってきた。

「おっとつと…」

蓮はなんとかそれを避ける。

すると横から黒い手が伸びてきて、蓮を吹っ飛ばした。

「水月さん！」

「痛つつ…何とか大丈夫だ」

「シカトなんかしないでよね！」

御坂が再び電撃を喰らわせると、その部分から何本もの手が生えてきた。

それらは佐山めがけて伸びていく。

「危ない！」

蓮は佐山を突き飛ばし、代わりに手に捕まり、そのまま暴走思念体の中に飲み込まれていった。

「水月さああああん!!!」

部屋の中には佐天の叫び声が響き渡った。

「づっ………」
「じっは……どっだ？」

目覚めた蓮が今いる場所の周りは真っ暗で、上も下も右も左も分からない。

「そうだ俺、アイツに飲み込まれてたんだ。それで……」

ふと、周りに無数の目が出現した。

しかも蓮を360度取り囲んでいる。

「おいおい……一体何の冗談なんだこりゃ？」

蓮が警戒していると、1つの目から一本の手が出てきて、蓮の額に触れた。

すると、蓮の頭の中に何かの情報が入ってきた。

「ぐっ……何だこれ……」

『能力なんて関係ありません！佐天さんは佐天さんです！』

蓮の頭の中に声が響き渡る。

「この声は…初春か？」

『私の親友なんです！だから…そんな悲しいこと…言わないで…』

「これは…佐天がこの前言ってた、レベルアップ事件って時の初春の記憶か」

蓮は事前に佐天から聞いたこともあつてか、その記憶を理解した。

『大丈夫ですよ！佐山さんが行う実験ですもの。失敗なんてありませんよ！』

蓮の中にまた別の記憶が流れ込んできた。

「今度は…初春じゃない。誰だ？」

『私は佐山さんを信じます！だから、佐山さんも私を信じて下さい…』

「佐山…さん？まさかこの人…」

そこから色々な情景が蓮の頭に入ってきた。

佐山と女性と一緒に論文をまとめている場面、2人で談笑している場面、そして…

死んだように眠っている彼女の横で、佐山が目を見開き呆然として

いる場面。

「これが…アイツが言っていた実験か？」

突然蓮の額に触れていた手が離れ、どこかに消えてしまった。

「ん？なんだアレ？」

蓮の視界の先には、赤く光る何かがあった。

それを確かめるために近づこうとした瞬間、突然蓮の視界に光が戻った。

「つてか空中かよ!？」

蓮は受け身をとって着地した。

「そうか、俺はヤツに吐き出されたのか…」

「アンタ、本当に大丈夫なの？」

「水月さん！大丈夫ですか？」

御坂と佐天が心配して蓮の元に駆け寄る。

「なんとかな…それより…」

蓮は佐山を一瞥した。

(アンタが言った事は本当だったみたいだ。さて、アレをやるしかないか…)

蓮は何かを決心して、暴走思念体を見据えながら御坂に話しかけた。

「御坂、俺がアイツをバラバラにするから、その後コアを頼むぜ」

「ちょっと！すぐに再生するアイツをどうやってバラバラにするのよ！？」

すると蓮は右目を閉じ、再び開いた。

「アンタ…その目…何…？」

蓮の右目は普段の黒色から青色に変わっていた。

「さあ、これでチェックメイトだ！」

第三十八奏（前書き）

スイマセン、随分投稿が遅れてしまいました。 m (|) m

暴走思念体との死闘、遂に決着です！

第三十八奏

「さてと…初春を助けに行くか」

蓮は未だ謎の装置に繋がったままの初春の元に、ナイフを構えて向かった。

「お待ち下さいな！水月さん」

「白井！？それに小野さんまで…どうしたんだ？」

蓮は予想外の人物がいることに驚いている。

「あんさん、その嬢ちゃんをその装置から切り離したらいかんで！」

「一体どういうことだ？」

「アイツは暴走思念体や。これがどういうことか分かるか？」

「暴走思念体…思念体…思念！？まさか…」

「ああ、先にその嬢ちゃんを解放したら、精神と肉体が切り離されてどうなるか分からんで！まあ信じるかどうかは、あんさんの自由やけどな」

蓮はしばし黙った後、躊躇うように口を開いた。

「……分かった。今はお前を信じる。黒子、皆を頼むぜ」

「分かりましたわ。初春は装置ごと連れて行けそうですわね…お姉様はどうします？」

「やるに決まってるでしょ！何もせずに帰るなんて出来ないわよ！」

御坂は暴走思念体を睨みつけている。

「では、お気をつけ下さいまし」

「水月さん、無事に帰ってきて下さいね！」

そう言い白井、佐天、初春、小野がレポートでその場から消えた。

「さあ、やるか！」

蓮と御坂は暴走思念体を睨みつける。

ギイアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

暴走思念体が叫び声をあげると、直径約30メートルの円周上に炎の壁が生まれ、蓮たちを閉じ込めた。

「何？アイツってパイロキネシストだったの？」

「いや、落ち着け御坂…。しかし、何でもありだな、アイツは」

蓮の視界の先には、軽く20本を超える数の腕を生やしている暴走思念体があった。

「アンタ…あんな奴にナイフ一本でどうやって攻める気…って危ないわよ！」

御坂が言い終わる前に、数本の黒い腕が蓮に襲いかかる。

「誰がナイフ“一本”で攻めるなんて言った？」

しかしそれらのは一瞬にして蓮に斬られてしまった。

「え…2本！？しかも、腕が再生してない…？どういう事なの？」

「なに、簡単なことだ。再生という概念を殺した。この『直死の魔眼』でな」

「ちょっと、どういうこと？」

「話は後だ。行くぞ！」

蓮は右手に黒刃のナイフ、左手に白刃のナイフを持ち、黒い腕を斬

りながら突っ込んでいった。

「全くもう!」

それを御坂が電撃を使い、援護する。

「これでどうだ!」

蓮が2本のナイフを使い、暴走思念体の本体に見える死の線をなぞる。

すると、暴走思念体の体はバラバラになり、中に赤い宝石みたいなものが見えた。

「あれを……ぐあっ!」

残っていた黒い腕が蓮を吹き飛ばした。

しかし蓮は口角をつり上げ、不敵な笑みを浮かべている。

(風穴は開けたぜ……)

「ぶち抜け！御坂あつっ！」

蓮の視点の先には右手をつきだしている御坂と、宙を舞うコインがあつた。

「いつけえええっ！！！」

その瞬間、コインが御坂の親指に弾かれ、音速以上のスピードで飛んでいった。

そしてそのコインはコアに当たり、コアは粉々に砕け散った。

『レールガン超電磁砲』。彼女の必殺技である。

コアが崩れたと同時に、暴走思念体が蒸発していった。

『（ありがとじ……いじりました……）』

「え……？頭に……声が……」

蓮の頭の中に、誰か女性の声が響いた。

暴走思念体の形は無くなり、完全に消滅した。

「周りの火が…消えた……？」

暴走思念体の消滅と同時に、蓮と御坂を囲んでいた炎も消えた。

「とりあえず…一段落だな……」

「ちょっと！アンタ大丈夫なの！？」

蓮は御坂の肩に倒れ込んだ。

「大丈夫だ…あとは、脱出する………だけ………だ………な………」

蓮はそのまま気絶してしまった。

「全く、どこが大丈夫なのよ！」

御坂は床に落ちていたフライングボードに蓮を乗せてから自分も乗り、

「お願い！動いて！」

そのまま宙に浮かんだ。

「よし、これならいける！」

そしてそのまま発進した。

第三十八奏（後書き）

なんかあっけない展開な気がします。ご勘弁下さい…。

第三十九奏（前書き）

ほんっつっつにお待たせしました！

やっとこさ学園都市編が完結です！

第三十九奏

「……あれ？　ここは………病院の個室か？」

「水月さん、気が付いたんですか!？」

蓮が目を覚ますと、白い天井と佐天の顔が目に入った。

「お姉様に感謝して下さいな。気絶した貴方をあの建物の中から運び出して下さったんですから」

病室の傍らにいた白井が、蓮と御坂に目配せをする。

「そうか……。ありがとう、御坂」

「アンタには色々助けられたしね。これくらいどつってことないわ
「よ」

蓮の礼に対し、御坂は微笑みを返す。

「初春は大丈夫なのか？」

「はい。私はもう全然平気です」

「そうか……。とりあえずは一安心だな」

初春の無事を確認すると、蓮はほっと一息ついた。

「ところで水月さん、1ついいですか？」

初春が、さっきまでとは違い真剣な面持ちで口を開いた。

「どうしたんだ？」

「失礼だとは思いましたが、あなたのその右目の能力について書庫^{バンク}で調べさせていただきました」

蓮の顔に翳りがさす。

「そうか……。それで、どうだった？」

「……能力名は『^{スキルメモリー}能力保存』、そして該当能力者は『^{かすみまい}霞舞衣』さんのみでした」

「そしてその方は既に亡くなっておりますの……」

「もし良かったら、どんな人か話をしていただけませんか？」

「……………分かった。俺がお前らをこの事件に巻き込んだら良かったかな。それで良かったら話すぜ」

初春の問いに、蓮は落ち着いた表情で返した。

「舞衣は、俺の小学校の時の親友で、そしてー」

「そして?」

「ー俺の目の前にいながら守ることが出来なかった、たった一人の人物だ…………」

「そう……………ですか……………」

佐天の言葉の後には誰も続かず、沈黙の時間が流れる。

そして、

「ちよつといいかな?」

カエル顔の医者がその沈黙を破った。

「それでは私と初春は事後処理がありますので、これで帰らせていただきます」

「それでは失礼します」

白井と初春が病室を出て行く。

「それじゃあ佐天さん、私たちも」

「そうですね……水月さん、また明日……」

「ああ。また明日な」

御坂と佐天も病室を出て行き、部屋には医師と蓮の二人だけになった。

「ところで、明日退院できますか？」

「それは君の選択次第だね」

「……もしかして、右目のことですか？」

「……気づいてたのかい？」

「……」
「……」

医師は顔色を一切変えない。

「君の右目は元々は他人のなんだろう？今視力があるだけでも奇跡的なんだ」

蓮は何も言わず、医師の言葉に黙って耳を傾ける。

「それで、このままだと俺はどうなるんですか？」

「このままだと君の右目の視力と能力に影響を及ぼし、十年以内には確実にどつちも使えなくなるよ」

医師曰く、右目の視神経が蓮の脳と微弱な拒絶反応を起こしているらしい。

「これはあくまで右目の能力を使わなかったらの話だよ。使えばもつと期間は短くなる」

医師は蓮の前で指を三本立てる。

「君の選択肢は3つ。1つめは明日から手術を受けて義眼をつける。この場合、右目の能力は二度と使えない。けれども失明はしないし、君の能力もこれまで通り使える。僕が保証する。2つ目は手術を行わず、右目を失明したまま生活する。そして3つ目は――」

ちょうどその時、開いた窓から部屋に風が入り込んできた。

「――それで、君はどうしたいのか明日また聞きにくるから、その時に返事をくれないかな？」

医師が病室を去ろうとすると、蓮がそつと口を開いた。

「先生、俺は――」

翌日のお昼前。

「もう行ってしまっんですの？」

「ああ。しかし悪いな。駅まで俺の見送りに来てくれるなんて」

改札口の前には蓮と、彼を送りに来た御坂、白井、初春、佐天がいる。

ちなみに上条当麻は補習で来れないそうだ。

「これくらい、お安いご用ですよ。ねーって、佐天さん？」

「あの、水月さん」

佐天が何かを決意したように表情を固めた。

「ん？ どした？」

「これからは『蓮さん』と呼びますから、私のことを『涙子』って呼んでくれませんか？」

それは、少女にとって精一杯の告白。

「分かったぜ。涙子」

「あ……ありがとうございます！蓮さん！」

佐天は少し顔を赤らめながら、満面の笑顔を浮かべた。

「それじゃ、そろそろ時間だ。じゃあな」

「またこっちに来なさいよ！」

「ごきげんよう」

「絶対来て下さいね」

「約束ですよ、蓮さん」

「ああ、絶対来る。約束だ！」

そのまま蓮は一度も振り返ることなく、颯爽と去っていった。

「行っちゃったね……」

「強い人でしたね……」

「ええ。能力だけがあの方の強さではないのでしょうか」

「それより佐天さん、もしかして……」

「初春の思ってる通りだよ」

佐天の心の中に芽生えた、1つの感情。

「見たところ、かなり鈍感そうな殿方でしたわよ？」

「その方が頑張れますから」

「ホント、佐天さんは前向きね」

御坂が感心した表情を浮かべる。

「あ、そうだ！これからどこかの店にお昼を食べに行きませんか？」

「佐天さん！私はパフェを食べたいです！」

「私は……デパートの喫茶店にー」

「お姉様？もしかして、キャンペーン中のゲコ太ストラップがお望みですか？」

「な！？そ、そんなワケないでしょ！？」

「み、皆さん……速いです……」

「初春もほら、早く行かないと混んじゃうよ」

「初春さん、手を貸そうか？」

「お姉様！もう片方の手を是非私に……！」

「うつさい！黒子、アンタには貸さないわよ！」

「そんなぁ……お姉様〜」

その日は、雲一つない青空が広がっていた。

第三十九奏（後書き）

というわけで何とかこの学園都市編を完結させることができました。

これからは、また『けいおん!』のストーリーを進めていこうと思います。

新展開は……あるかなあ……？

多分そんなに大きいのは無いです。

小さいのも無いかも……。

第四十奏（前書き）

今回は閑話コーナーの第2回目です

第四十奏

風「長かった。本当に長かった……」

蓮「学園都市編の終結まで約半年かかったからな」

風「読者の皆様、本当にすいませんでした」

蓮「んじゃ、久々にこのコーナーを始めるか」

風「今回のゲストは、コイツだ！」

上条 当麻（以下：当）「えっと……とりあえず、帰っていいか？」

蓮「いいよ」

風「いや、ダメだから」

当「不幸だああああっ!!」

風「早速二つ目の質問いくぜ」

蓮「え！？ スルー!？」

店長の詳細プロフィールを教えてください。

風「うわあゝお」

蓮「いきなりヤバい質問が来たな」

風「今度こそ死にそう……」

当「大丈夫だろ。いざという時は冥土帰しに頼めばいいだけだから」

風「つたく……。とりあえずこんな感じ」

・身長……蓮より少し高い

・髪型……腰まで伸びる茶髪のウェーブ

・性格……東方の八雲紫みたいな感じ（？）

風「残念ながらこれが限界だ」

蓮「というか最後のつて、みんながよくあだ名で呼んでる人だろ？」

当「あだ名？」

蓮「確かババーー少女ゆかりんだっただははずだ」

風「何で最初のやつを言い直したんだ？」

蓮「言い切ろうとしたら、変な空間からたくさん目の目がこつちを覗いているのが見えてな……。殺される気がした」

風「ああ……。なるほど……………」

当「????」

蓮「それにしてもまあ、店長が相手なら仕方ないか。んじゃ次いくぜ」

蓮は他の作品のキャラクターで例えたとしたら誰ですか？

蓮「これは……結局どうなんだ？」

風「そうだなあ……………。言葉遣いが少し荒くて、小説を書く代わりにナイフを振り回す井上 葉かな？」

蓮「前半の2つは余計だ」

風「まあ気にしなさんな」

蓮「他人事だからって開き直りやがって」

当「んで、次は何だ？」

蓮はこれから溻とデートする気はあるんですか？

当「テメエ！ 何で自分だけフラグを立ててんだよ!？」

蓮「何言ってるんだよ！ お前こそ聞いた話だと約一万本のフラグを立てたそうじゃねーか！！」

風「お前らちよつと落ち着け」

蓮「だいたいお前はなー」

当「そつちだつてー」

風「そげぶ！！！！」

閑話休題。

蓮「んで、なんだっけ？」

当「さあ？」

風「コイツらはほつとくとして………漣と蓮のデートは多分ある！多分な。というわけで次」

他作品とのヒロインとフラグを立てて、この旗男はどうするつもりなんですか？

蓮「それは当麻に言ってくれ」

当「何でそうなるんだ!?!」

蓮「この野郎、次々と女性をたぶらかしやがって……」

インデックス（以下：イ）「そうだよ！　とうまはもっとはんせいするべきだよ!?!」

当「インデックス!?!　お前なんでここに!?!」

イ「とうま、やっぱりわかってないんだね?」

当「は？　それってどういうー」

イ「わかってないならじつくりおしえてあげるよ!?!」

当「だから俺の頭を噛むな！　畜生！　やっぱり不幸だあああつ!?!」

蓮「当麻がなんか大変なことになってるから、ここまでだな」

風「引き続き感想や質問をお待ちしております」

蓮「それでは皆さん。今回はこの辺で」

風・蓮「さようなら〜」

蓮「あ、そうそう」

風「どした？」

蓮「ポケンでさ、素早さと特攻と特防の個体値がMAXで、努力値は素早さと特防をMAXにしたルアってどうやったら倒せるんだ？」

風「……………また小春に負けたのか？」

蓮「いや、今度は憂に……………」

風「え!？」

蓮「そんなわけで、攻略法お待ちしてまーす」

風「おいおい……………」

第四十一奏（前書き）

ここからまた、キャラクターの一人称で話を進めていきます。

第四十一奏

壮絶な闘いがあったシルバーウィークもようやく終わり、3日後。

その内の2日間が平日だったので、現在は土曜日ということになる。

小鳥のさえずりが聞こえる爽やかな朝。時刻は10時くらいだ。

宿題をさっさと終わらせる人。

ここぞとばかりに家で休む人。

友達とどこかに出かける人。

色々な人がいるだろう。

そんな中、俺はというと、

「あゝ~~~~~っ!~!~!」

凄まじい筋肉痛に悩まされ、ベッドから起き上がれずにいた。

「うう……。腕が、足が、全身がああっ!!！」

もうこれ全身の筋とか切れまくってるんじゃないか？

「やっぱり学校での振る舞いがいけなかったのかな……」

シルバーウィーク明けの2日間、皆に心配をかけまいと普通に授業や部活に参加した。

「その結果がコレだよ……って痛あつ！」

叫んだら痛みが無くなるどころか逆に酷くなった。

もちろん家にはマッサージ機なんて高価な代物は無い。

「……もう今日は誰が来ても絶対に出ない」

ピンポン

「……え？ 何？ これイジメ？」

サボタージュ宣言は完了されなかったので、渋々出ることにする。

「あゝい、どちらさんで〜」

必死に体を引きずって玄関に行き、もたれかかるようにしてドアを開ける。するとそこには、

「えっと……………どうしたの？」

呆れた顔をした和が立っていた。

「あっ、ソコ。ソコをもう少し強くお願い」

「はいはい」

あの後俺は和に（かなり強引に）腹這いの姿勢でベッドに寝かされ、全身マッサージしてもらっている。

「というか和、お前マッサージ無茶苦茶上手いな。初めて知っただぜ」

「子供の頃、よく親にマッサージしてたのよ」

「……昔取った杵柄ってヤツか」

「……………」

「和！？何か急に強くー痛い！痛いぞ和！一体どうしたっていうんだ！？」

といつか、無言でやられるとかなり怖いんだけど。

「……………ねえ」

「は、はい？」

「……………連休中に、一体何があったの？」

マッサージの強さが元に戻ると同時に、そんなことを聞いてきた。

「えつと……」

やっぱり心配をかけないためにも、皆には本当のことを言うわけにはいかない。

なので俺は、軽音部の皆に言ったことと同じことを伝えた。

「山に籠もってトレーニングをしてたんだ」

「トレーニング？」

「ああ。最近お腹が弛んできた気がしてな。それと、もう二度と皆を危ない目に遭わせないためにな」

前半は嘘だが、後半は本当だ。

俺はあの誘拐事件が起きてから、以前よりもトレーニングメニューを増やした。

もう二度と、皆にあんな思いはして欲しくないから。

「……そう」

「ああ。そうだ……」

「分かったわ」

理由の後半以外は、おそらく納得はしていないだろう。

それでも、『分かった』と言ってくれた。

「ありがとな……和…………」

あまりにもマッサージが気持ちよかったのと、和の返事に安心した
のとで俺はそのまま深い眠りに落ちていった。

和 side

気が付くと、蓮は気持ちよさそうに眠ってしまっていた。

「それにしても、昔取った杵柄って……」

まるで私がおばあちゃんみたいじゃない。

デリカシーがないといつかなんといつか……。

「……………」

蓮の寝顔を見ながら、色々と考えてみる。

おそらく、いや確実に、蓮はどこかで危ない目に遭ってきた。

だけど私たちに心配をかけまいと、本当のことを話そうとはしないでしょっね。

無理にでも聞き出したいところだけど、漣が誘拐された日に店長に言われた言葉がその気持ちに歯止めをかけていた。

『いつかアイツが自分の口から語るのを待ってやって頂戴』という言葉が。

「いつになったら話してくれるのかしらね？ この見栄っ張りには
本当は蓮一人が危ない目に遭うなんてことにはなあって欲しくない。

他にいくらでも道はあるはず。

でも、この不器用さんは何の迷いもなくその道を選ぶんだろう。

「とりあえず、お疲れさま」

そんなことを呟きながら、私は蓮の頭を撫でた。

第四十二奏（前書き）

本編では冬なのに、実際はすごく暑い！

第四十二奏

「あ、流れ星。」

「…………お祈りしなきゃ」

「ねえ舞衣、何をお願いしたの？」

「…………寒くなってきたから肉まんを食べたい、肉まんを食べたい、肉まんを食べたい…………」

「いやいやいや。もうちょっと違うことをお願いしようよ」

「…………大丈夫。これからもたくさんお願いするから」

「大丈夫なのそれ…………？」

「…………蓮、そろそろ帰ろう」

「うん！」「…………ん！蓮！」

「ううん…………。律か？」

「律か、じゃないぜまったく。なにぐっすり寝てるんだよ」

俺は寝てたのか？

ということは、さっきのは夢だったのか。

随分と懐かしいな。

「それで蓮、ちゃんと話を聞いていたのか？」

「何をだ？」

「やっぱりそうか……」

漣がうなだれている。何の話をしてたんだ？

「クリスマスの日に、クリスマス会をやるんだよ。楽しみだねえ」

クリスマス会か。楽しそうだな。

「それで、場所は？」

「ムギちゃんの家が無理だから、ル・ジエでやるってことになってるの」

「そこなら小春ちゃんも一緒に参加できるしな」

「だからいいだろう蓮？」

「いや、その日は店長が不在で店が休みのはずだから、店でやるのは無理だ」

「クリスマスって客のかきいれ時じゃないのか!？」

「他の店なら、な」

「「……ああ……」」

律も澪も納得してくれたようだ。

「じゃあ、唯ちゃんのお家は？」

「別にいいよ」

「やったあ!」

「いやいや、それよりも、

「なあ唯、クリスマスに大勢で押しかけて大丈夫なのか？」

「迷惑になるかもしれないだろ?」

「大丈夫だよ。その日はお父さんもお母さんもいないから」

果たしていつ家にいるんだろう。

「そついえば前に行ったときもいなかったよな？」

「中学の時に何回か遊びに行ったけど一度も会ってないぞ」

「よく2人で旅行するんだ。クリスマスはドイツ行くんだって」

ド、ドイツかよ!？」

というか、どんだけラブラブな夫婦なんだ。

「唯ちゃん。何か用意するものある?」

「手ぶらはさすがに申し訳ないな」

すると、そんなムギと俺の疑問を払拭するように唯が胸をドンと叩いた。

「料理は任せて！」

憂が作ってくれるから」

本当にできた妹だ。

「あ、そうだ！」

「どうしたんだ、律」

「アレやろうよ。プレゼント交換！」

「やろーやろー」

「やろーやろー」

唯はもとより、ムギまでそんなに楽しみにしてるとは驚きだ。

「プレゼント交換なんて本当に久しぶりだな」

中学生の時にはプレゼントを配ったことはあったけど。

「漣、変なモノは持ってくるなよ〜?」

「それはお前だろ。小学校の時だって、びっくり箱を持ってくるし
……」

漣も大変そうだ。そして何より、

「「ベタだな〜(やな〜)」「」

「蓮はともかく、唯がツツ」むな」

「ベタ子さん」

誰だよそれは。

「楽しみだわ〜、クリスマス会」

「よし。もう1人にも声をかけるか」

「という斯く斯く然々なワケで、和もクリスマス会に参加しないか？」

俺たちは校門前にて和をクリスマス会に誘っている。

「どついつ説明なのよ。それに、私部外者だけどいいの？」

「全然いいよ。アタシたち、友達だし」

へえ。律にしてはなかなかの発言だー

「人数多い方が、使えるお金も増えるし」

「それをどうする気だ？」

前言撤回。やっぱりなんとかした方が良さそうだ。

「和ちゃん来れる？」

「うん」

「よし。これで決まりだな」

「わあ〜い」

唯は嬉しさのあまり飛び跳ねている。

「じゃあ、小春には俺から声をかけておくから」

「ああ。よろしく頼む」

小春なら、きっと予定も空いてるだろうしな。

今日はこのまま解散となった。

数日後

「蓮さん。クリスマス会、楽しみですね！」

「分かったから、少し落ち着こうな」

俺は小春と一緒にクリスマス会でのプレゼント交換に使うプレゼントを買いに、商店街まで来ている。

「しっかし小春。お前すごく悩んでたな」

「いや、色々と素敵なのがたくさんあったので」

他人にあげるプレゼントのはずだが？

「よし。そろそろ福引きに行くか」

「はい！」

どうやらこの時期にはくじ引きをやっているらしく、俺と小春は3回ずつ福引き券をもらっていたのだ。

「あ。蓮くん」

「唯たちもいたのか」

福引き会場に着くと、ムギ以外の皆が勢ぞろいしていた。

ティッシュを3箱ずつ持ちながら。

「皆さんも福引きですか？」

「その手の福引き券を見ると、小春ちゃんたちもそうみたいだな」

「ええ。これから挑戦します」

「ダメでした……」

小春の手にもティッシュが3箱乗っている。

「泣くな小春。福引きはそんなもんだ」

「蓮さん。こうなったら1等のハワイ旅行を引き当ててください」

「当たるといいんだけどな」

俺は福引き券を係員に渡し、取っ手を掴んでガラガラを回した。バキュームスティックバキュームスティックバキュームスティック

何でバキュームスティックを5等に入れたんだ!?

これならハズレのティッシュの方が断然いいじゃんか!

「蓮くん、くじ運悪いんだね」

「唯。頼むからそんな哀れみの視線を向けなくてくれ」

余計に悲しくなっちまうから。

皆でティッシュを抱えて（俺のバキュームスティックはティッシュと交換してもらった）雑談をしていると、隣の福引き会場から鐘の高い音が鳴った。

「おめでとつございます! 1等のハワイ旅行です!」

「あ……当たっちゃった」

「「「ムギ!?!」」」

「ムギちゃん強運だね」

少しでいいからその運を俺に分けて欲しい。

「でも、辞退しちゃった」

「……………何で!?!」

「うちの景品と換えてもらったの。皆でやるからね」

「……………」

お金持ちの感覚って、よく分かんないや。

第四十三奏（前書き）

『けいおん！』は、永遠に不滅だ！！

第四十三奏

クリスマス会当日。

俺は小春と一緒に、会場である唯の家に向かっていた。

「他の人たちつてもう着いてるんじゃないか？」

「先に向かってるって話だから、多分もう着いてるんじゃないか？」

そんなことを話していると、唯の家が見えてきた。

「こんにちは」

「ういゝす、来たよ」

「はい」

中に入ると、憂が出迎えてくれた。

「こんにちは。蓮さんに……え〜っと……」

「佐山小春です。初めまして」

「「こちらこそ初めまして。私は平沢憂です」

小春と憂はお互いにお辞儀を交わす。この二人は本当に中学生か？

「あ。やつほゝ蓮君」

唯……。お前は本当に高校生なのか？

和は遅れてくるそうだから先にシャンパンで乾杯することになった。

「ーと、」でーっと思う節がある。

「いつの間に先生を呼んだんだ？」

「「「「「……………え？」」」」

「いや、思いつきり俺の隣で料理食べてるんだけど……」

そう、俺たちの顧問であるさわ子先生が普通に馴染んでいた。

みんなの反応からして、呼ばれたわけではない。

別に来たこと自体は問題ない。重要なのは――

「さわちゃん！？ どっから来たの!？」

侵入経路だ。

状況的に玄関はまずない。

「玄関から来たなら誰か気づくはずだし……」

どうやら澁も俺と同じ考えに至ったようだ。

「となると、まさか窓から!？」

「やーねえ皆。顧問である私を忘れるなんて」

聞くまでもないと謂った調子で律の意見をスルーした。

「先生は彼氏と用事があると思って呼びませんでした」

「先生って、彼氏がいらっしやるんですか？」

はい、2人の天然により空気がヒヤダ　コくらったみたいに凍りつきました。

「2人とも……」

先生。すごく怖いです。

「罰としてコレに着替えなさい！」

そう言って取り出したのは、2着のサンタクロースモデルのワンピース。しかもスカート部分がかなり短い。

「何でそんなもん持ってるんですか……?」

「蓮君。そこは気にしちゃダメよ！」

そうですか。

「「じゃじゃーん！」」

気が付いたら2人ともサントの衣装に着替えていた。というかどっちもかなりノリノリな気がする。

「ダメね。2人とも、恥じらいが足りないわ」

あなたは生徒に一体何をさせるつもりなんですか？

「「こはやっぱりー」」

次に先生が目をつけたのは、

「ひっ！ー！」

溲だった。

その瞬間、さわ子先生が溼に文字通り襲いかかる。

俺が最後に見た光景がそれだった。

で、俺はどうなったかというと、

「蓮さんは見ちゃダメです！」

後ろから小春に思いつきり目を塞がれてしまった。

どうやら力加減を間違えているようで、後頭部がかなり痛い。

「ちよっ……小春！何か硬いものがあって後頭部から痛いから手を離してくれないか？」

「……蓮さん」

「ん？」

「この際にデリカシーの意味を体で教えてあげます！！」

「なあ小春。何で更に手の力を強くするんだ？このままじゃ目が！目がああああっ！！」

俺が一体何をしたと言っただ!

くしばらくお待ち下さい

「目が潰れるかと思った……」

「もう、お嫁に行けない……」

和が到着した後の会場では、俺と澪がそれぞれ力尽きていた。

「それじゃ、早速プレゼント交換をするわよ」

さわ子先生の一声により、いきなりプレゼント交換が始まった。

どうやらさわ子先生もプレゼントを持ってきたようなので、問題はないだろう。

「それじゃ、いくわよ〜」

さわ子先生が（やさぐれ気味に）歌うジングルベルによりプレゼントがまわされていく。

プレゼント交換って、もっと楽しいものだと思うんだが……。

「ストップ！ それじゃあみんな、手元のプレゼントを開けてね」

その合図と共にプレゼントの流れが止まる。

「蓮君は何をもらったの？」

俺の手元には薄くて四角形の何かがある。

「どれどれ……」

包み紙を破り、中の物を取り出す。

中に入っていたのは――

「……ホラーDVD？」

「あ、それ私のね」

さわ子先生。どうしてこのチョイス？

ジャケットにはでかかどバイオハードという文字があった。

家にはDVDプレイヤーが無いから観るとなら店ぐらいしかないの

だがー

「……………（ガタガタガタ）」

横では小春が恐怖で震えている。

観る機会……あるのか？

「みんなは何が当たったんだ？」

「じゃあ、私から」

ムギがプレゼントを開ける。さて中身は？

「このぬいぐるみすごく可愛いー！」

「あ。それは私のです」

ムギには小春が持ってきたクマのぬいぐるみが当たったようだ。

「じゃあ次はりっちゃんね」

「いくぞ〜。どりゃっ!」

律のプレゼントは……海苔瓶?

「それは私の」

「和ちゃん。お歳暮じゃないんだから……」

唯のツッコミって何気に珍しいな。

「じゃあ次は和ちゃんね」

「私のはーマラカスだわ」

「それは私のだな」

和には澁のマラカスが当たっていた。

「んじゃ次は小春か」

随分大きいけど、何が入ってるんだろう?

「わぁ……。お菓子がいっぱいです!」

「美味しそう」

これは聞くまでもなくムギのdarou。

「澪も開けるよ」

「そうだよ」

「2人とも落ち着け」

「これ……。蓮のプレゼントか？」

「俺以外はみんな女の子だから」

澪が手にしていたのは、小さなネックレスだった。

「何て言うか、その……。ありがとう」

「どういたしまして」

喜んでもらったようで何よりだ。

「お姉ちゃん。私たちも開けよっか」

「そうだね」

2人がそれぞれのプレゼントを開ける。

唯の方は手袋、憂の方はマフラーだった。

「これって……もしかしてこの前マフラー（手袋）なくしたって
言ってたから？」

事情はよく分からんがとりあえず2人とも、良かったな。

「ーってちよっと！ みんな私を忘れてない！？」

「あ……ゴメンねさわちゃん」

消去法でいくと、さわ子先生には律のプレゼントがいつていることになる。

「一体何が入っているのかしーらっ！？」

律のびっくり箱が見事に先生の顔面を捉えた。

「さて、次は何する？」

「コワレてしまったさわ子先生をよそに、俺たちは次に何をするかを考えていた。」

「んっふっふっ」

「えっと……律？」

「コレやるっぜコレ！」

律の手には割られた割り箸が人数分あった。これはまさか、

「王様ゲームか？」

「その通り！」

「りっちゃん！ 私、負けないよ！」

「私も！」

「私もです！」

唯、ムギ、小春、憂は乗り気のようにだ。

「みんなまとめてかかってこい！」

いや律、王様ゲームってそういうゲームじゃないぞ。

「憂もやるつよ」

「うん！」

憂も憂で楽しんでいるようだ。よかったよかった。

「わ、私も負けないからな！」

漣も乗り気のようにだ。好きなのか？ 王様ゲーム。

「よし。それじゃあ蓮もいくぞ！」

あ。俺に選択の余地はないんだ。

こうして、急遽王様ゲームが始まった。

第四十四奏（前書き）

実はけいおん！！の番外編をまだ観てません……（泣）

第四十四奏

突然だが、ここで今回やる王様ゲームのルールを説明しよう。

?まず1人1本ずつ割り箸を取る。

?その中の1本だけには王冠が描かれており、それ以外は数字が書かれている。

?王冠の描かれた割り箸を取った人は好きな命令と、その命令を実行する人を数字で選ぶ。(例:3番の人が する)

?王冠の命令に逆らってはならない。

?ただし、王様は不埒な命令をしてはならない。(ハグはOK)

こんな感じ。ちなみに最後の項目にあるハグOKを提案したのは、なんとあの溲だった。

「よし、割り箸を持ってー」

律の音頭でみんなが1本ずつ割り箸を掴む。

「せーの」

「王様だーれだ!」

「アタシだ!」

いきなり律かよ!?

「じゃあ……5番と1番の人が何か一発芸をする!」

俺は3番だから違う。さて1番と5番は――

「私1番です」

憂と、

「はーい。私5番です」

ムギだった。

2人とも何か持ちネタってあるのか?

「じゃあ、私からいきます」

憂は手にはめるサンタとトナカイの人形を1つずつ取り出すと、それを両手にはめて人形の口をパクパクと動かした。

「こんにちは。みんな、メリークリスマス」

「蓮さん！ サンタの人形が喋ってます！」

「落ち着け小春。あれは腹話術だ」

それにしても、まさか憂にそんな特技があるとは思わなかった。

「憂ちゃん、一発芸出来たんだ……」

律も同じことを思っているようで、驚いた口調になっている。

「いえ、お姉ちゃんがクリスマス会当日に1人1つずつ芸をやるかもって言ったので」

「まさか言ったことが本当になるなんて思わなかったよ」

「ってことは、まさかゼロの状態から練習したのか!？」

「はい」

たった数日で腹話術を身につけるとは……相変わらず恐ろしいな。

「次はムギちゃんだね」

「私は物まねやりまゝす」

ムギはその場に立ち上がり、右手を頭の上に、左手を顎の下に当ててクネクネと動かした。

「ムギ。それは何の真似だ？」

「マンボウの真似でした」

何……だと……？

「よ、よし。じゃあ次いくか！」

呆気に取られていた俺たちを引き戻してくれたのは、律だった。

「せーのっ」

「「王様だーれだ!」」

「私だよ」

今度は唯か。

「えーっと……2番の人がサントさんの服を着る!」

絶対に当たりたくない命令だ。

俺の番号は1ー3番だ。助かった。

「わ……私だ」

漣が顔を真っ赤にしながら、2と書かれた割り箸を俺たちに見せた。

「漣。ガンバ!」

「いきなり何を言い出すんだ蓮! というか、恥ずかしい……」

「大丈夫だって。絶対似合っから」

「……本当か?」

「……ああ！俺が保証する」

一瞬見せた澪の上目遣いが結構色っぽく、返答が遅れてしまった。

「……なら着る」

そう言った瞬間、澪はサンタの服を掴んだと思うといつの間にか階下に消えていた。

数分後

「や……やっぱり恥ずかしい……」

階段のそばでサンタの服を着た漣が恥ずかしげに立っていた。

「漣ちゃん。その服よく似合ってるよ！　ねえ蓮君？」

「唯の言う通りだ。すごい似合ってるぞ」

漣を励ます意味を込め、親指を立てながら言う。

「……………」

それを聞くやいなや、漣はまた早足で階下に消えた。

漣、よく頑張った。

「よし。これでラストだ！」

私服に着替えた漣が戻り、最後の王様ゲームが始まった。

「せーのっ」

「「「王様だーれだ！」「」」

「私だ」

最後は漣か。

「じゃあ6番の人がー」

漣が言葉を途中で止めて、思案顔になる。

ヤ、ヤバい。

何を命令するつもりなんだ？

「蓮さん。汗だけですけど大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「蓮、お前まさか……」

「ど、どうした？ 漣」

漣の疑り深い視線に耐えきれずに目をそらす。

そんな対処法で大丈夫かって？

大丈夫だ。問題ない。

「漣さん。命令は決まりましたか？」

ナイス小春！ これでみんなの注意が俺から漣に向くはずだ。

「で、その漣なんだけど」

律の指差す方を見つめる。

「ちよつきからずっと」の調子だぜ？」

「……………」

溇の思考が……止まっている……？

「溇ちゃん！ 大丈夫！？」

「ん？ ……ああ。私は大丈夫だぞ〜ふふふふ〜」

「いや、それ絶対大丈夫じゃないから！ 憂！ ちよつと氷を頼む！」

「わ、わかりました！」

「これで涼しくなるかな？」

「ムギ。気持ちはすごく〜くありがたいんだけど、手であおぐだけじゃちよつと……………」

「ねえ小春ちゃん。軽音部っていつもこんな感じなの？」

「詳しくはわかりませんが、少なくとも私がいるときはこんな感じ
です」

そのまま王様ゲームは中止となってしまった。

「「「おじゃましました」」」

王様ゲームが中止になった後、ムギが福引きで当てた（交換しても
らった）ボードゲームをやったり憂の手料理をみんなで食べたりし
て、クリスマス会は幕を閉じた。

外は少し暗く、女の子だけで帰るのは危ない。ということとで、自宅
の場所を考慮して小春、和、律、澁の順番に家に送り届けた。

そこで今はその帰り道。

「眠い……」

友達から教わったポケ　ンの努力値とかいうやつを昨日徹夜で試していたのが原因なのか、現在かなりの眠気に襲われている。

「しゃーない。ちょっと寝るか」

あまりに眠いので近くの公園のベンチで仮眠をとることにした。

そう。5分だけ……。

『……………ん……………蓮……………』

誰かの声が聞こえる。それに首辺りがなんか暖かい。

「ふう。やっと起きたか」

目を開けると俺は見覚えのないマフラーをしており、横には漣が座っていた。

しかも寝始めた時はまだ明るかったけど今はもう真っ暗だ。

一体何時間寝てたんだろ。

「雪が降ってる中で寝てるのを見た時はびっくりしたぞ」

漣が言うには、翌日の食料を買い出し中にベンチで寝ている俺を発見した。そこで家に戻ってマフラーをもう一つ持ってきて俺にかけてくれたらしい。

「マフラーありがとな、漣」

「ん？ ああ……うん……」

漣の顔が少し赤くなっている。やっぱり少しの間とはいえ寒マフラー

ーをしてなかったから冷えたんだろっ。

「そういえば、王様ゲームでお前最後6番を引いたんだろ？」

「うっ……バレてたか」

「あれで隠し通せると思ってたのか……」

漣が額に手を当てている。そんなに下手だったか？

「……6番の人は、この後王様の買い物に付き合っ」

「漣？」

「王様の命令。確かあの時は何も命令してなかったからな」

「なるほど。それで今か」

「ああ」

雪が降る中、漣が明るく微笑んだ。

「ほら、早く行くぞ」

「おう」

溼の後に続いて俺も歩きだした。

まじい命令もありか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3036i/>

軽音部活動日誌！

2010年10月13日11時51分発行